
流星のロックマン【スペシャル・ストーリー】

勇輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン【スペシャル・ストーリー】

【Nコード】

N3355G

【作者名】

勇輝

【あらすじ】

ラ・ムーの撃破から1ヶ月……。その後のスバルたちの様子のぞいてみましょう。（なお、この小説を読む読者は流星のロックマンを知っているという前提で書いてます。）

あれから1ヶ月……。

ラ・ムーの撃破から1カ月後……

ツンツンの髪にメガネを頭にかけ、ペンダントをつけている少年。
この子が地球の危機を2度も救った「ロックマン」こと「星河スバル」である。
そして、そのスターキャリアー内にいる居候が「ウォーロック」である。

その2人のその後を見てみよう……。

「オイ！ スバル！ 起きろ！」

「うーん……」

ガバツと起きた僕。

「どんだけ、言わせりゃ起きるんだてめーは！」

「わかったわかった。今から着替えるから待っててよ」

すばやく着替えて下へ行く。階段を下りていると一通のメールが来た。

「誰からだよ？」

「あっミソラちゃんだ。何だろう」

メールの内容

【今日の朝絶対驚くから楽しみにしててね！（笑）】

「何だろう。驚くことって…」

「まあ良いじゃねえか。さっさと飯食って学校行くっぜ。」

そして朝食を済まして、洗顔・支度をして……。

「いってきまーす」

「行ってらっしやい」

すると目の前には例の3人がいた。

委員長こと「白金ルナ」 背を伸ばしたがっている天才(?) 「最
小院キザマロ」 牛井は3杯食うおおぐらいの「牛島ゴンタ」 が
いた。

「スバル君ったらいつも遅い！ 普段より10分速く起きなさい！」

「ハイハイ…わかったよ…」

そして学校の教室について先ほどの3人としゃべっていると、育田先生が入ってきた。

「よしみんな席につけ」

全員が挨拶をすると…

「え、今日から転校生がやってくる」

「さあ、入っておいで」

ガララ

そして入ってきた人とは……！？

それは、緑と青の混ざった色の瞳に人々を魅了させる顔つき、そう。大人気アイドルこと、

「響 ミソラ」である。

「みんな、仲良くしてやれよ。席はちゃんと星河のところが空いて

るから、そこに座ってく
れ」

「はい」

颯爽とあるく姿。人を知らず知らずのうちに魅了させてしまつ。

「ひさしぶり！ スバル君！」

「うん。久しぶり」

「ケツ。どおりでFM星人の気配がしたわけだ」

「ポロロン。久しぶりね、ウォーロック」

「ハア、なんかややこしいことになりそうだけ…」

いろいろとぼやいてるウォーロック。

そして放課後…。

「なんでアンタがこの学校に来たわけ？」

半分怒ってる委員長。

「今度のドラマの撮影がこのへんで行われるし、そのドラマの内容が学園ものだからちょっと

学校にいつてその雰囲気になじむという理由だよ」

「なるほどね。家とかはどうすんのよ？」

「監督が泊まるならいちばん親しい子の家に行ったほうがいいという事でスバル君の家に泊まらせてもらうことにしたよ」

「え??? そうなの!??」

「スバル君どういうことかしら? 明日学校できっちり聞かせてもらうからね。」

委員長がむちゃくちゃ怒っている。

僕は逃げる気持ちしかなかった。

「ミソラちゃん逃げよう!」

「うん!」

スバル邸

「全く本当に委員長とかやはめんどいやつだ」

「まあウォーロックそんな怒らないだよ」

「……………」

ガチャ

「さあミソラちゃん入って良いよ」

「お邪魔します……………」

「とりあえず母さんがくるまで僕の部屋にいようか」

「わかった!」

ミソラちゃんの満面の笑顔。

それに、スバルも笑顔で答えた。

あれから1ヶ月……。(後書き)

はじめまして！勇輝です！

最近小説家（？）になったばかりでぜんぜん内容もだめかも知れませんがご了承ください。

また、ぼくのメイン小説の「教師上等」もよろしくお願いします。

ミンラの嬉しさ(前書き)

お詫び

前回第1話で星河が星川になってました。

誤字があったことを読者の皆様に深くお詫び申し上げます。

ミソラの嬉しさ

僕はミソラちゃんに言った。

「ちょっとおやつ取ってくるから待っていてね」

「うん。わかった！」

〈ミソラ視点〉

スバル君は下に下りて行って私はこう思った。

（スバル君のお部屋って本当に宇宙関連の本ばっかね…）

私は暇だったので本棚から本を読もうとした。
すると下の段に1枚のCDが置いてあった。

それは私が最近リリースしたCDだった。

（スバル君、私の事こんなに応援してくれているんだ…）

私はふいに涙が出てきた。そして、その場で泣いてしまった。

（スバル視点）

「ミソラちゃん、おやつ取ってきたよ……」

僕は泣いているミソラちゃんをみつけた。

「ミソラちゃん！？ どうしたの!？」

「スバル君、ありがとう……。本当に私の事を応援してくれている人がいてくれて嬉しかった」

たの

天使のような涙の粒が僕の手の上に落ちた。

その涙はミソラちゃんの嬉しさがこもっていた。

「僕だって、ミソラちゃんとブラザーになったとき1歩前に踏み出して今、こんな幸せな毎日を送れていることに嬉しいよ」

ミソラちゃんの涙はとまった。

「さあ、おやつでも食べようか」

さっきの顔とはまるで違う笑顔をだした。

「うん！」

それからいろいろなことをしゃべった。仕事の事・宇宙のこと・家族のことなどを。

そして気づいたらもう6時だった。

「ただいま」

あかね（母）の聲が家に響く。

「スバル、ちょっと来て」

階段を下りるとあかねがいた。

「何？」

「ミソラちゃんは来ているわね？」

「来ているよ」

「本当は、ミソラちゃん用の部屋を用意したんだけどまだ準備が終わっていないから今日だけ」

スバルの部屋で寝かせてくれない？」

「……………うん……わかった！」

「じゃあ夕御飯ができるまで部屋で待っていてね」

階段を上るときウォーロックが声をかけた。

「まったく、お前はいい奴だな」

「何で？」

「だって普通あいつときオフクロの部屋で寝かせてもらっのが普通だろ？」

「そうだけど…。だって母さん怒ると怖いんだもん」

「地球の英雄はオフクロには勝てねんかい！」

と鋭い(?)ツッコミをいれるウォーロック。

「まいいや、とりあえず部屋で待ってよっせ」

「うん……」

ガチャ

「ミソラちゃんおまたせ」

「何だったの？」

「いや、特になんでもないよ」

「そっか」

ミソラちゃんはスバルの部屋に唯一あつた小説を読んでいた。

30分後…。

「スバル〜ミソラちゃん〜御飯よ〜」

「はい」

さあ、次回は夕食から始まります。 ><

ミシラの嬉しさ(後書き)

第2話です！

まあ、皆さんこれからも僕の小説たくさん読んでください！
では……。

See you again……。

夕食の会話

「スバル〜ミソラちゃん、ご飯よ〜。」

「はい。」

2人はご飯を食べるため階段をおりた。

そして、2人が席について……

「いただきます！」

あかねから話を切り出す。

「それにしても初めてよね〜スバルが女の子をつれてくるなんて。」

なんとなくテンション高めのあかね。

「それにしてもビックリした。急にミソラちゃんが僕の家にくるなんて。」

「言わなくてごめんね。」

エメラルドの瞳をスバルに向けて言った。

スバルはつい笑顔がこぼれてしまった。

「ミソラちゃん。」

「お母様、どうしました。」

「ミソラちゃん、これからもスバルの家に泊まっていくなだから、
れからは星河家の一員とし」

て私の事はお母さんって呼んでいいのよ。」

ミソラは お母さん という言葉に動揺した。

ミソラは幼いころ母親を亡くしてしまったのだ。

「はい、お母さん。」

スバルは2人のやり取りをみて自分の部屋に戻った。

「・・・？」

ウォーロックは何か胸騒ぎを感じていた。

そう、今にも来そうなこの恐怖感。

(まあ、そんなわけないよな。)

「さて本でも読むか。」

「お？お前が本だつて？珍しい事言っじゃねえか。」

ウォーロックがそんなことを言うがスバルは「ウォーロックに言われたくないよ。」と正直心

で思った。が、口にはしなかった。

スバルが取り出した本は……

「宇宙の広さ」だった。

「やっぱり宇宙の本かよ！」

ウォーロックはずっこけた。

「あのようスバル、漫画とか雑誌とかはないのかよ……。」

「昔持ってたけど、親戚にすべてあげちゃった。」

正直ショックだった、ウォーロックだった……。

20分後……

「スバル君。」

「ミソラちゃん。皿洗いとか終わったの？」

「全部やったよ」

満足気にいう、ミノラ。

「さうして宿題でもやるのかな？」

「私もやるつと。」

宿題は2人でやったので案外早く終わった。

「これからどうする？」

という、スバル。

「電波変換して夜の街に遊びに行かない？」

「いいねー」

さうそく2人は……。

「電波変換！星河 スバル！オン・エア！」

「電波変換！響 ミソラ！オン・エア！」

夕食の会話（後書き）

皆さん、応援ありがとうございました！

結構、流星のロックマンについてはまだまだ知らないことばかり
なんで、これからも頑張りま〜す！

絆、そして……。

電波化した2人は相談を始めた。

「これからどこへ行く？」

唐突な発言をするミソラ。

しかし、スバル本人も娯楽施設なんて全然知らない。

強いて言うなら例の展望台ぐらいである。

「ミソラちゃんにまかせるよ。」

「じゃあ……ロツポンドーヒルズなんてどう？」

「いいね！なんか、凄い久しぶりにその言葉を聞いた気がする（笑）」

「じゃあ、いこっか！」

ミソラは曇りのない笑顔を出した。

それは、まるで全ての悩みでも取っ払うかのように。

しばらくすると2人は電波化を解除し、ロップンドーヒルズを遊びまわった。

すると、スバルはあるものを見かけた。

「あれ？これミソラちゃんのCMじゃない？」

「なんか、自分が映っているCM見ると凄く恥ずかしい……。笑）」

ミソラの顔は真っ赤だった。

「でも、なんとなくその気持ちわかる気もする（笑）」

2人とも笑いあった。もはや、2人は友達ではなく、まるで恋人みたいな雰囲気になっていた。

さすがにミソラは遊んで疲れたのかベンチに座りたいといった。

そして、2人はベンチに座った。

「スバル君って前より大人というか男っぽくなったよね。」

スバルは少し顔が赤くなっている。

「皆との出会いや、さまざまな困難、戦い、皆の支えによってスバル君は本当に成長したな。」

って思うの。やっぱりスバル君の言っとおり絆によって人は強くなれるんだって思ってきた。

今思うとスバル君との出会いによって人生がかわった、そんな気がするんだ。」

ミソラの力強い言葉でスバルは少し元気になった気がした。

ところで、今何時だろう?と思いスターキャリアをみた。

すると、スターキャリアーの様子が少し変わっていた。

それは、キズナリヨクが少し増えていたのだ。

「ありがとう。ミソラちゃん。」

自然と言葉に出していた。

ミソラも自然と言葉に出していた。

「どういたしました。」

と。。。。

こうしてまた少し2人との絆は深まっていった。

2人はゆっくりしていると、すでに10時を切っていた。

「ミソラちゃん、かえろっか。」

「うん。」

2人は電波化して家にかえった。

すでにあかねは寝ていた。

「僕も風呂に入って寝ることにするよ。」

「私、そのあとに入るから。」

スバルは階段を下りていった。

ウォーロックが声をかけた。

「スバル、前から気づいていたんだがなんか嫌な予感がする。気を
つけるよ。」

「うん。どつせハイドとかじゃないの?」

「いや、ちょっと違うんだ……。とにかく気をつけておけよ。」

「うんわかった。」

こうして、2人は風呂に入って寝た。

2人の寝顔は幸せそうだった……。

絆、そして・・・。（後書き）

皆さん、応援ありがとうございます！

皆さんの応援で僕も頑張れる気がとてもします！

これからもよろしくおねがいします。

では、皆さん

See you again・・・

正体（前書き）

長々と言ってますませんが、この小説は、（今は）メテオG事件は無いものとします。そのうちに3で出てくる人物も出てきますので、お楽しみに！！

正体

翌日

ミソラは今日はドラマの打ち合わせがあるため、学校は欠席するらしい。

打ち合わせのため、ミソラは早朝に家を出て行った。

で、朝はここから始まる……。

「オイ！スバル！また俺が起こさなきゃなんねえのかよ！いい加減起きろ！！」

一発目からウォーロックはぶちぎれた。

「わかったよ。」

スバルはおきて下で朝食を食べに行こうとしていた。

すると、ウォーロックが警戒を促した。

「どうしたの？」

「昨日と同じ気配がする！この、憎悪感。ハンパねえぞ！！」

ものすごい剣幕でウォーロックは言い放った。

「いつ襲い掛かってくるかわかんねえぞ！気をつけろ！！」

「うん、わかった。」

ウォーロックが注意を促すと、いつも通り朝食を食べ学校に行った。

だが、特に何も無く学校の教室に着いた。

「ス〜〜バ〜〜ル〜〜君！！」

ものすごい形相で委員長がスバルのところに駆け寄ってきた。

「な………何？」

スバルは顔が引きつっている。

「なんでミノラちゃんがあんたの家に居候することになったのよ
!?!?」

「「そうだそうだ!!」」

ゴンタとキザマロも増援にきた。

「それは……………」

スバルは今までの経緯を全て話した。

「なるほど。そんなだったら納得してあげるわ。」

委員長は納得してくれた。

「まあ、そうだったら……………」

「今回は目をつむりましょう。」

ゴンタ・キザマロも納得してくれた。

そして、HRが始まり、授業が一通り終わって昼休みになった。

スバルは給食を食べて屋上に行った。

今日は快晴だった。下にはヒマワリが元気に咲いていた。

「今日は平和だね。」

「ああ、平和なものいいけどたまには暴れてえもんだ。」

「もう、ロックたらずぐそんなことを言う。」

半分スバルはあきれていた。

するとウォーロックの顔が険しくなった。

「スバル、気をつける！ついに奴がくる！！」

「クッククク……。初めまして、星河スバル君。いや、ロックマン……！」

ウォーロックとスバルの前に現れた人物は……！！？

「誰だ！？」

「私はハイドの兄、カイドだ。」

「お前が俺に何のようだ！！？」

「復讐さ。貴様は私の大事な弟を殺した。したがってロックマン！
！貴様を始末する！！」

「ヘッ。そんなんだったらやってやるぜ！行くぞスバル！！」

「うん……！」

そして……

「電波変換！星河スバル！オン・エア！！」

そしてスバルは青き戦士「ロックマン」に変身した・・・。

正体（後書き）

どうでしたか？

この小説を機に作者として頑張りたいと思うので、皆さん応援よろしくお願いします！

では、次回をお楽しみに。

Future

「弟への恨み、今晴らしてやる!!」

「見ていやがれ!俺たちの実力を!!」
「すごい自信満々にいうウォーロック。」

「ロックバスター!」

数発撃つたが全てかわされた。

「今度はこっちの番だ!メテオ・ストライク!!」
無数の隕石がロックマンめがけて降り注ぐ。

「うわ~~~~!!!!」

数発の隕石が当たってしまいロックマンは瀕死状態になっている。

「オイ!スバル!しっかりしろ!!」

「.....」

何の応答も無い。

「畜生!俺たちはここでオダブツかよ.....!!」
ウォーロックが半ば諦めている。

「これでとどめだ!!メテオ・ソード!!!!」
ウォーロックは「もうダメだ!」と思っていた。

その時だった。

ガキン！！

鈍い音がした。

「何！？」

驚いた表情でカイドが見ていた。

なんとロックマンが消えていたのだった。

「クソ・・・逃げられたか・・・。まあいい。この復讐必ず果たして見せる！！」
そしてカイドが消えた。

その後、スバルは保健室に移動していた。

「うん・・・？」

スバルは目が覚めたようだ。
すると目の前には必死に手を握っていたミソラがいた。

「ミソ・・ラ・ちゃん？」

「あ！起きた！！」

「どうして・・・？仕事じゃなかったの？」

「今日は打ち合わせだったから早く学校に来れたの。私も屋上に行こうとしていたら、電波変換して戦っているスバル君がいて倒れていたから私も電波変換してスバル君を助け出して来たってワケ」

「そうか・・・。あの人凄い強かった。隕石を自由自在に操る魔術師みたいだった。」

「そっか。でも大丈夫だよ。だってロックマンは私のヒーローだもん！」

満面の笑みで答えたミソラ。

「スバル。またいつ襲い掛かってくるかわからねえ。これからも気をつけるよ。ハーブの仲介には感謝するぜ。ありがとよ。」

「ポロロン。久しぶりにロックの感謝の言葉を聞いたわ。」

「うるせえ！」

2人と2匹（？）のやり取りはまるで漫才みたいだった。

これから、自分は一体どうなってしまうのだろうか・・・。
そんなことを不安に思ったスバルは単刀直入に聞いてみた。

「ウォーロック。」

「あん？」

「これから僕ってどうなっちゃうんだろぅ……。」「

ウォーロックは久しぶりに不安になっているスバルをみた。ただ、ウォーロックもその気持ちはわかる気もした。

「さっきのミソラって奴の言葉を覚えているか？」

「え？」

「ロックマンは私のヒーローだって言ってたじゃねえか。」

「ああ、うん……。」「

「だから、絆を信じて戦えば必ず勝てるんじゃないか？」

「……。そうだね。」「

「ああ。とりあえず今は休んでろ。」「

「うん。」「

その後授業後までスバルは保健室で寝ていたのであった。

F u t u r e (後書き)

どうでしたか？

バトルシーンは初めてだったのでちょっと心配ですが・・・。

まあ、これからも期待していただきたいと思います。

ではまた次回をお楽しみに！

S e e y o u a g a i n

ミソラの心

学校から帰ってスバルは部屋に行ってベッドで寝た。

スバルの顔は苦しそうだった。

あの時の隕石で火傷を大量にしてしまっていた。
そんな苦しそうなスバルの顔をミソラは見ていた。
見ていたミソラまでもが苦しそうだった。

「スバル君、大丈夫？」

心配そうに声をかけるミソラ。

「うん、気にしないで。アツツ……。」

「本当に大丈夫？」

「なんか、体が熱いし、痛くてしょうがないんだ……。」

やっぱりスバルは苦しそうだった。

ミソラは何か自分には出来ないのかと考えた。

そのとき、ハーブが声をかけた。

何か、名案でも浮かんだんだろうか？

「ミソラ……。スバル君のために料理をしてみたらどう？」

「え〜〜！私、料理なんか出来ないよ〜〜！」

「大丈夫よ、母親の部屋で料理の本でもかりて読んだら??？」

「うん、わかった。やってみる!!」
「その意気よ!」

早速ミソラはあかねの部屋に侵入した。

あかねは本好きなのかメチャクチャ本があつて、料理の本さえ探すのに苦労する。
5分かかつて、やっと見つけた。

「ハープ、これじゃない?」
「何々・・・クーパー5分クッキングねえ・・・。いいじゃない。
早速これで作りましょう!」
「うん!」

キッチン

「ミソラ、えいと、これなんかどう?」
「豚のしょうが焼きか! いいね、これ作ろう!」
「じゃあ・・・レツクッキング!」

作る過程は省略させていただきました。お許しください。

調理終了

「やった・・・！できた・・・！！！」

「凄じじゃないのミソラ！！・・・でも顔がちよっと黒く
なっているわよ・・・。」

「良いじゃない。あとで拭けば」

そう、誰がどう見ても立派な「豚のしょうが焼き」が完成したのだ。

「味は・・・。」

パクッ

「美味しい〜〜〜！！！」

「やったわね。ミソラ！」

「うん！！！」

ここで顔を拭いて・・・。

「スバルくん」

ベッドではうなされているスバルがいた。

「スバル君！」

「何？ミソラちゃん？」

「あのさ……これ食べてくれない？」

「僕のために……？」

「うん！」

スバルはしょうが焼きを食べた。

そのとき、スバルは目を大きくさせた。

「美味しい……？」

自信と不安が混じった声で問う。

すると……。

ギョッ

(え……???)

なんとスバルはミソラに泣きながら抱きついたのだ。

「ミソラちゃん……。ありがとう……。」

「ぼくのためにこんなとても美味しいしょうが焼きをつくってくれ

てありがとう・・・・・・・・。「」ミソラちゃんは最高の大切な友達だよ・・・・・・・・。「

「改めてもう一回言っよ・・・・・・・・。ありがとう。ありがとう。」

ミソラは抱きつかれたとき何か胸がときめいていた。そして・・・・・・・・ミソラまでもが、涙を流したのだった・・・・・・・・。

ミシラの心（後書き）

どうでしたか？

なんかすんごい展開になっているんですが……。

読んでくれてありがとうございます！

感想待っています！！

では……

See you again……。

ミソラの気持ち

あれから、スバルはミソラを2分程度抱いていた。

実際スバルはこのとき抱いているという感覚があまり無かった。

そして、スバルはミソラを抱き終わるとそのままボタンと寝込んだ。
ミソラはスバルの近くにずっといて看病してあげていた。

とは言っても暇なので、本を読んでいた。

「ポロロン。ミソラ、最近宇宙の本読んでいない？」

「何気に宇宙について興味持ちっちゃったんだよね（笑）」

「なんか、ミソラってそんなキャラだったっけ？」

「良いじゃないのよ。キャラなんて。」

なんか冷静に答えるミソラにハープは戸惑った。

「ただいま。」

あかねが帰ってきたようだ。

「お帰り〜。」

ミソラは走って下へ行った。

「ポロロン。ミソラ、なんか変わったわね。」

「あら、ミソラ。仕事は無かったの？」

「うん。今日は打ち合わせだったから早く帰してもらえた。」

「そう。じゃあ早速夕食の準備を手伝ってちょうだい。」

「はい。」

40分後・・・

52

「じゃあミソラ。スバル呼んで来て。」

「お母さん。スバル君、今寝込んでいるんであとにしてあげて。」

「そう。わかったわ。じゃあいただきます。」

「いただきます。」

普通に始まった何気ない夕食のスタート。

しかしこのあと、会話はヒートアップする・・・。

「ミソラ。」

「何？」

「ミソラってスバルの事どう思う？」

「どっつて？」

「いや、だから好きなのかって事よ。」

ものすごい質問にミソラは戸惑ってしまった。

ミソラ自身もよくわかっていなかった。

スバルに対する思いが……。

とりあえず今思っていることを言った。

「スバル君は……大切な友達です……。」

これが精一杯の答えだった。

「そう。わかったわ。」

後々、何でそんな事聞いたんだろう？と、ミソラは思った。
さらに、あかねはこんな事まで聞いてきた。

「じゃあ、ミソラ。スバルはかっこいいかしらね？」

「うん、普通にかっこいいよ。ロックマンになるともっとかっこいいけど……。」

「え？ロックマンって？」

「あ、いや何でもない。」

「そう……。」

あかねは満足気に言った。そしてその後普通に夕食を摂った。

夕食終了

「「ご馳走様でした。」」

その後、ミソラはあかねの手伝いをして上が上がっていった。すると、スバルは普通に起きていた。

「え?? スバル君、体大丈夫なの??」

「うん、まだ痛いけど普通に動けるようになったよ。」

「そっか じゃあ下でご飯でも食べに行ったら?」

「そうだね。じゃあ下でご飯食べてくるよ!」

笑ってスバルは1階に行った。

このときミソラは自分の気持ちを確認した。

(やっぱり自分はスバル君の事が好きなのかも知れない.....)
と.....

ミソラの気持ち（後書き）

どうでしたか??

なんか、1回こうしたかったのでやっちやいました。（笑）

感想待っています!!

では、

See you again.....。

流星

スバルが下へ降りていくときウォーロックが声をかけた。

「オイ、スバル。」

「何？」

「お前体は大丈夫なのかよ？」

「だんだん痛みはひいてきたみたい。」

「そうか。これからいつカイドが襲い掛かってくるか、わかんねえぞ。常に気をつけておけ。」

「うん。」

「あとさ、ミソラとか言う女にお前抱きついていただけ、お前、まさかミソラの事好きなのか？」

「え??何のこと?」

「いや、だからお前、ミソラって奴に抱きついていたじゃねえか。」

「え!!!?そうなの!??」

「ああ。」

「そっか……。あとでミソラちゃんに謝っておこう。」

「案外、謙虚だな……。」

下へつくとあかねの用意した、ご飯が置いてあった。

スバルはそれを食べると、すぐ、上にのぼって行った。

ガチャッ!

「ミソラちゃん!」

「どうしたの?」

「僕さ、ミソラちゃんに抱きついたの!?!?」

「……うん……」

「嫌だったよね……。ごめん!全然そのとき意識が無くてさ……」

「

「大丈夫だよ。全然気にしないで。」

「ありがとう……」

「うん!」

そして2人は……。

「展望台……行く?」

「うん!」

こうして2人は展望台へ行った。

今日は快晴なので、星がよく見える。

しばらくすると、2人は展望台へついた。

2人は空を眺めた。

星の話になると、スバルはものすごい熱意で話す。

その話にもソラは頑張っについていった。

「ミソラちゃん。」

「何??」

「今日さ、うわさでは流星が見えるんだよ。」

「へへへ。私、見たい!!!」

「もうすぐしたら流れると思うよ。」

15分後・・・

「あつ!!」

スバルが思わず声を出した。

「うわ~~~~綺麗~~~~!!!」

ミソラも感嘆の声をあげる。

沢山の流星が流れていく。

それはまるで宝石でも流れるかのようにな。。。。。

「私たちは。。。。。」

ミソラが声を出す。

「いつまでも絆で結ばれているんだね!!」
「うん!これからもずっと友達でいようね。」
「うん!!」

曇りの無い笑顔でミソラは答えた。

そのとき、スバルの後ろに奴がいた。

「ロックマン……。貴様を始末してやる……………」

カイドだ。

そう。カイドの計画は順調に進んでいる。

スバルたちは知らないのだ。

そう。この事件は奴がボスであることを……………。

流星（後書き）

どうでしたか？

この、小説を書いていて楽しくて仕方がありません！

ぜひ、感想ください！

では・・・

See you again・・・。

学力テスト

翌日。

スバルはまた、ウォーロックに起こされていた。

やっぱりミソラは仕事でいなかった。

スバルは朝ごはんを食べて学校へ行った。

教室へつくと、真っ先に委員長こと「白金 ルナ」が話しかけてきた。

「おはよう。スバルくん。」

「おはよう。委員長。どうしたの？浮かない顔して。」

「ここどころ、睡眠不足なのよね……。」

「じゃあ、楽しい事を沢山すれば良いんじゃない？」

「そうね……。でも実際何すればいいのかしら？」

スバルは1つルナに提案をした。

「委員長ってまだロックマン好き？」

「もちろんよ。愛しのロックマン様に会いたいわ……。」

「じゃあ、会わせてあげよっか？」

「どうやって？」

「僕が委員長の部屋の電波へ行くよ。そしてビジュライザーでロックマンにあえば良いんじゃない？」

ものすごい大胆な発想だがたまには良いかなと思ひ提案してみた。

ルナは簡単に受け入れてくれた。

「恩にきるわ、スバル君。じゃあ夜に来てちょうだい。」

「うん、わかった。」

すると、HRのチャイムが鳴り、育田先生が入ってきた。

「え、皆に連絡がある。来週、本校恒例の学力テストがある。今日からしっかりと勉強をするんだぞ。」

「はい！」

スバルは学力テストのことを知らなかった。

隣にいるツカサに聞いてみた。

「ねえツカサくん。学力テストって何？」

「そっか、スバル君は初めてなんだよね。」

「うん。」

「学力テストっていうのはこの小学校の夏休みと冬休みと春休み前にある、学年全体の大きなテストなんだよ。このテストで上位を取れば賞状や副賞だって貰えちゃうんだよ。」

「へえ……。」

スバルはややこしい事になったなと思った。
ところが次のツカサの言葉でその気持ちは吹っ飛んだ。

「今回の副賞は望遠鏡だよ。」

「!!!!!!」

これは取らなくてはと思った。

学校が終わって、早速家に帰って勉強を始めた。

しかし、スバルはあまり勉強していなかったせいで、全然わからない。

「うあ~~~~~!!!!!!」

つい、大声を出してしまったスバル。

「大丈夫か??」

ウォーロックが助けに入った。

「もう全然わからない〜〜〜!!!」

「勉強していなかったお前が悪いんだろが。」

「だって……。」

「んじゃあ、自分の得意な科目からやれば良いじゃねえか。」

「というと、理科か……。」

「へえ、お前理科好きだったのか……まあ確かに絵面は合うな。」

「やった!!!」

「どうした??」

「理科の範囲、宇宙・天体についてだ!!!」

「お!お前にしてはバツチリのあいてじゃねえか。」

「よし!頑張ろう!!!」

こうしてスバルの勉強は始まった……。

学力テスト（後書き）

どうでしたか??

なんか、1回こんなことをしてみたかったんで、こつこつ展開にし
ちやいました（笑）

感想待ってまゝす。

では・・・

See you again・・・。

ミソラのライブ

スバルが必死に勉強すると、ミソラから、電話がかかってきた。

「あ！ミソラちゃん！！！」

「やつほー スバル君」

「どうしたの??」

「あのさ、もうすぐ私のライブがあるんだけど、来ない?」

「どこでやるの??」

「展望台だよ!」

「わかった!今から行く!!」

ガチャッ

スバルは急いで展望台へ行った。
なんか、久しぶりな気がした。
ミソラの歌を聞く、ということが。

スバルは展望台についた。
もうすぐライブが始まりそうだ。

そして……。

「「わーーーーー!!!!!!」」

普段の服装とは違うミソラが出てきた。

上はちっちゃいネクタイがついている、スーツ(?)っぽいものに
下はミニスカートとなっていた。

「皆さん！響ミソラです！！集まってくれてありがとうございます
」

「今日は新しい曲を書いたので、ここで発表したいと思いますが、
今回はラップなので、なんかすごい緊張しますが頑張りま〜す!!」

「では、聞いてください。。。存在という歌です。。。」

全員が静かになる。

「絆の力信じて 仲間と共に強くなる 1人では出来なくても
2人なら分け合える

君は1人じゃない…………… 君はきつと周りに支えら
れている……………

負けないで 孤独の力に 友達 なくなるより自分が消えた
ほうがマシかい？

そんな事 言わないで 君は大事な存在だよ……

Your my great exicetence .

Really?

Yes!

.....
You are my best friend.....
「.....」

パチパチ.....!!

たくさんの拍手がミソラを包んだ。

そのときスバルは涙が出ていた。

そう。それは突然のように……。

「皆さん、聞いてくれてありがとうございますとづいざいました!!また、会える
日まで……!!」

こうしてミソラはステージを降りていった。

そして、スバルも家に帰って行った。

くスバル邸く

スバルはまた、勉強していた。

しばらくすると、ミソラも帰ってきた。

「ただいま〜！」

ドタドタと上がってくる足音が聞こえてくる。

「スバル君〜！」

「どうしたの??」

「聞いてくれた!? 私の新曲!??」

「うん！」

「感想は??」

「なんかね、心に響いた。あと、昔の記憶が蘇ってきたんだ。昔の自分に聞かせてあげたいなって思ったよ。」

「そっかぁ ありがとね！」

「いいよ、全然。」

スバルは気づいていなかった。

そう、カイドの魔の手が近づいていることを……。

ミソラのライブ（後書き）

どうでしたか!?

あのミソラの歌った歌は僕が頑張って作詞しました!

結構出来悪いでしょうが・・・
では・・・。

See you again.....

電波体のやり取り

そして、スバルは再び勉強を始めた。

ミソラはなんで、スバルが勉強しているのか、疑問に思った。

「なんで、勉強しているの？」

「なんか、もうすぐコダマ小では、大規模な模試があるんだってさ。」

「どうしよう・・・私、全然勉強わかんない・・・。」

「大丈夫だよ！2人で勉強すればいい点取れるよ！」

スバルの真っ直ぐな瞳と子供のような笑顔で、ミソラは全く抵抗が無かった。

そう。やれば出来るという勇気が・・・。

昔、スバルはこんなことを言っていた。

「結果も大事だけど、本当に大事なのは挑戦するという勇気を見せることなんだ！」

と・・・。

今でもミソラの心に残っている。

「うん！私、頑張る！！」

「じゃあ、頑張ろう！！」

「うん！！」

「!?!」

ウォーロックは何か感じた・・・。

前、現れたカイドのような雰囲気・・・。

「まいつか。」

えらい簡単に済ますウォーロックだった。

「スバル〜ミソラ〜ご飯よ〜!」

「は〜い!」

ドタドタ・・・

注意：ここから終わりまでスバルたちの会話はありません。とくと、電波体の会話をお楽しみください。それでは。

勇輝

「人間ってのは本当にわかんねえもんだ・・・。」

なんか、がっかりした感じに言う、ウォーロック。

「例えは?」

ハーブが尋ねる。

「だって、恋という感情を持つのか不思議じゃないのか？」
「全然不思議じゃないわ。」

ハーブが反論する。

「なんでよ？」
「だって、人間である以上、人を好きになる気持ちってのは生まれるものなのよ。」
「そういうもんなのか・・・。」
「そういうものなのよ。」
「本当に人間ってわからねえ・・・。」

ウォーロックが頭を抱える。

「じゃあ、お前大事な人とかいるのかよ？」

また、ウォーロックが聞いた。

「決まっているじゃない。」
「何？」

いともたやすく言われたウォーロックは唾然とした。

「誰だよ??」

「ミソラよ。」

「何?」

「今までミソラと一緒にいたのよ。ミソラは私にとって大事な人だから。」

「まあそうだろうな。」

「アンタはいないの??」

「スバルさ。俺だつてスバルは大事な存在だ。あいつと一緒にならどんな敵にでも立ちむかえられる。そのぐらい俺はあいつを信頼している。」

「FM星人・・・いや、AM星人にはいい事言うわね。」

ちよつとからかったハープ。

「うるせえ!」

喧嘩腰になるウォーロック。

このときウォーロックはなにか見つけた・・・
そんな気がしていたのだった・・・。

電波体のやり取り（後書き）

どうでしたか???

なんか、いい感じの雰囲気じゃないですか？

えっ？カイド？

あわてないでください（笑）そのうち戦うことになりますから。
では次回をお楽しみに！

History

夕食を食べて戻ってきたミソラとスバル。戻ってくるやいなや2人は勉強を始めた。

「ねえ、昔私たちも勉強よくしたわね。」
「ハーブが話を切り出す。」

「まあ俺なんか全然勉強していなかったがな。」

「久しぶりに昔の話でもしない？」

「わかったよ……。」

注意：ここからはハーブとウォーロックの昔話です。私が勝手に思案しただけなので、ご了承下さい。

勇輝

ご存知だろうがウォーロックとハーブはFM星人である。(一応ウォーロックはAM星人だ)

が。)かつて、2人は学校でも同級生だった。そう、あのオックス・キグナスなども……。

今では到底考えづらいだろうが、ウォーロックは指折りのエリートだった。

高校時代の先生に「お前なら、あのFM大学も夢ではない。」と言われたぐらいである。

FM大学とは当時のFM星の最高のトップ大学だった。今で言う東大みたいなものだ。

普通のものならば飛び跳ねるぐらい喜ぶものだったがウォーロックはそんなことは全く思わな

かった。

なぜなら、ウォーロックの本当の目的はFM王への復讐ケフェウスだった。

ウォーロックは友達……いや親友のプレアデスという者がいた。

プレアデスはFM星人だがとてもウォーロックの話すことに相談に乗ってあげてた。

そして、いつしか親友になり、毎日を楽しく送っていた。

だがある日第1次FM戦争が勃発した。

そのとき、プレアデスは戦死してしまったのだ。

ウォーロックは怒り狂った。

「FM王をぶったおす」と……。

そして王の豪邸を焼こうとした、その瞬間警備員に見つかったのだ。

このニュースは大問題となりウォーロックを国際指名手配した。

そして、ウォーロックは警察に追われる羽目になった。

あるとき、ウォーロックはこう思った。

「人間と電波変換すればFM王に復讐できる」と……。

そしてFM星から地球に逃げた。

そこで、出会ったのは「星河 スバル」という少年だった。

というわけである。

注意：ここからハーブとの話に戻ります。

「まあアンタはあの時は優秀だったわよね。」

「でも、もう忘れてしまったからな。今となっては昔の面影もねえよ。」

「そうでしょうね。」

そのときウォーロックは何かをまた感じた。

カイドだろうか……。

「まいつか。」

またしてもあっさり済ますウォーロックだった。

明日は学力テストだ。

スバルは12時まで勉強してぐっすり寝たのだった。

History (後書き)

どうでしたか!?

なんかウォーロックの昔話は勝手に考えただけです……。申し訳
ありません!

さて、今回は学力テストです!

皆さんもチャレンジしていただきます!

皆さんもスバルやミソラに負けないでくださいね!
では、

See you again……。

学力テスト当日

スバルは学校に来ていた。

なぜなら、今日はコダマ小の学力テストだからである。
委員長がなぜか怒り狂った口調で話しかけてきた。

「スバル君!!!!!!!!!!!!!!」

「は…………はい…………??」

「なんで、先週私の家に来なかったのよ!!」

「あ…………ごめん!!今日行くよ!!」

「もう…………。それよりテスト頑張りましょう。」

「うん。」

しばらくすると、試験官が来た。

「え〜このテストは算・国・理・社が混ぜてあるので皆さん、頑張
って下さい。」

「では、問題用紙と解答用紙を配ります。」

全員に問題が行き届く。

キーンコーンカーンコーン

「では、はじめ!..!」

作者からの一言

ここからは皆さんのために、今スバルやミソラやルナやゴンタ・キザマロたちが解いている問題を皆さんのために公開します! さあ皆さんは何問解けるのでしょうか!??
では、スタート!!

問1 < 算数 レベルD > (7点)
10000円の35%引きっていくば?

問2 < 算数 レベルC > (7点)
-35 + (-15) × 2 は?

問3 < 算数 レベルB > (完当 7点)
8%の食塩水と15%の食塩水を混ぜて10%の食塩水を700g作りたい。
では、2種類の食塩水を何g混ぜ合わせればいいのか。

問4 < 算数 レベルA > (完当 8点)

1次関数 $y = -2x + a$ において、定義域が $a < x < 1$ であるとき、
値域が $b < y < 2$ となるように、定数 a と b の値を答えよ。

問5 < 国語 レベルC > (7点)
車をユニウした。カタカナを漢字にせよ。

問6 < 国語 レベルB > (7点)
ひまわりはぐんぐんのびる。
主語と述語は何？

問7 < 国語 レベルA > (7点)
ホトンドの人はゲームを持っている。
カタカナを漢字にせよ。

問8 < 理科 レベルA > (7点)
宇宙は膨張していると主張したエドウィン・ハッブルはある法則を
発見した。
その法則の名前は何か。

問い9 <理科 レベルB > (7点)

宇宙の始まりは何が爆発してからと言われている？

問い10 <社会 レベルC > (7点)

日本最北端の島の名前は何か？

問い11 <社会 レベルB > (事件：7点 人物7点)

室町幕府の将軍、足利義教が暗殺された事件は何か。また、殺害した人物は誰か。

問い12 <社会 レベルA > (書物：7点 人物：8点)

今の政治形態である三権分立。

三権分立はフランスのある書物を参考にした。

その書物の名前は何か。

また、その書物を書いた人物は誰か。

終了です!!

さあ皆さんは出来ましたか？

お話の続きは次回に続きます!!

学力テスト当日（後書き）

どうでしたか？

なんか、このテスト小学生のレベルじゃないですよね…………。

まあ気にしないで下さい！

次回はちゃんと書きます！

対戦開幕！！（前書き）

このお話を読む前に、皆さんに注意事項があります。

前回のお話、「学力テスト当日」のお話を読んでない方はそちらから読んでください。

皆さんがスバルたちの受けた学力テストを読んでからこのお話を読んでください。

対戦開幕！！

学力テストの結果（順位）が学校の掲示板に貼られていた。

「オイ、スバル何点だよ？」

「うんと・・・74点かな？」

「学年29番なら、たいしたもんだぜ！」

そして、意気揚々と学校に入ってしまったスバルだった。

次にミソラが学校にやってきた。

「ミソラ、何点だったの？」

「どれどれ・・・69点じゃない？」

「ミソラなかなかいい点ね！学年41番なら良いほうね。スバル君と勉強した甲斐あったのかしらね??」

「ハーブ!!！」

「わかったわよ！はやく学校に入りましょう！」

いたって普通に学校に入ってしまったミソラだった。

最後に、委員長・ゴンタ・キザマロがやってきた。

「あら？私は80点ですわ。そして13番……。まあ良いほうかしらね。」

「ゲッ！俺12点しかねえ！！学年101番……。最悪だ……。」

「ヤッター！！僕見事に84点です！！素晴らしい偉業を成し遂げましたよ！！！」

「わかったわかった……。早く学校に入りましょう。」

委員長たちは（ゴンタ・委員長以外）飛び跳ねながら入っていった。そして、最後にキザマロはナルシストなんだろうか……。

注意：これは108人受けています。

授業が一通り終わって、昼休み……。

スバルとウオーロックとミソラとハープは屋上にいた。

「ミソラちゃんテストどうだった？」

「うん！まあ悪くは無かったかも！」

「理科そういえばメチャクチャ簡単だったな。」

「いや、普通に難しいし（笑）」

「だって最初のやつ、ハップルの法則でしょ……。次のやつビッグバンじゃん……。」

「スバル君にとっては簡単かも知れないけど私たちには難しいの！」

そのとき、ウォーロックはカイドの気配を強く感じた。
この近くにいる!!

「スバル！カイドの気配がむちゃくちゃするぞ！！今にも襲い掛か
つてくるかもしれねえ！

電波変換だ!!」

「ミソラ！私もウォーロックと同じ気配を強く感じたわ！電波変換
よ!!」

「「うん!!」」

「電波変換！星河 スバル！オン・エア!!」

「電波変換！響 ミソラ！オン・エア!!」

2人は電波変換するとカイドがついに現れた……!!

「やあ久しぶりだね。ロックマン。」

「前はやられたが今回は負けないぞ!!」

「さあそれはどうかな・・・？倒せるものなら倒して見るがいい!!」
「!!」

「ミソラちゃん行くよ!!!!」

「うん!!」

「ウエーブバトル！ ライド・オン！！！」

対戦開幕！！（後書き）

どうでしたか？

とうとう、カイドとのバトルがスタートしましたよ！

さあスバルたちは勝つのでしょうか！？

乞うご期待！！

感想待ってまゝす！

スバルの怒り

「俺の恐ろしさをとくと思いきれ!!」

「ロックバスター！」

「シヨックノート！」

2つとも見事に（いや、これいらんだろ・・・）はずれた。

「今度は、こつちだ！食らえ！メテオ・ストライク！」

また、数発の隕石が落ちてくる。

しかし、幸い2人ともよけたため、助かった。

「バトルカード！マッドバルカン!!」

ダダダダダダ・・・

「ぐはっ！畜生・・・!!」

カイドはほとんど食らった。

「こっぴなったら・・・！ファントム・クローー！！」

「ぐっ！！」

「ロックマン！！」

スバルは相手の手に捕まってしまった。

「クツクツク・・・さあ恐怖を味あわせてやる・・・！！」

そのとき、カイドはロックマンを地面に叩きつけた。

「ぐわっ！！」

地面に穴が空いてしまつぐらいの跡が出来た。

「クツクツク・・・！！まだまだだ！！」

「ぐはっ！！ うっ！！」

その後何回も何回もロックマンを叩きつけた。

「これで、とどめだ!」

カイドはロックマンを鉄の塔に叩きつけた。

「がはっ……!」

口から少量の血が出てしまうほどのダメージを受けてしまった。

(少々グロテスクな表現を出してしまいました。申し訳ありません。)

「ロックマン!!ハーブ!ロックマンを助けるわよ!」

「ええ!」

「パルスソング!」

大音量の音がカイドに命中した。

「ぐわっ!なんだ……この音は……!」

音が鳴りやむと、カイドはメテオソードを出した。

「これで……復讐が終わる!」

「オイ!!!スバル!!!しつかりしやがれ!!!」

「.....」

「スバル!!!スバル!!!」

どうやらスバルは意識を失ってしまったようだ。

「これで最後だ!!!!メテオ・ソード!!!!」

ズバツ!!

「何!!!?」

そのとき、メテオ・ソードはロックマンではなく、ハーブ・ノートに当たってしまったのだ。

そう。スバルを助けるために.....。

そして、ハーブ・ノートは倒れてしまった。

「ゆ.....る.....さな.....い.....!!!」

「スバル!!!」

「ゆるさ.....ない!!!」

「ミソラちゃんを.....倒して.....絶対に許さない!!!」

「スバル!!!大丈夫か!!!???」

この声は果てしなく大きい声だった。

スバルの怒り（後書き）

どうでしたか??

見事、カイドをうち負かしました!!

ところで皆さん、不思議に思った方も多くいるかもしれませんが途中出てきた「マインド・スラッシュ」というのは、僕のオリジナルです!

要はこのカード感情のタイプ・強さによって攻撃力が変わるカードなのです!

ま、それはさておき。

次回をお楽しみに!!

ミソラの命 そして・・・第1話完結

カイドを倒したスバルたちはウエーブアウトをした。
一段落したと思いきや、今度はミソラがやられてしまったのだ。
デリートされないだけ、幸いだったがミソラは意識が無い状態である。

「ミソラちゃん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ここは、家に帰って寝かせてあげようか・・・。」

「ああ、その方がいいだろう。」

ミソラをおんぶして、家に帰ってきた。

その後、部屋へ行ってミソラを寝かせてあげた。

しばらくすると、ミソラが目を覚ました。

「ミソラちゃん!!」

「う〜ん・・・スバル君??」

「よかった〜。無事で・・・。怪我とかはない??」

「肩が熱いぐらい・・・。」

「そっか。しばらくすると治・・・。」

そのときミソラは・・・スバルに抱きついたので。

「心配してくれてありがとう……。スバル君の方が痛い事されているのに……。あの時助けてあげれなかった私が悪かったよ……。ごめんね……。」

「うんうん。心配しないでミソラちゃん。だってミソラちゃんは助けたじゃん……。僕を最後にかばってくれたじゃん……。」

「本当に……。ごめんね。」

「僕の方こそ……。」

スバルは抱かれていたミソラの匂いを微量ながらかいでいたのだ。た。

いや、この表現おかしいような……。

こうして2人との絆はさらに深まったのだ……。

作者の言葉 From 勇輝

・みなさん！応援ありがとうございます！！

これで第1章は完結です！！

このまま次回は第2章に移りたいと思います。

第2章では大都市に出かけるお話になるかと思っています。

ちなみに、ロツポンドーヒルズでは無いので（笑）

では、皆さん！

次回を楽しみにしててください！

では……

See you again……。

第2話スタート ソロの陰謀

第2章

カイドを倒して1週間がたった。

ミソラは仕事が忙しく最近家に顔を見せていない。

スバルは家で宇宙の研究を行っていた。

「なんで、宇宙がそんなに好きなんだ？」

ウォーロックが前々から疑問に思っていたことを今更言った。

「だって僕の父さん、宇宙飛行士だろ？宇宙飛行士になって父さんを探したいんだ。。。」

少し可哀想な目つきになったスバル。

ウォーロックにとっては久しぶりの目つき・・・とでも言うのだろうか。

時間がたって夕飯の時間になった。

母さんと当たり前の話をしているとミソラが帰ってきた。

「ただいま〜!!」

「お帰りなさい。はやく手洗い・うがいを済ませてご飯を食べなさい。」

「はい。」

ミソラが手洗い・うがいを済ませると夕食を食べ始めた。

しばらくして2人が夕飯を食べ終わるとスバルの部屋に行った。

そしてミソラが言った。

「ねえスバル君。」

「何?」

「今度の週末暇?」

「まあ暇って言ったら暇かな。」

「だったらあそこへ旅行行かない？」

「旅行???どこへ??」

「新国（新宿から参考にしました。）だよ」

「あゝあの新国ね。ってどうやって行くの？」

「電波変換すれば良いじゃん！」

「オイオイ・・・電波変換はそんなために使っんじゃないんだぞ。」

「今回だけは良いでしょ？ロック君！」

「けっしょうがねえな。」

「わかった。週末って事はとまりで行くの？」

「そうよ！場所はカリナットヨルシアホテル。（名古屋のあのホテルから参考にしました。）」

「わかった。じゃ土曜日ね！」

こうして2人は新国に行くことになったのだ・・・。

土曜日

その日はとても天気良かった。

2人がそろったところで2人は電波変換した。

なんか日本語が変なような・・・。

しばらくすると、2人は新国についた。

「うわーすごい・・・大都会だ・・・。」

「でしょ？あれみて！！」

「？」

なんとそこにはニホンいち高いといわれているゴッドランドスクエ

アがあつた。(名古屋のあの建物から参考にしました。)

「わゝメチャクチャ高い……………」

「とにかくホテルへいこつか。」

「うん！」

2人は例のカリナットヨルシアホテルに到着した。

「私がチェックインしてくるから待つて。」

「わかつた。」

スバルはホテルのロビーにしているとウォーロックが話しかけてきた。

「スバル。なんか危険な雰囲気を感じるな……………」

「あ!!！」

「どうした？」

「ソロがいる……………」

「何だと!!!??」

そう。目の前にはソロがいた。
どんだんこつちへ近づいてきた。

「久しぶりだな……。」

まるで魔王のような目つきをしていた。

「お前らか……カイドを倒したのは……。」

「お前とカイドに何の関係があるんだ!!」

「フン。貴様にはわかるまい。直にわかる。この世界が孤独に染ま
って行くことがな……。」

「ソロ!! 僕が絶対にさせるもんか!!」

「噛み締めておけ……。自分の無力さを……。」

そう言ってソロはどっかへ行った。

「スバル君!!」

「終わった?」

「うん……。」

「どうしたの??」

「どうやらカイドとかのこの事件……まだまだ裏がある……」

「え??」

強張った表情でミソラにそう言ったのだった。

第2話スタート ソロの陰謀（後書き）

どうでしたか??

ついに第2章がスタートしました!

どうやらこの事件はソロがおそらく首領^{ボス}なんでしょうか……。
感想待ってまゝす!!

では……

See you again……。

事件考察

ミソラがチェックインしてもらった鍵はシルバーランクルームだった。

彼女が歌手をやっていただけあって結構いい部屋に泊まれた。

2人が部屋に入ると、部屋が広がっていた。

「あゝ気持ちいい。」

スバルがベッドに大の字に寝るとミソラが少し強張った表情で話しかけてきた。

「さつきさ、この事件には裏があるって言ってたよね？」

「うん。」

スバルも強張った表情になった。

「カイドとソロはなにか繋がりがあるかも知れないんだ。」

「ということとは、今回の事件は組織を組んで襲い掛かってくるって
いうこと？」

「そうなっちゃうかもしれないね……。」

「そっか。」

「ごめんね、ミノラちゃん。僕のせいでこんな目になってしまった……。」

「大丈夫よ。気にしないで。」

「ありがとう……。」

その後2人はいろいろなことを喋った。

「お前は怖くないのか？」

ウォーロックはハーブに唐突に聞いた。

「何が？」

「この先、お前は俺と同じようにひどい目やつらい目にあうのかもしれないんだぞ。それなのにお前は怖くないのか？。」

「大丈夫よ。絆の力で人は強くなれるのよ。だから、スバル君と戦っていれば怖くないわよ。」

『やらねそうになっただらどつすんだ？』

『そのときはアンタに守ってもらおうわ。』

『ケツ！だからオンナって言うのは嫌いなんだよ……。』

相変わらず呆れているウォーロックだった。

数時間後。

「ねえスバル君今何時？」

「え〜と・・・18時48分だよ。」

「19時から夕食だからね。」

「だったら今から行った方が良くないかな？」

「そうだね！じゃ今からいこっか。」

夕食は豪華なものだった。

ミソラは相変わらず大食いなせいでスバルの分の3分の1と自分の分を食べてしまった。

そのときスバルはこう思った。

（ミソラちゃん……昔どんな食生活を送っていたんだろう……）
と……。

時間がたち夕食が終わって部屋に戻ってきた。

「僕、このまま風呂へ行くよ。」

「わかった。わたし、ここで待っているよ。」

「じゃあね。」

ボタン

ミソラはスバルが行ったあと、作詞の続きを行った。
今度の歌番組で歌うことになっているのだ。

『ミソラったら本当に幸せそうね。』

「そうかな？」

『恋人同士だもんね』2人は。（笑）
』

「こ……恋人じゃないし!!」

『あら?でもミソラ、スバル君のこと好きじゃないの?』

「それは……。スバル君はあくまで私にとって大事な存在なの……!」

『それって好きなんじゃないの??』

「……。」

『自分の気持ち伝えなくていいの??』

「だから……スバル君は大事な友達なの!!!」

『わかったわよ……。でもミソラしあわせそうね。』

「私、スバル君に会えて本当に幸せ。あそこが私のターニング・ポイントだったのかもしれない……。」

「幸せそうで良いじゃない。」

ここまで、ミソラは幸せだった。

そう……ここまで……。

そのとき……。

「!?!?」

ミソラは口を何者かにふさがれたのだった。

そしてその男は置手紙を残して去って行ったのだった。

事件考察（後書き）

どうでしたか？

なんか、ミソラさらわれちゃっていませんね・・・

どうなっちゃうんでしょうか・・・。

ともかく、読んでくださってありがとうございます！

感想待っています！！

では・・・

See you again・・・。

シルヴィア

ミソラがさらわれて約20分後……

「ミソラちゃん……あれ??ミソラちゃんどこ??」

そのとき、ウォーロックは置手紙に気づいた。

「オイ!スバル!!なんか手紙がおいてあるぞ。」

「え!?!」

スバルは机の上に置いてあった手紙を読んだ。

「え〜と……響　ミソラは預かった。助けたくばゴッドランドスクエアの屋上まで来い。もう設備は完成している。助けたくば速く来い。クツクツク……だって。」

「やべえぞスバル……どうする?」

「もちろん……助けに行くよ!」

「よし!じゃあ行くぞ!」

スバルは部屋を出てホテルの外へ出た。
すぐさま、ゴッドランドスクエアに向かった。
スバルの気持ちはただ焦りしかなかった。

ゴッドランドスクエアについて、屋上へ向かった。
階段を上ってドアを開けた・・・。

バン！

「ミソラちゃん！！？」

「な・・・何だと！！？どういうことだ・・・！！！？？」

なんとそこには機械でビルの外にぶら下げられているミソラがいた。

「やあ。よく来たね。」

『お前は一体誰だ！？』

「僕の名前はシルヴィア。ボスによって送られてきた君の第2の刺客だ。」

「ミソラちゃんをはなせ！！！」

「それは不可能な相談だ。返してほしくば自力で取り返すんだな。」

シルヴィアはミソラをぶらさげている機械にスイッチを入れた。

「何をしたんだ!？」

「タイマーさ。今30分に設定した。30分たつと……君のお友達はビルの屋上からまつさかさまさ。」

『畜生! さつきから聞いていりゃ汚いマネしやがって……!! スバル! 電波変換だ!!』

「電波変換!! 星河スバル! オン・エア!!」

「フツ。君は僕には勝てない……。行くぞ!!」

「バトルカード! ジェットスキー!」

スカッ

「そんなもの僕には当たらないさ。」

「だったらバトルカード! プラスキャノン!!」

ドン!

「無駄さ。今度はこっちの番だ！アンタレスアタック！」

ズガッ！！

「ぐわっ！！！」

もろに食らったがまだ大丈夫だった。

「バトルカード！インビジブル！」

フッ・・・。

「何！！？」

「いまだ！！バトルカードファイア・スラッシュ！！」

ズバッ！！

「グハッ！！！」

見事ヒットした。

「まだまだだ！！必殺！プロキオン・ザ・ボール！！！！！！」

ドッカーン！！

「うわぁぁぁ！！！」

ものすごく強い攻撃を受けたためロックマンはひるんでしまっている。

「クツ・・・!!」

「とどめだ!!サン・オブ・ラスト!!」

「バトルカード!!バリア200!!」

ブブ・・・!!

ロックマンの周りにシールドが張られた。
そのおかげでロックマンは助かった。

「バトルカード!ジ・アース!!」

バシューーーーー!!!

「ぐわ~~~~!!畜生!!!!やられてしまっなんて・・・!!!!ソ口様・・・申し訳ありません・・・!!!!」

「こうしてシルヴィアはデリートされた。

「ふ〜。強かったね〜。」

『そんなことよりミソラって奴を助けようぜ!』

「うん!」

そして、タイマーは止まり、ミソラは無事救助された。

「あれ・・・ここは・・・??」

「ミソラちゃん!」

「スバル君! 助けに来てくれたんだ!」

「うん! 心配したんだよ・・・!」

「ごめんね。」

「気にしないで。」

「じゃ、帰ろっか。」

「..!」

久しぶりにミソラの満面の笑顔が見れた。

その後2人は手を握り閉めながら帰っていった。

「フン……。シルヴィアめ……。またしくじりやがって……。」

そのころソロは基地で不敵な笑みを浮かべていた。

シルヴィア（後書き）

どうでしたか??

なんか、今回もオリジナルカード出しちゃいました・・・。

ともかく、読んでいただきありがとうございます！

次回も頑張ります!!

真実 第2話 終了

2人がホテルへついて部屋へ帰るとミソラは真つ先にソファへ座った。

しかし、何故かミソラの体は震えていた。

「どうしたの？寒いの？」

「そうじゃない……………」

「え？」

「やっぱりこの事件スバル君が言つとおり裏がある……………」

「どうして？」

「シルヴィアがこう言ってたの……………」

「この世界は絆などという腐りきったものはわれらの手によって腐敗する……………。ソロ様の力……………。いや……………。本当のソロ様によつてな……………」

「なるほど。」

「この本当のソロって言うのはなんか……………。もう一人のソロがいるつて言うことなんじゃないのかな……………」

「どつという意味？」

「だから、ソロにはなんか・・・義理の関係がある人がボスなんじゃないのかなって思うんだけど・・・」

「でも、ソロは絆なんて捨ててしまったから義理なんていないんじゃない・・・」

「そこまでは私の推測。ただわかっていている真実は・・・ソロはボスじゃない。ソロはボスの幹部的な存在なんだということなんだよ・・・」

「え!!!?!?」

あまりの驚きに顎が外れそうになったスバル。

『だったら、その首領を倒すまでだ!』

『そうね。もう私たちは逃げられないのね・・・戦いましょう。凶悪な組織たちに。』

『ああ!言われなくてもやってやるぜ!』

2人と2匹(?)は結束を固め、ミソラは風呂へ入って寝た。

こうして、2人は1日を終え、翌日、チェックアウトして新国を去った。

「……………ソロか。」

「はっ。」

「そちの様子はどつだ?」

「かなり苦戦しているようです…。例のロックマンに。」

「ふむ…………。まあいい。直にこの世界の絆は全て破滅する。私の力によってな…………。」

「はっ。」

「フフフフ…………ハハハハハ!!!!」

第2章

終了

真実 第2話 終了（後書き）

どうでしたか？

なんか第2章終わるの速かったような気がするんですが・・・。

ともかく第2章は完結です！

応援ありがとうございました！

次回から第3章に入ります！

第3章ではミソラのドラマについてです！！

では、次回をお楽しみに！！

第3話スタート ミソラの呼び出し

第3章

『オイ！スバル！そろそろ起きねえか！！？』

「うーん……わかったよ……。」

『なんか今日はお前にしては早起だな。』

「そう？。」

今日は日曜日。

ミソラはドラマの撮影で、今日はいなかった。
あかねも今日は友人と出かけてしまっていた。

「母さん、出て行くときなんか言ってた？。」

『ああ、そついや下に朝食を用意したって言ってたな……。』

「ふーんわかった。」

とまあ皆さん見てもらえばわかると思いますがミソラがいないとす

んごい普通だつて事がわかりませんか？
ご心配なく。もうすぐあの方から電話が来ますよ！

ブルブルブル……

『オイ、スバル。電話だ。』

「ブラウズ！」

ブーン！

「スバル君??」

「あゝミソラちゃん!どうしたの?」

「今、暇??」

「はい、呆れかえるくらい暇です(笑)」

「よかつたらさ、ロップンドーヒルズに来てくれない?」

「わかつた!」

「..!」

ブツッ。

「行こう！ウォーロック！！」

「おう！」

スバルたちはバスに乗ってロッポンドーヒルズに向かった。
すると、彼女はそこにいた。

「ミソラちゃん！」

「スバル君！！」

「どうしたの？」

「よかったらさ、今から私についてきてくれない？」

「うん。」

しばらく歩くと、そこには撮影の人たちがたくさんいた。

「え??？」

「紹介するね。この人が監督の齋藤さん。（浦方さんではありません）

ん。」

「よろしくね！」

「あのう、なんで僕が????？」

「あ、それはね……。」

経緯を齋藤さんが話した。

「なるほど……。」

「だからどうか、この番組に出演してもらえないかな？」

「でも、僕演技全然出来ませんよ。」

「大丈夫だつて！」

「うん……わかりました！やります！」

「本当かい！？じゃ早速脚本を渡すね。」

スバルは脚本を貰った。

そのとき、ウォーロックはハーブに質問していた。

『なんで、スバルがこんな場所に呼ばれたんだ？』

『それはね、ミソラが監督にスバル君の話を良くしているうちに、スバル君に監督が興味を持ったのか、呼んでももらえないか？って頼んだと言うことよ。』

『なるほどね。。。』

『またもしかしたら奴らが襲い掛かってくるかも知れないわね。』

『ああ。油断はできねえな。。。』

「ふふふふ。。。星河 スバル。。。いやロックマン。。。ついにアンタの最期がきたようね。。。」

不敵な笑みのある女が浮かべていた。。。。

第3話スタート ミソラの呼び出し（後書き）

どうでしたか??

第3章が始まりました!

今回はミソラのドラマ撮影から始まります!

これからもよろしく願います!

明日から3日間僕はバスケットの試合なんで更新が1日1話ぐらいになるかもしれない。。。

お許してください(笑)

では。。。。

See you again。。。。

ミソラの悲しみ <前編>

今日分のスバルの演技が終わったあと

2人はこの後の話をしていった。

「これからどうする?」

「うーん・・・明日は私の家から近いところで撮影があるから、今日は私の家に帰る!」

「そっか。じゃあねミソラちゃん。」

「じゃあね」

2人は別れ、ミソラは電波変換して家に帰った。

しばらくすると家の前についた。

久しぶりに見たその家は懐かしさでいっぱいだった。

「ただいま〜。」

シーン・・・・。

「て言っても、誰もいないもんね・・・。」

『何言ってるの。私がいるじゃない。』

ミソラを慰めたハープだった。

その後ミソラは久しぶりに夕飯を作り一人で食べた。孤食というやつである。

そして、テレビをつけた。

するとテレビにはこの間収録した、ミュージックホールという番組がやってきた。

「絆の力信じて 仲間と共に強くなる・・・。」

ミソラは母親のことを思い出した。
そして、昔の思い出が蘇ってきた。

「ラ〜ラ〜ラ〜」

「ミソラは歌が上手ね。」

「うん！」

ミソラを褒めていたのはミソラの母親だ。

ミソラの母親は昔から寝込んでいた日々だった。

ミソラは何とかお母さんを喜ばす方法は無いかと考えた。
そう。それが 歌 である。

毎日歌って母親を喜ばせていた。

その度に母親は喜んでくれた。

当時のミソラにとって歌は

「母親を喜ばせる1つの方法」

としかみていなかった。

ある時ミソラと母親がテレビを見ていると
歌手のオーディションのCMが流れていた。

そして、ミソラの母親はある提案をした。

「ねえ、ミソラ。オーディション受けてみない??」

「ママ……??」

「あなたは歌手になればきっと素晴らしい歌手になれるわよ!」

でも、ミソラはそんな事ちっとも思わなかった。

なぜなら、ミソラにとって歌は

「母親を言ばす1つの方法」

だったからだ。

もし、歌手になってママが喜んでくれるなら……と思ったミソラは

「うん!」

と応答した。

そして、必死に練習した。
母親を喜ばすために……………。

そしてオーディションに合格したミソラは本気で嬉しかった。

母親のために歌をたくさん聞かせれるから。

歌手になって順風満帆な生活を送っているとき
ミソラにある悲劇が待っていた……………。

そう。母親の他界である。

ミソラはこう思った。

（母親がいない今、誰に歌を聞かせてあげればいいんだろう……………）

そして、そのまま歌手活動を続けていると
人生を変える少年に出会った。

そう。「星河 スバル」である……………。

ミソラの悲しみ <前編> (後書き)

どうでしたか？

なんか、悲しいお話になっちゃいましたね……。

自分自身書いていてつらいです。

なぜなら、自分がミソラの立場になって考えると……と考えるとつらいものです。

この悲しいお話は次回に続きます。では……。

ミソラの悲しみ<後編>

スバルとミソラが初めて出会って、ミソラはスバルにこう話した。

「私の歌はもう無いの・・・だってママが死んじゃったんだもん・・・」

そして、上のセリフからFM星人「ハーブ」と出会った。

ミソラとハーブは電波変換して「ハーブ・ノート」になってしまったのだ。

スバル（ロックマン）はハーブ・ノートを倒したが、ハーブは帰ってもしょうがないなんていう理由でミソラのトランサーに居候することになった。

こうして、今に至っているのだ。

一方父親はミソラの母親より3年早く他界してしまっている。
当時のミソラは4歳。（今は11歳です。）

母親より5年も早く亡くなっている。

父親はとても厳格な人だった。

その厳格な性格が災いして、よく母親と喧嘩していたらしい。

ミソラは母親が大好きだったため父親はあまり好きじゃなかったのだ。

よく些細な事でミソラを叱っていたのだ。

でもその甲斐があつて（今もだが）基本的なマナーなどは身につけている。

そして父親が死んでしまったときミソラはこういった。

「私のパパは、私にいろいろ教えてくれたすごいパパでした。」

と言ったのだ。

昔の過去を思い出せば出すほどミソラは泣いてしまっていた。

人は過去と言うものからは逃げれない。

過去は変えることなど出来ない。

だが、未来はかえられる。

ミソラは変わったのだ。

そう。少年「星河 スバル」によって……………。

ミソラの悲しみく後編く(後書き)

どうでしたか？

なんか、短くてすみません・・・。

今日バスケットボールの試合でして・・・。

それはさておき。

感想待ってます!!

2人の誓い

ミソラはその後悲しみの涙を流した。

『ちょっとミソラ!どうしたのよ?』

ハープが尋ねた。

「だって・・・私・・・1人だもん・・・ずっと・・・ずっと・・・」

『1人?』

「孤独だもん・・・親はいないし・・・自分は・・・。」

『1人じゃないわ。』

「え?」

『スバル君はどうしたの!?!?ミソラ前にも言ったじゃない!スバルは私の大事な友達だって・・・。』

「うん・・・。」

『親がないからって孤独ってわけじゃないのよ。ミソラには立派な友達がいるじゃない。』

「うん。。。」

『だから、そんな事思わないでちょうだい。見ているこっちまでも悲しくなるわ。』

「うん。」

『さあ、お風呂に入って寝なさい。』

「はい。」

その後ミソラは風呂に入って寝たのだった。

『ポロン。ミソラ。。。変わったわね。本当に。。。』

翌日

ミソラは起きて朝食を済ませ、現場へ向かった。

今日はスバルの撮影の日ではなかった。

ミソラは今日の撮影を終わらせた後、スバルの家に向かった。

ピンポン！

「はい？あつ！ミソラちゃん！」

「やつほースバル君」

「どうしたの？」

「今日はこっちに泊まるからね！」

「いいよ！じゃ中に入って！」

スバルの案内で中に入れてもらった。

「そついえばミノソラちゃん？」

「どうしたの？」

「昨日は1人で大丈夫だった？」

「大丈夫だよ！」

が、その声はどこかかすんでた。

「本当に？なんか心配事があったら相談してね！」

その時だった。

おゆっ

(え……………?)

なんとミソラがスバルに抱きついたので。

そして、ミソラの目からは涙が流れていた。

「スバル君・・・私、本当は昨日寂しかった・・・パパとママがいないことを思い出して

・・・だから私にはスバル君しかいないの・・・本当の友達が・・・もし、スバル君が

いなくなったら私、また孤独になっちゃう・・・」

「大丈夫。僕はミソラちゃんをおいて死んじゃったりなんかしないよ。自分で言うのも変だけ

ど、僕は地球を2度も救った英雄「ロックマン」だから！」

「約束だよ、スバル君・・・」

「うん・・・」

ミソラは心が晴れた気がした。
それはまるで、快晴のように……………。

「フン。絆なんて腐りきったものをまだ持ってやがる。そろそろ、俺のほうから行くか。」

「待て。ソロ。」

「何だ？」

「次はこいつに行かせる。」

「ハーツか…………。フン。面白い。行け。ハーツよ…………。」

「任せて！私がロックマンを仕留めて参ります…………。」

「頼むぞ。」

「はっ！」

シユンー！

瞬間移動の音。

「ロツクマン……クツクツク……。」

彼らの計画は徐々に進行しつつあった……。

2人の誓い（後書き）

どうでした???

バスケ疲れた・・・！！でも明日で最後だ・・・！

ともかく、今回はあまりにも短かったので今回は長くしました！
感想待つてまゝす！！

まさかの展開

スバルは学校が終わって身支度をしている。

すると、そこに委員長がきた。

「星河くん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「何……??」

「いつになったらロックマンさまに会えるのよ!!!!!!!!??」

「あ……ゴメン!今日行くよ!」

「じゃアンタのそのビジライザー貸しなさい。」

「いいよ。」

「夜10時必ず来てね!」

「わかったわかった。」

スバルは委員長から逃げるように帰った。

家につくと誰もいなかった。

「今日も1人か・・・。」

『オイ。俺がいるだろ。』

「じゃ今からどうしよう・・・。」

『ちよっくら出かけるってのも良いんじゃないの?』

「確かにね。でも・・・。」

『???』

「本読みたい。」

『読めばいいじゃないか!!』

スバルは自分の部屋に行つて本を読んだ。

『この時間が俺にとって2番目にしんどいんだよな・・・。あ?1番??スバルが展望台で空』

眺めているときだよ・・・。』

相変わらず本を読み続けている。

「ウォーロック。」

『あん？』

「人間は猿から進化したっていう進化論言った人誰だっけ？？」

『それは０００００じゃねえか？』

「あ、そっか。」

『ところでなんで俺こんなこと知ってた？？』

読者の皆様、わかりましたか？？

正解はダーヴィンです。

「じゃ、そろそろ出かけようか。夜ご飯の買出しとしてね。」

『よっしゃー！じゃそろそろ行くござい！』

スバルはお金を持って出かけに行った。

家にて左右確認して道路へ出た。

その時だった。

ブツブツ……！！

ドガン……！！

どわっ。

「オイ！スバル！！大丈夫か！！？しっかりしろ！！」

顔から血が流れていた。

「スバル~~~~~！！！！！！」

人が車から降りてきた。

「フフフフ………。作戦成功ね……。」

まさかの展開（後書き）

どうでした？？

なんか、今回短くてすみません・・・。

そして、スバル事故にあっちゃいました・・・。

今日僕夜中の3時に起きちゃったんですよ。

何ででしょう？？

感想待ってます！！

張本人

『オイ！スバル！！大変だ・誰かに救急車を呼ばねえと・・・。だ
がこの状態では呼べねえ

な・・・。』

「大変だ！救急車・・！！」

見知らぬ男性が救急車を呼んだ。

2分足らずで救急車がきた。

『俺がここにいたら、まずいな・・。1回出てハーブに連絡するか・
・・。』

ウォーロックはスターキャリアーから出て行った。

そして、スバルは運ばれていった。

病院に着くと早速診察が始まった。

医師は診察を始めたが、しばらくすると驚愕の表情を見せた。

「どうしました？」

「なぜだ……??なぜこんな小学生から大量の残留電波が感じられるんだ……。」

「機械の故障ではないのですか??」

「確かにありえるな。まあいい。早速寝室で寝かせてやってくれ。」

「はい。」

スバルはベッドに寝かせられた。
しばらくすると、ミソラがやってきた。

「スバル君!!?」

『ハーハー……メチャメチャ疲れたぜ……。』

「スバル君……約束したじゃん!!私を置いて死んでいたりしないって……!!」

ミソラの間からは大量の涙が出ていた。

「……………」

相変わらず目は閉じたままである。

くスバルの意識く

ここは、どこだろう???

そうか、僕死んじゃったのか・・・車に跳ねられて・・・

ゴメン。ミソラちゃん。僕は君との約束を果たせそうにないよ。

「スバル君!!お願い!目を開けて・・・。」

あれ?僕死んでなかったんだ。一命を取り留めたんだ・・・

うん。

ミソラちゃん。今から行くよ。君の元に。。。

「うん……。」

「スバル君!!!」

『ケツ！スバル！お目覚めが遅すぎるぜ!!!』

『ポロン。よかったわ、意識が戻って。』

「僕は……一体……??」

「スバル君!」

「……。」

ミソラは頬にキスをした。

「……。」

「ありがとう。スバル君!」

「え?？」

「これからもよろしく!!!」

「え……はい……。」

状況が読めないスバル。

そのとき……。

「フフフフ。あなたね。星河 スバル……。いやロックマン！
！！」

「だれ！！？」

「私はハーツ。あなたを抹殺するために送られてきた、第3の刺客
よ！」

『スバル！電波変換だ！！』

「いや、やめておくわ……。」

「え！？」

「あなたを倒すのにはまだ惜しい。完全復活したら、また来るわ。
せいぜい苦しむがいいわ。」

ロックマン……。ちなみにあなたを事故らせたのはこの私よ……。
フフフフ……。」

ハーツは消えていった。

「ハーツ・・・！！絶対許さない！！」

スバルの目は怒りしかなかった。

張本人（後書き）

どうでしたか??

またまた刺客が送り込まれましたよ！

波乱の展開になりそうです！

これからも皆さん応援よろしくお願いします！
では・・・

See you again・・・。

ウォーロックの本音

しばらくして、スバルは退院できた。
だが、事故の代償は大きかった。

それは、自分の腕に傷が残ってしまったのだ。
このせいで少しバトルに支障をきたしてしまうのだ。

『ケツ！あのハーツとかいう奴、俺の相棒に傷を負わせやがって・・・！！』

「でてきたら速攻で倒したいくらいムカムカする・・・！！」

2人は面白いくらい怒っていた。

「また、来たときに倒せば良いじゃん！」

ミソラが仲介(?)を入れた。

「それもそうだね。」

その後2人はスバル邸に向かった。

くスバル邸く

「「ただいま」」

「お帰りなさい。」

今日は早く仕事が終わったのか、あかねが帰ってきてた。

「今からご飯作るけど、ハヤシライスでいい？」

「いいよ。」

「じゃ、スバルの部屋で待っててね。」

くスバルの部屋く

ミソラは先に風呂へ入りにいった。
すると、ウォーロックが話しかけてきた。

『お前は変わったな。』

「どっしたの？急に。」

『昔、俺は友達なんていう存在がいなかったんだ。』

「それで？」

『何でわかるか？』

「わかんない。」

『俺の目的はFM王ケラエウスへの復讐だ。だから周りの奴らがFM星人だったから俺は

友達なんていうものを拒否していた。』

「うん。」

『昔のお前は昔の俺とほとんど同じだった。だが、今のお前を見ているとお前が羨ましい。誰

とでも接する事が出来るところがな。』

「じゃあオーロックは友達はいなかったの？」

『しかし、1人だけいたんだ。今でも覚えている……。プレアデスだ。』

「プレアデス？」

『そいつが俺の友達であり親友でもあり、また良き理解者でもあったんだ。だが、そいつは死

んでしまった……。』

「なんで？」

『戦争だ。FM星は戦争が日常茶飯事だった。ある戦争に巻き込まれて死んだんだ……。』

「ウォーロック、そんな事思わないで。プレアデスさんは今君の思ってることを思ってるなんか

いないよ。彼が思っているのはウォーロック自身が戦って皆を守ってあげる事なんじゃないの

かな。」

『……。』

「だからウォーロック落ち込まないで。僕だって守るべき人はたくさんいるんだ。君だってそ

うなんだろう？？」

『ケツ！言われなくてもわかってるさ！』

ウォーロックの心が曇りから快晴に変わった気がした。

ウォーロックの本音（後書き）

どうでしたか？

前にも同じ事を言いましたが今回も言ってしまった（笑）

これからも頑張るんでお願いします！

では、次回をお楽しみに。

スバルの過去<前編>

ウォーロックとスバルとの対談が終わると下からあかねの声がこだました。

急いで下に行くと美味しそうなハヤシライスが並んでいた。

え？なんでハヤシライスかって？

それは、僕が一番大好きな好物がハヤシライスだからです（笑）

「スバルも、昔を考えたらとても変わったわね〜。」

そう。スバルも昔と劇的に変わったのだ。

星河 スバル 5歳。

彼は誰とでも仲良く接する優しい幼稚園児だった。

彼の尊敬する人物・・・それは父親だった。

スバルはこのころから宇宙に興味を持っていた。

それは、人並み外れるくらいの。

このまま、行けば間違いなく毎日が楽しく過ごせただろう。

あるときまでは・・・。

ところが少年「星河 スバル」にある転機が訪れる。

それは父親の宇宙進出だ。

スバルの父親は宇宙飛行士だった。

だから・・・

「パパ〜！行かないで〜！！」

「大丈夫。俺は必ず帰ってくる。だからお前は信じて待っていてくれ。」

「……………うん。」

こうして、スバルの父「星河 大吾」は飛び立った。

スバルは信じていた。

パパは必ず帰ってくる……………。

そして平穏な日々を送って3ヶ月……………。

少年「星河 スバル」に悲劇がやってきたのだ。

あるときの出来事だった。

「ママ、今日の夜ご飯何……………?」

だが返事をしてくれなかった。

「……………したの?ママ。」

あかねの目からは大粒の涙が流れていた。

「スバル……パパが乗っていた宇宙船が漂流しちゃったの……」

「漂流？」

「行方不明になったの……」

スバルは3秒後涙が流れていた。

そして、スバルの頭に大吾の言葉が蘇ってきた。

（俺は必ず帰ってくる。だからお前は俺を信じて待っていてくれ。）

スバルは家を抜け出し、展望台にやってきた。

「こんなことになるなら……信じなければ良かった……」

5歳にして親を亡くすのは辛いことである。

この日を境に幼稚園に行かなくなった。

もちろん、小学校にも。

不登校の日々が続いてるとき、

ある日、スバルは2回目の転機が訪れた。

スバルの過去<前編>(後書き)

どうでした？

ミソラと同じようにスバルの過去も載せました。
かいててすごい悲しかったです・・・。

これからも頑張るのでよろしくお願いします！
では・・・

See you again・・・。

スバルの過去<後編>

そして、スバルに2度目の転機が訪れる。

それは、突然の出来事だった。

スバルはケッタ（自転車のことです）で展望台まで出かけた。

そこで、横になってビジライザーで見ていると不思議な光が落ちてくるのだ。

「何か・・・くる!!」

そして・・・!!

「うわぁ~~~~!!!!」

その光がスバルに落ちたのだ。

「だれ・・・!?君は・・・!?」

『俺の名はウォーロック。FM星の電波体だ。』

「FM星……!!?!?君は父さんを知ってるの!?!?」

『父さん……?それは星河 大吾のことか?』

「知ってるの!?!?」

『知りたいか?』

「うん!」

『だったら……俺に体を貸せ!?!』

「体……??!?」

『ああ。お前のトランサー（このころはトランサーでしたので）に住まわせていただくぜ。』

「うん……。。。」

これがFM星人ウォーロックとの出会いだった。

2人はいろいろなことを学んだ。

スバルは友達を守ること。

ウォーロックは人を助ける事を。

そして、電波変換して戦ってるうちに今度は3度目の転機が訪れるのだった。

ある日のことだった。

「ウォーロック。展望台に誰がいるよ？」

『ホントだな。もしかしてFM星人のスパイか??』

「もう、すぐ荒いこと言うんだから。」

「夏
夏の海 潮風が吹いてくる

この青い空の果て 何があるんだろう？

私の家の周り 向日葵咲いている

向日葵の花言葉は

「憧れ」 「光輝」 「熱愛」

どれもみんな愛に関する言葉ばっかだね

ぼくは貴方を空から見ている

僕が本当の愛なんだよ

貴方と過ごした日々忘れはしない

あなたは空の向こうにいる

ずっとみているよ　ずっとみているよ

また会える日まで　「

「いい歌だね。」

「聞いていたの？」

「うん。」

「ママ。今日もいい歌できたよ。また会いたいな……。」

「お母さん亡くなったの？」

「うん……。あっ！ゴメンね自己紹介が遅れて。」

私、響　ミソラって言うの！　よろしくね　「

「僕は星河　スバル。こちらこそ。」

「また、会えるといいね！スバル君！でも……。」

「でも？」

このあとミソラはとんでもないことを言うのだった。

「私はマネージャーから逃げているの。」

「そうなんだ……。」

「ゴメンね。変な心配させちゃって。」

「大丈夫！気にしないで！！！」

「じゃまたね！」

これがミソラとの出会いだった。

その後、ミソラはハープと電波変換してしまったが、ロックマンに救出されハープもミソラの居候になるのだった。

様々な苦難を乗り越え、アンドロメダ、ラ・ムーの撃破を成功し今に至っているのだ。

「うん。本当に皆のおかげで僕は変わったと思う。」

「良かったじゃないの。スバル。」

「あゝ気持ちよかった!」

「あっ!ミソラちゃん!ご飯食べなよ!」

「うん!」

「じゃ、改めて……。」

「「「いただきます!」」」

幸せそうなる3人であった。

スバルの過去<後編>(後書き)

どうでしたか？

スバルの過去って悲しいですけど、いい部分もありますよね。

ところで、ミソラって8月2日生まれだそうですよ(笑)

どうでもいいですね。

昨日でバスケットボールの試合が終わったんで沢山小説が書けそうです！

これからも応援よろしくお願いします！

では……

See you again……。

スバルの誕生会（前書き）

今回は3問クイズがでます！
皆さんもお考えください！

スバルの誕生日

2人は夕食を済ませ、スバルの部屋にやってきた。

「今日って何日だっけ？」

ミソラが唐突な質問をした。

「え〜と・・・6月8日だよ。」

「明日何の日かわかる？」

意味ありげな質問をしてきた。

「あ！僕の誕生日！！！」

「だから、明日誕生日パーティーしない？委員長たち誘って。」

「委員長か・・・絶対来なさそう・・・。」

「だったらいい方法があるよ！」

「・・・・・・・・・・。」

さあ！皆さんに問題です！委員長を誘う方法って一体なんでしょうか？

「ギョッ」

「え〜・・・まあいいけど」

『オイオイ・・・（ヒント）電波変換は道具じゃないんだぞ・・・』

「いいじゃん」

「でもそんな事で釣られるかな・・・」

「やってみようよー」

さあ皆さんお分かりですか？

正解は・・・。

ブルブル・・・。

「はい。あらミミラちゃんじゃない。どうしたの？」

「ルナちゃん？明日のスバル君の誕生日パーティー来ない？」

「なんで、私が……。」「

「あなたの（答え）愛しのロックマン様もくるよ！」「

「ロックマン様！！？わかった！絶対行くわ！明日よね？？」

「そっだよ。」「

「じゃ、明日行くわ！」「

と云うわけで正解は「スバルをロックマンに電波変換させる」でした！！

「さて、次はゴンタ君ね！」「

「これは簡単そう……。」「

「といったら、これしかないね！」「

「……………。」「

さあゴンタを誘う方法って何でしょうか？

「あゝこれは簡単だ!!」

『（ヒント）あいつの好きな〇〇を使えば一撃必殺だな……。』

「じゃ、早速やってみよう!」

皆さん、お分かりですか？

正解は……………。

プルプル……………。

「もしもし？」

「おう。スバルか。どうしたんだ??」

「あのさ、明日僕の誕生日パーティー来ない？」

「悪いが、明日は牛井の試食会に行かなければ……………」

「牛丼10杯だすからさ!」

「ホントか!?!?わかったいくぜ!?!待ってるよ!?!」

と言っわけで正解は「牛丼でつる」でした!!

「さあついに来たね」

「うん」

「一番の難敵キザマロ君よ」

「べじゅってつる?」

「わかった!」

「なにになに?」

「」

さあキザマロを釣る方法は何でしょうか??

「え〜。」

『それは厳しいんじゃないか?』

『いくらなんでも(ヒント1)作者を使うなんて……。』

「まあでも作者は(ヒント2)歴史の知識は学校でも指折りって言われているぐらいだからね。」

『難しいかもしれねえがやってみようぜ。』

「うん。」

さあ皆さん!お分かりですか??

今回は僕が使われるなんて……………。

正解はこれです!

プルプル……………

「はい、もしもし?」

「キザマロ？」

「おや、スバル君じゃないですか！」

「明日さ、僕の誕生日会これる？」

「申し訳ありませんが、今僕は日本史の研究に忙しいので……。」

「作者が（答え）日本史教えてくれるって！」

「ホントですか！？ぜひ伺わせていただきます！」

「じゃー！」

「失礼します！」

というわけで正解は「作者とキザマロで歴史の対談をさせる」でした！

あゝ忙しくなるぞ（笑）

「じゃ、明日が楽しみだね！」

「うんー！」

「誕生日会ね……。フフフ。面白いシナリオになりそうね……」

ハーツは何かを企んでいた……。

スバルの誕生会（後書き）

どうでしたか？

まさか、僕がキザマロと対談なんて……。

（ヒント2）は指折りとは言われてませんが、テストは学年1位の2連覇を成し遂げて、歴史検定4級を持つてるほどです（笑）
すみません。自慢しちゃいました（笑）

これからも頑張ります！！

スバルのパーティ<前編>

作者の言葉

・このあと、キザマロとマジの歴史トークをさせていただきます。
小学生相手に負けるわけには行きませんので、本気でぶつけさせていただきます。

ちなみに、ウィキペディアなどで一切調べずにやりますので、もし、キザマロとのトークになってもつまらんかと思わずにご清聴よろしく願います。

では、お待ちかねの本編を開始します。

翌日

「ふゝ出来た〜!!」

「結構早く終わっちゃったわね。」

ミソラとあかねが準備を進めていた。

そのころ……。

「ねえ、なんで僕がロックマンにならなきゃいけないの?」

『何言ってるんだ。委員長とか言う奴を落とさせるんだろ?』

「落とさせるって……。ダンディじゃないんだから……。」

『なんか、お得意技でも披露するか?』

「得意技?」

『ウイルス退治とか?』

「いいよ、めんどくさい……。」

『ケツ!わかったよ。』

「一応、何故か僕が司会者だからね。ウォーロックも協力してよ。」

『わかったよ。』

しばらくして例の3人とツカサ(ゲストって言うことで。)がきて
10分後家の照明が落ちた。

そして、BGMが流れてきた。

曲 嵐 「Move your body」

パッ!!

「皆さん！お集まりいただきありがとうございます！..」

「キヤー！ロックマン様〜！..」

「今回は沢山のコーナーを設けております！皆さん！楽しんでください！..」

「「「イェーイ！！！！」「」」

「それでは、まず最初にこのコーナーです！..」

タイトルは「キザマロVS著者」歴史選手権！..というものだ。

「ゲストをお呼びいたします！勇輝先生です！..」

「どうも！..このたびお招きありがとうございます！..」

「では、どうぞ、そちらの席へ。」

「ありがとうございます！..」

「では、ルールを説明します！..」

ルール

・キザマロと勇輝先生で日本史トークを行います！
ただ、トークでは間違いなくつまらないと思いますので、
審査員を読者の皆様とさせていただきませう！
歴史の知識をこっちのほうを持っているというほうに一票を入れ
てください。
ただし、締め切りは3月24日の夜11時59分までです。
読んだ方は必ず投票をお願いします！

「では、テーマは・・・第1次世界大戦です！！トークバトル・
スタート！！！」

勇輝先生から

「えーとですね、第1次世界大戦はセルビア人青年がオーストリア
皇太子を暗殺したサラエボ事件が原因で勃発しました。」

「なぜ、そんな事件が原因で世界大戦が起こるのですか？」

「う・・・えっと・・・当時の世界ではオーストリアを攻撃すると言っ
のは世界の国に対する威嚇行為だからだったかな・・・。」

「なるほど。当時は列強が暴れていました。バルカン半島で。では、
なぜ列強はバルカン半島であばれていたのですか？」

「それは、帝国主義政策を取るためだ。植民地支配をするために。」

「では、どこを植民地にしたのですか？」

「それは……。」

「それは、アフリカです。では、なぜアフリカを植民地にする必要があったのか？答えは財源確保です。ちなみにこのころ……。」

「南アフリカでダイヤモンドがはじめて発見されたのだろう。」

「なぜそんな知識まで……。」

「なめるなよ。俺は歴史検定4級だぞ！」

「ぐ……。」

「そこまで！！第2ラウンドへ移ります！」

次は漢字の意味についてです。」

「では、キザマロ君。変（本能寺の変とか）ってどういみですか？」

「簡単ですよ。クーデターです。」

「なら、揆（加賀の一向一揆）ってどういう意味？」

「う……。」

「心を1つにするという意味です。」

「今度はこちらからです。役（文永の役）ってどづいづいみですか？」

「それは、外国との戦いですよ。」

「それはおかしいじゃないですか。」

「なぜ？」

「前九年・後三年の役はどづなるのですか？」

「しらん。」

「しらんって……。」

「そこまで……これで終了です！読者の皆様！判定をお願いします
（ウインク）」

スバルのパーティ<前編>(後書き)

どうでした？

なんか、自分が発言したことにミスがありそうな気が……。

まいいや。

判定のほうよろしくお願いします!!

スバルのパーティ<中編>

「では、発表します……。」

開口一番にロックマンが言った。

「勝者は……勇輝先生です！」

「やった〜!!」

ルナが疑問を發した。

「これってロックマン様の勝手な選択なの？」

「いや、読者の方々から応募してもらったよ。」

「どんな結果だったの？」

「え〜と、勇輝先生が5・5票でキザマ0・5票ってところだよ。」

「なんで0・5票なの？」

「確か読者のある方が5分5分って言ってたからそれぞれ0・5票

っつことど。」

「なるほど。」

「じゃ俺はこのへんで。」

「勇輝先生ありがとうございました!!」

「さて、次はカラオケ大会です！」

このへんは省略させていただきます。申し訳ありません。

「やっぱりツカサ君うまいです!!」

「そっつ?ありがとうございます。」

「では、次に……………」

ドカーン!!…

ミソラは電波変換した。

「ショック・ノート!!」

隣のアンプから音符が発射される。

ドカン!

当たってはいるが、全く効いてなさそうだ。

「バトルカード! プラスキャノン!」

ドン!!

これも当たったが効いてない。

「なんて、強いんだ!!」

「今度はこっちからだ!! オーバー・ザ・レーザー!!」

ものすごい大きいレーザーがロックマンとハーブノートめがけて撃つてくる。

2人の運命は・・・！？

スバルのパーティ<中編>(後書き)

どうでしたか??

なんか、キザマロに勝って安心しました。(笑)

今回は短くなってすみません。(汗)

久々のバトルなんでちょっとグツダグダになってるかもしれませんが・

自分自身バトルシーン苦手なので誰か僕にレクチャーしてください・

これからも応援よろしくお願いします!
では……。

See you again……。

スバルのパーティ<後編>

ハーツはロックマンとミソラに向かって極太レーザーをうつてきた。

だが2人はレーザーをよけた。
しかし、その代償は大きかった。

1つはコダマタウンの町が破壊されたこと。

もう1つは……

「っ……!!」

「大丈夫スバル君!？」

「腕が……!!」

「ハハハ!私が負わせた傷が響いたようだな!」

「腕が……ズキズキする……!!」

「スバル君!いいこと思いついたわ!少し痛いけどもうちょっと戦える??」

「ちよつとなら……。」

「じゃあ……。」

「うん。わかった!」

「バトルカード!ブルーカーペット!」

「そしてバトルカード!ワイドウェーブ!」

「ぐわっ!」

ハーツの乗っていたメカが凍った。

「いまだ!バトルカード!ブレイクサーベル!」

「ぐわっ!」

ハーツの愛機が煙をあげている。

「いまよ!必殺!ショックノートフォルテツシモ!」

ドギヤーン!」

「ぐわっ!」

ドカ〜ン!!

ハーツのメカが壊れた。

「とどめだ！バトルカード！ジェットアタック!!」

「ぐわ〜!!畜生・・・!!ロックマン・・・!!またも邪魔しおって・
・・・!!」
ソロ様・・・・・・・・!!申し訳ありません・・・・・・・・!!」

「やっぱりソロと関係あるのか……………」

「油断できないわね……………」

「さっ。家に戻ってパーティに戻ろう。」

「うん!!」

その後、スバルのパーティが終わって皆が帰っていった。

そして、ミソラとスバルが談笑していると1通のメールがきた。

『オイ。スバル。メールだぞ。』

「え？差出人は？」

『わからん。』

「なんて書いてあるの??」

「えーとなになにに……。今晚12時展望台に来い。だって。」

『なんか、敵のボスとかじゃないの?』

「うーん……。わからないな……。」

その後、2人は12時まで起きていたのだった。

スバルのパーティ<後編> (後書き)

どうでしたか？

たかひろさんのアドバイスによりこんな感じでした！

感想待ってま〜す！！

天才が考えた美しすぎる復讐劇

深夜12時。

スバルはこっそり家を抜け出し、展望台へ向かった。すると、そこにいた人物は……。

「ソロ!!」

「フン。久しぶりだな。」

「僕に何のようだ!」

「そうあわてなくてもいい。ただ、貴様が俺たちの計画を邪魔しているのかと聞きたかっただけだ。」

「計画……。」

『ソロ……お前は一体何を考えている……??』

「俺はボスと手を組みこの世界を孤独に染め上げる計画を実行している。」

「何だつて……。」

「絆などと言った腐りきったものは必要ない。孤独の方がずっと素晴らしい。」

「許さない……!!」

「何だと……。」

「そんな事……僕が絶対させない!!」

スバルの目は怒りでいっぱいだった。

「見せてやる。お前にささげる天才が考えた、「美しすぎる復讐劇」をな……。」

「美しすぎる復讐劇……?」

「そうだ。復讐劇だ。」

「ケツ!さつきから言ってるや偉そうなことはっか言いやがって!」

「まだ、戦いはしない。」

「何!?!」

「俺とお前がやったところで復讐劇は簡単に終わる。十分に痛めつけてからやってやる……。フフフフ……。」

そして、ソロは消えた。

「復讐劇……。」

『天才が考えた美しすぎる復讐劇……』

「僕たち……天才と勝負をするのか……。」

『天才か……おもしろえ。やってやるうじゃねえかスバル!!』

「え……??」

『俺たちでその「天才が考えた美しすぎる復讐劇」をぶっ壊してやるうじゃねえか!!』

「うん!!」

そして、スバルは家に帰ってきた。

だが、スバルは頭に引っかかった。

「天才が考えた美しすぎる復讐劇」という言葉だ。

スバルはミソラに話した。

「天才が考えた美しすぎる復讐劇……。」

「うん……。」「

『あ!』

「どうしたの?ハーブ。」

『天才って……まさか……!?!?』

『まさか……あいつか!?!』

「ウォーロック、何があつたの??」

『カイパーベルト……!?!』

「誰??」

『カイパーベルト。FM王ケフェウスの親父だ。』

「そいつがどうしたの?」

『カイパーベルトは、全知全能のFM星人……。そのボスが天才ならこいつが大元がも知れないわ!?!』

「全知全能……!?!?」

『ああ。全てを兼ね備えた宇宙にたった1人の天才だ。』

「そんな奴とバトルするの!?!?」

『まあそういふことだ……。』

「これはさすがに厳しいわ……。」

『だが、天才とはいえ、1つ間違つてると全てが台無しになって、全ての作戦が狂ってしまうという弱点もある。』

「じゃあ、まだ勝てるかもしれないのね！」

『そういふことよ。』

「じゃ、もう風呂に入って寝よっか。」

「これから始まる……。天才が考えた美しすぎる復讐劇がな……。」

ソロの陰謀は何なのか……。

天才が考えた美しすぎる復讐劇（後書き）

どうでしたか？

スバル・ミソラVS天才になりました！

ボスの名前は後々発表します！

感想お待ちしてます！

では、次回をお楽しみに！

遭難<前編>

「スバル君！おきて！！」

「何？まだ夜中じゃん……。」

「そうじゃないの！！起きてっばー！！」

「え……？？」

「ほら！外！！」

「ええええええ！！！！！！！！！！」

なんとここはエレベスタの頂上だ。

「なんで、こんなところに！？」

「知らないわよー！！」

『まさか……！？』

「何、ウォーロック！！？」

『まんまとはまったな……。』

「どうしようー！？」

『もう始まってんだ・・・天才が考えた美しすぎる復讐劇に・・・』

「そんな・・・!!!??」

『おおかた、ここで私たちを餓死させるって事ね。』

「ハープ・・・どうすればいいの・・・?」

『電波変換で逃げましょう!』

『いや、それはできねえ。』

「どうして?」

皆が思った疑問をスバルがぶつける。

『ここは、極寒の地。今逃げたら、電波変換してもパワーは1/3しか出せねえ。』

「じゃあ、晴れた日にいけばいいんだね!」

『そうだ。』

「でも、私たちどうすればいいんだろう・・・。」

「話でもして、夜が来るのを待とう……。」

「うん……。」

こうして、スバルとミソラは話して夜を待った。

そして、夜が来た。

「ねえ、お腹が空かない？」

「うん……そうだね……。」

そのときスバルはポケットに入れてあったチョコレートを取り出した。

「はい！」

「え……？」

「チョコレート全部あげる！」

「え……でもスバル君……自分の分が……。」

「いいよ、僕の分は！」

「なんで・・・??？」

「だってミソラちゃんが一番食べなきゃいけないのに僕が食べたらよくないでしょ？」

「・・・ありがとう。」

「いいよ！」

「でも、スバル君も食べなきゃいけないでしょ？だから半分あげる！」

「ありがとう！」

2人は同じチョコレートを食べた。

こうして2人は寝たのだった。

「フン。せいせい苦しむがいい……ロックマン……。」

そう。天才が考えた美しすぎる復讐劇は始まったのだ……。

遭難く前編く(後書き)

どうでしたか？

始まりましたよ〜復讐劇！

これからもどんどん皆さんを悲劇に落ち込ませますよ〜(笑)
読者の皆様へ

ホントに皆様が好きじゃなさそうな感じの小説の展開にさせちゃって申し訳ありません。

遭難<中編>

寝てるときの出来事だった。

ミソラは何故か今日に限って寝れなかった。
でもスバルは爆睡状態だった。

ミソラはスターキャリアを見る。

ただいまの時間3：47。

まだまだ夜明けまでは時間がある。
ハープも寝てしまってるためミソラも寝るといふ選択肢しかなかったようだ。

「スバル君って私の事どう思っているんだろう……。」

ものすごい恋する乙女的なセリフを言った。

「明日の朝聞いてみよう……。」

寝ようとしたその瞬間だった。

(え!?)

なんとスバルがミソラに向かって転がってきたのだった。
スバルとミソラとの距離およそ20センチ。

(どうしよう………。なんかすごいドキドキする……。)

大切な友達のはずがこんなに狂おしく感じてるミソラ。

(ちょっとぐらいいいか)

ミソラは大胆な行動に出た。

それはスバルを抱きながら寝るといふ行為だった。

書いてる自分が物凄い恥ずかしい(汗)

そして1日目が終わった。

外を見ると快晴だった。

『よし！今日中に帰るぞ！！』

「『『お〜〜！！』』」

2人は早速・・・。

「電波変換！星河 スバル！！オン・エア！！」

「電波変換！響 ミソラ！！オン・エア！！」

2人は電波変換した。

スバルはスタ・キャリアーで世界地図を見た。
計算をするとおよそ6200キロである。

『ここから音速でかえるから秒速340メートルで帰るとするとおよそ5時間ぐらいで帰られるな。』

「はやつー！！」

『ホントなら光速を使いたいところだがそれを使うと戦闘力が落ち

るからな。音速で帰ったほづがいいな。』

『それはアタシも賛成ね。』

「早く帰りましょう！」

「うん！」

こうして2人は帰るのだった。。。

「復讐劇は進んでるか・・・？」

「はっ。今ロックマンとハーブ・ノートはエベレストを出発した模様です。」

「ならよい。私の考えた復讐劇は成功だ。。。カイパーベルト。。

「。。。」

『何でしょうか?』

「次はどんな復讐劇を見せるか?」

『そろそろ殺人しますか……………』

「そうだな……………」

「ソロ……………」

「はっ。」

「奴を出せ。」

「奴とは?」

「スペールだ。」

「はっ。おおせのままに……………」

「まだ復讐劇は始まったばかり。ロックマンは直に朽ち果てるだろう……………」

「ハハハハ!!!」

そう、まだ始まったばかりなのだ。

遭難く中編く(後書き)

どうでしたか？

なんかかいてて物凄い恥ずかしかったです・・・。

感想待ってます！！

遭難く後編く第3話終了

「なんとか、帰ってこれたね……。」

「ホント、一時はどうなるかと思ったよ……。」

『いいじゃないのミソラ。スバル君と一緒にいれる時間が増えて。』

なんか楽しそうに聞くハープ。

「ちょ……！そんな事は……！！」

『ほぐだったら朝の出来事はどうなるんだ？』

『アラ。アンタにはちゃんとしたこと言っじゃない。』

『うるせえ……。』

「それは……。」

「まあともかく僕の家に戻ろうよ。」

「そ……そうだね!!！」

2人はスバルの家に帰った。

『なんか、いい感じに進行してるわね。』

『なんだよ、いい感じって?』

『ホントにアンタって鈍いわね……。』

『悪かったな。鈍くって。』

そして家に帰ると……。

『スバル!』

「何?」

『気をつける!なんか……強い奴が来る!』

「何だって!!?」

「なかなかやるじゃないか。」

「だれだ!?」

「私の名はスペール。第4の刺客だ。」

『ちょうどいい!こいつを倒したら復讐劇も終わるはずだ!』

「いくぞ！ロックマン！！喰らえ！ファイア！！」

小さな炎がロックマンに襲い掛かってくる。

「バトルカード！バリア！！」

バリアで炎をしっかりとガードする。

「炎属性ならバトルカードネバーレイン！！」

雨がスペールに向かって降ってくる。
だが簡単にかわされた。

「今度はこっちだ！ブリザラ！」

「バトルカード！テイルバーナー！！」

大きい氷の塊を溶かす。

『これ全部ファイ○○ファ○○ジーの魔法じゃねえか！！』

「バトルカード！グラビティステージ！！」

「何！？動けない！！？」

「いまだ！トライブオン！ベルセルク！！」

なんか、久々のトライブオンでスバルは焦ってる。

「KFB！サンダーボルトブレイド！！」

「ぐわー！！」

「畜生！ロックマン！！だが言っておく。これで復讐劇は終わりではない！！せいぜい苦しむがいい・・・！！ハハハハハ！！」

捨て台詞をのこしてスペールは消えていった。

『終わりじゃねえのか・・・。』

「いいじゃん。これで普通の日常に戻るんだから。」

『ケツ！』

不満そうなウォーロックを無視してウエーブアウトした。

「ただいま！」

「お帰りなさい。早くご飯を食べなさい。」

「はい。」

ミソラはお風呂に入っていた。

しばらく洗っていなかったのだ。

これで、少し普通の日常に戻れるのだった……。

「やられたのか……。ソロよ。」

「申し訳ありません……。」

「では、ソロ。今度はお前に行ってもらおう。」

「俺が……?？」

「ああ。ただ、普通に行ってもやられるのがおちだ。だから、パワーアップさせてやる。ソロではなくカルテットとして!」

「カルテット……!？」

「そのパワーアップには時間がかかる。だから当分復讐劇はお休みだ。いいな？」

「ああ。」

「一体ソロたちの陰謀とは……?」

遭難く後編く第3話終了（後書き）

どうでしたか？

ちよつと長かった第3話が終わりました！

それにしても第3話は変化が多かったなと思っていきます（笑）

ちよつとこのへんで復讐劇はおやすみしていつもの日常に戻します。
だって読者の方も復讐なんて残酷なもの読むより楽しいものを読みたいと思っていると思うので。

では、次回をお楽しみに！！

衝撃発言 第4話スタート

第4話

スペールを撃破した後、スバルたちは自宅に帰って部屋に戻った。

そして、スバルはウォーロックにある疑問を押し付けた。

「なんで、あの時キスナフォーシヒツクバンKFBが使えたんだろう？」

『大方、まだ俺の体の中にベルセルクの（ここではベルセルクの設定にしています。）オーパーツの力が残っていたのかも知れねえな。』

「なんとか、完全に消すこと出来ないの？」

『天地に頼めばいいんじゃないのか？』

「じゃ明日行ってみようか。」

『なあスバル、明日天地の所行くついでに面白いところ行こうぜ。』

「面白いところって？」

『・・・・・・・・わからん。』

「アテなしかい！」

しばらくすると、ミソラが仕事から帰ってきた。

「ただいま〜スバル君！」

「遅かったね。」

「ちょっと撮影が長引いちゃって・・・・。」

そのときウォーロックは心の中でこう思った。

『お前らは新婚の夫婦か！』と・・・・・・・・。

ウォーロックが心の中で思っている時も2人の会話は続いていた。

「スバルくん。明日暇？」

「アマケンいった後なら暇だよ。」

「じゃ、明日スピカモール行かない？」

「いいよー」

『やった！ど暇（とても暇なことです。）な時間が無くなるぜー！』

『といつてもアンタは2人とは別行動してもらっけどね。』

『ゲツ！ハーブー！』

『ガサツなあんたがいるとめんどくさい事になるのよ。』

『はいはい……。わかったぜ……。』

珍しく了承した。

でもハーブは『やっとガサツなこと認めたよ、この馬鹿。』と
思っていたらしい……。

そして、夕食の時間。

3人の会話はこの後とんでもないことに……。

最初があかねから始まる。

「ミソラ、この家の生活慣れた？」

「なれたよ！」

「スバルも大変ねえ。」

「何が？」

「恋人同士なのに。」

そのときスバルはお茶を噴出して、ミソラはカレーのご飯粒を中量噴出してしまった。

「「恋人じゃない！」」

でもミソラだけは・・・

(恋人にしたいぐらいなんだけど・・・。)

「だとしても、遊びすぎよね。」

「「関係ない！」」

「だとしても、ハモリすぎよね。」

「「ハモッてない！」」

「わかったわ。」

え？どうとんでもないかって？
しばらくしたらわかりますよ（笑）

「この際、2人とも恋人になったら？」

ほらね（笑）

「「考えます。」」

「わかったわよ。」

こうして、3人の夕食は終わった。

「なあ、まだパワーアップはできないのか？」

ソロは尋ねる。

「まだまだだ。6%しかいっとらん。」

「あとよ、そろそろ名前教えるよ。」

「フ・・。そのときがきたらな。」

「もったいぶる奴だ。」

復讐劇はまだまだのようだ・・・。

衝撃発言 第4話スタート（後書き）

どうでしたか？

今回はユーモアな文を沢山用意させていただきました！まあ皆さんはどうなのかわかりませんが・・・。

明日は〇〇ンド〇〇に出かけなくてはならないので今日あと1回更新したら今日僕は寝ます。

なので明日は更新できない可能性が高いです。

ご了承ください。

では・・・See you again・・・。

プロポーズ<前編>

2人は部屋へ戻ってきた。

スバルは布団に横になってミソラはスバルの勉強机に座った。

「とどころですか？」

「何？」

「スバル君のママとパパってどっじゃって出会ったの？」

「それはね……………」

星河 茜^{あかね}旧名 小野 茜。

大吾との出会いは茜が24歳のころの出来事だった。

茜は昔から何不自由ない幸せな生活を送っていた。

普通に公立の中学に進んだ後は優秀な高校に進み

名門の国立大学に入学。

周りは友達に囲まれていたし、顔立ちも良く、頭もいい。

いわゆる才色兼備というやつである。

大学を卒業して、宇宙管制センターの受付嬢として就職した。

彼（星河 大吾）との出会いは就職して1年の事だった……。

ある日、新入宇宙飛行士が入るため会社の集会があった。

そう。その新入宇宙飛行士が星河 大吾である。

翌日

再び受付をしていると、物凄い慌てた様子でこっちへきた。

「すみません！宇宙科はどこですか！？」

「あなたは・・・？」

「あ・・・すみません！私星河 大吾です！」

「ああ！昨日の新しい子！」

「これからもよろしくお願いします！」

「よろしくお願いします！」

こんな感じで、初対面を果たしたのだ。

茜はこう思った。

（あら、案外カッコいいじゃない！）

それに対して大吾は・・・

（美人だな）

この勢いで大吾は行動に移った。

「あのっ！」

「なんですか？」

「よかつたら今晚お食事いきませんか？」

「え・・・？」

「ダメですよね・・・急に・・・。」

「あ・・・いえ！全然大丈夫です！！」

「ホントですか！？ありがとうございます！！」

「「ちらちら」ぞー！」

「こうして、交際が始まったのだ。

プロポーズ<前編>(後書き)

どうでしたか？

一生懸命書いてたらこんな時間に！

只今23:38です！

感想待ってます！！

プロポーズ<後編>

2人が交際して1年。

茜は26歳、大吾は29歳になっていた。

そして、ある日の出来事だった。

「茜さん。」

「は……ハイ。」

真っ直ぐな瞳で言われたので思わず声が途切れてしまった。

「僕と……結婚してください!!」

プロポーズを受けたのである。

30秒考えた結果……

「こんな、私でよければ!!」

「ありがとうございます!!」

そして、翌日2人は親の許可を得て婚姻届を提出。

結婚式をあげて、2人の生活が始まった。

毎日が楽しかった。

このまま楽しい日々が続けばいいなんて思っていると……。

「茜。お前太ってないか？」

「何言ってるのよ。そんなわけ無いでしょう。」

「いや、マジでマジで。ホントに。」

「あれ？そう言われればホントね。」

「妊娠したんじゃないのか？」

「いや、わからないわ……。」

「病院で見てもらおう。」

2人は産婦人科に行った。

すると、医師の答えは……

「妊娠してますね。ざっと5ヶ月といったところでしょうか。」

とまあこんな感じで入院することになった茜。

そして、運命の日……

「オギャー・オギャー……！」

産まれた。今の星河 スバルが……。

茜が子を産んでから3日……。

「大吾さん。名前決めてくれた？」

「ああ。名前は昴だ。」

「スバル……？なぜそのような名前を？」

「宇宙はとてつもなく広い。そんな宇宙の広さぐらいの大きな優しさ・絆を持って欲しい。だから昴だ。」

「スバル！よろしくね……!!」

ここで現実世界に戻ります。

「スバル君の名前の意味ってそういうことだったんだ。」

「うん。でも、今は父さんが言ったことが達成できていないような気がする……。」

「？」

「父さんが宇宙のような広い優しさを持っているとは思えないんだ。」

「そんな人はいないよ。」

「え？」

「宇宙のような広い優しさを持つような人なんている分けない。お父さんが言ったのは少しでも宇宙のような広い優しさを持って欲しい。そういうことなんじゃないのかな……。」

「うん。そうかもね。」

「じゃ、お風呂入ってくる。」

「うん。」

スバルはお風呂に入りに行った。
ミソラは人のために尽くした！とか思っていたそつだ。

プロポーズ<後編> (後書き)

どうでしたか？

今から出かかなくてはならないので今日はもうこうしんできなくなる可能性が非常に高いです。

なんか、今回省略しすぎてすみませんでした。
感想をお待ちしています！！

一心同体

「スバル君っていい名前だったんだね！」

「うん。母さんと父さんに今の名前を^{スバル}つけてくれたことに本当に感謝しているんだ！」

「あかさ、スバル君……。」

「どづしたの？」

いきなり俯くミノラ。

なんか、哀愁でも漂ってるような……そんな感じだった。

「私ってなんでミノラっていう名前がつけられたんだろう……。」

「綺麗な響ってミノラじゃない？ほら音程的にも高いから！」

「ああなるほどね。」

「僕は、君を綺麗だって思っているよ……。」

この言葉の瞬間一同静まった。

『オイ！スバル……まさか……。』

『まさかまさかの……告白……!!?』

ミソラのは驚きでいっぱいだった。

だが……

「なんてね！ちょっと臭かった？冗談で言ったんだけど……」

読者の皆さん！絶句しないで下さいね！

「スバル君……酷い!!」

ミソラはいじけてしまった。

「あ……ゴメン！ミソラちゃん！冗談で言っちゃって……」

「……」

ミソラは泣いていた。

スバルは困ってしまった。

どうすればいいのだろうか……。

すると、スバルはあることを思いついた。

それはミソラを喜ばすのだ。

「飛び交うシグナル それぞれの今日をのせて
同じ周波数 重ねあい君と話す」

「!?!」

ミソラの様子が変わってきた。

「迷い ためらいをふりきり
そこに あるはずの道を行こう」

「スバル君……!?!」

ミソラの顔が笑顔になっていた。
そして……

「見上げる空は 心に積もる願いの色
描く 夢を映し出す」

ミソラとスバルの心は同調していた。
一心同体と言うやつである。

「必ず いつかこの手に 触れる明日への地図
強く 高く 届くまで 輝いて」

「……………」

2人が歌い終わるとスバルはミソラに抱きついた。

「ゴメンね、ミソラちゃん。酷いことしちゃって……………」

「大丈夫。気にしないで……………」

その後2人は10分間抱き合っていたのだった。

一心同体（後書き）

どうでしたか？

気づいたらこんな時間！！

もうそろそろ寝なくてはいけませんね（笑）
感想待ってます！！

スバルの気持ち（前書き）

なんか、今回は奴等が情報的なこと喋ってますよ

スバルの気持ち

こうして、抱き終わった2人は仲直りをした。

「明日楽しみだね！」

「そうだね！」

「スバル君とお出かけできるのが嬉しいな」

「僕も嬉しいよ。」

「じゃ、私お風呂入ってくるね！」

「うん！」

バタン！

ミソラは風呂に入りについて、スバルは1人になった。すると、ウォーロックが話しかけてきた。

『なあ、スバル』

『どうしたの？』

『明日行く、スピカモールってなんか面白いところあるのか？』

「うん……わからない。」

『ともかく明日が待ち遠しいぜ！』

「そうだね。」

『お前……ミソラのことどうなんだよ？』

「どっつて？」

『好きなのか嫌いなのかってことだよ。』

「好きに近い友達ってところかな。」

『……………』

そのときハーブはドア越しで2人の話を聞いていた。

「とにかく、まだわからない。これからの進展次第じゃない？」

『まあそんなところだろうな。』

ドア越しで聞いていたハーブは……

『スバル君・・・ありがとう・・・。』

感謝の言葉を告げていたのだった。

しばらくすると、ミソラが風呂から帰ってきた。

「スバル君！！」

「どうしたの？」

「展望台行かない？」

「展望台？どうして？」

「なんか、行きたくなっちゃってさ！」

「僕はいいけどミソラちゃんお風呂から上がったばかりだから湯冷めしちゃうんじゃない？」

「それで、風邪引いてもスバル君に看病してもらってから」

「まあいいや。じゃいこっかミソラちゃん！」

「うん！」

そして、2人は展望台へ行ったのだった……。

「オイ……まだなのか……。」

「まだまだだ。今29%だ。」

「そろそろ教えてくれ……。カルテットについて。」

「お前を変えるのだ。」

「は？」

カイパーベルトが話しに入ってきた。

『人間増強といったところでは、ソロ様の力を最大限に飛躍させるのです。そして、生まれ変わるのです。そう、ソロと言つ名ではなく、カルテットの名としてね。』

「なるほど。」

「これで、ロックマンを倒せると言つのなら文句は無いだらう。」

「まあな。」

「見てろよ、ロックマン……貴様を絶望の渦に巻き込んでやる・
・!!!フフフフ……ハハハハ……!!!」

スバルの気持ち（後書き）

どうでしたか？

まだまだ復讐劇は始まりそうも無いですね・・・。

いずれやりますけどね（笑）

今回はカルテットの意味を載せましたよ！

ちなみに自分ソロはあまり好きじゃないんですよ・・・。

すみません、話がそれましたね（笑）

感想まっけます！！

遂に・・・!?(前書き)

皆さん!お待たせしました!!

遂に・・・！？

2人は展望台にやってきた。

外は冬のように寒かった。

2人の吐息は白い煙が流れていた。

「スバル君。」

「何？」

子供のような笑顔でミソラに振り向いた。

「今日はスバル君に伝えたいことがあってここに来たんだ・・・。」

「どづしたの？」

ミソラの心臓は物凄いドキドキしていた。
顔がとても真っ赤にいるくらい。

「スバル君・・・！！」

「どづしたんだい？」

「わ……私と……」

「？」

読者の皆さん！もうここまできたら次に何て言っかわかりますよね？

「私と……付き合ってください！お願いします！！」

「え……？」

ミソラの顔は今にも爆発しそうな爆弾ぐらい赤くなっている。

「………こんな……僕で良ければ……。」

「本当に？」

「うん。僕でよかつたらいいよ！！」

「ありがとうスバル君！！」

こうして2人はやっと1つになれた。

「スバル君……キ……キス……してもいい？」

『あ！！そういえばお前俺たちとの会話聞いていたのか？』

『ポロロン。ドア越しで聞かせてもらったわ。』

『まあいつか。これで一件落着で。』

『そうね。』

そして、2人は手をつなぎながら家に帰ったのだった。

「カイパーベルト。復讐劇は絶対成功するのか？」

『ええ。』

「だがしくじってしまったら、この復讐劇は……。」

『全て水の泡です。』

「天才が考えた美しすぎる復讐劇……フッフ。面白くなりそうだな。」

『ですね。』

カイパーベルトの狙いは……？

遂に・・・！？（後書き）

どうでしたか？

皆さんコレ、待ってたんじゃないんですか？

書いてる僕は非常に恥ずかしかったです・・・。

でも読者の方々が面白いつて言うんなら全然大丈夫です！！

感想お待ちしてます！！

Destiny(前書き)

なんか今回もややこしい話になってすみません・・・。

Destiny

2人と手をつないで帰ってる時のことだった。

「あのさ・・・ミソラちゃん。」

「何？」

「もうちょっと恋人になるのは待ってくれない？」

「え・・・？」

「いや、嫌いとかじゃなくて、僕が本当に赤い糸で結ばれているのはこの人だって確信してからでもいい？」

「いいよ！それでも！！」

「わかったよ！じゃもう少しの間は友達ということでもよろしく！」

「よろしくね！スバル君！」

2人が家につくと2人は疲れたのか風呂に入っただけで寝たのだった・・・。

2人が寝ていると2つの電波体とのやり取りが繰り返されていた。

『ハープ。』

『何かしら？』

『スバルが言ってた赤い糸って何だ？そういう兵器か？』

『ホンッとアンタはガサツね……。赤い糸というのは運命の人だと結ばれるって言うじゃない。』

『運命？』

『2人が会おうという決まり……。つまり宿命みたいなものよ。』

『ていうか、なんで赤い糸なんだ？』

『仕方ないわね……。赤い糸の伝説について教えてあげるわ。』

『伝説！？』

『昔、16歳ぐらいのある若い人がいたのよ。その若い人はすでに付き合ってる子がいたのね。あるとき、その若い人はある老人に出会ったの。』

『ほう。』

『その老人は婚姻を司る人で、誰が結婚するかとかがわかる人なの。その若い人に対して老人はこういったの。』

『何ていったんだ？』

『お前と赤い糸で結ばれているのはあの子じゃ……………と。』

『どんな子だよ？』

『3歳の小さな小娘よ。』

『3歳!?!?』

『そう。怒り狂った若い男はその小娘を殺そうとしたの。でも肩に傷をつけただけで殺害には失敗したのね。』

『なるほど。』

『そして、14年後……………男は昔の彼女と別れて、出会うのよ……………』

『まさか・・・！？』

『そう。14年前老人にいわれた小娘にね。』

『マジかよ・・・。。』

『ちゃんと肩に傷は残っていたの。その傷をつけたのは自分だと本当のことを言って2人は幸せになったのさってという伝説よ。』

『どこの伝説だよ？』

『確か・・・中国（歴史好きな方はご存知だと思いますが、宋のころです。）のお話よ。』

『よく知ってたな。』

『ポロロン。勇輝先生から聞いたのよ。』

『やっぱりあいつ歴史（日本史）好きなんだな。』

こうして2つの電波体とのやり取りをおえ2つの電波体は眠りについていた。

この伝説は僕がたまたま知ったので助かりました！もっと詳しく知りたい方はウィキペディアで調べてみてください！

Destiny(後書き)

どうでしたか？

今回は女性の方はご存知な赤い糸の伝説について書いて書いちゃいました

(笑)

僕自身記憶が曖昧なので女性の方！

合ってるか教えてください〜！！

感想待ってます！

ハンターV G (前書き)

今回はスバル視点で初めて書いてみました。
グツダグツダかも知れませんが・・・。
それでは、どうぞ。

ハンターV G

翌日。

今日はなんか普段より早く目が覚めた。

久しぶりに天地さんに会いに行くからだろうか。

ウォーロックに起こされず起きたのでウォーロックにこう言われた。

「お前、今日は早起したな。今日は雪でも降るんじゃないか？」

って……。

ともかく僕は^{スバル}下に下りるとミノラちゃんが見慣れない服を着ていた。

「ミノラちゃん！？どうしたの、その服!？」

「あっこれ？今朝電波変換して取りに行ったの」

何を隠そう、今日はミノラちゃんとのデート（正しくは遊びというのだろうか……）も含まってるのだ。

僕は朝食を済ませ準備すると、ミノラちゃんと家を出た。

ウェーブライナーに乗ってすぐするとミノラちゃんが話しかけてきた。

「スバル君ってここ出身？」

「うん、ここ出身だよ。」

「私はベイサイドシティ出身だよ。」

「どづいつとくるなの？」

「うん……都会かな……。」

「へえ〜」

「よかったらスバル君家来ない？」

「え！？いいの！？」

「うん！」

とまあこんな感じで盛り上がっているとアマケンについた。

いつみても迫力がある。

「やあ！スバル君！ミソラ君！（アニメではこう呼んでいたのだからうしました。）」

「天地さん！」

「聞いたよ、スバル君。オーパーツの力がまだ残ってるんだって？」

「はい……。」

「安心して。もうウォーロックの体にオーパーツの力は残ってないよ。」

「どうしてわかるんですか？」

「オーパーツの力は人が使用してから2ヶ月が限界なんだ。」

「そうなんですか。」

ミソラちゃんはつまらなさそうに聞いていた。

「ちょうどいいや！ここで新しい端末に変えないかい？」

「新しい端末？」

「そう。その名もハンターV Gだ！」

「ハンターV G?」

「ハンターV Gというのは……………」

流星3を持つてゐる方はわかると思うので省略させていただきます。

「じゃそういふわけでまた今度な！」

「ありがとうございます！」

こうして2人はアマケンを後にし、スピカモールに向かうのだった。

ハンターV G (後書き)

どうでしたか？

もうすぐ第5話に突入するのですが、そこから流星3のキャラクターを(ジャック・クインティアなど)を出していきます。

なお、この小説はメテオG事件は無いものとなっております。ご了承下さい。

次回はミソラとのデートを書いています。

では……

See you again……。

ミソラとのデート〈前編〉

アマケンを後にした2人はスピカモールへと向かった。

「スバル君と一緒に出かけたのって新国行ったとき以来だね。」

「そういえばそうだね。」

バスで他愛の無い話をしているとスピカモールについた。

「スピカモール来るの初めて〜!」

「そうなの?」

「雑誌によく載ってたから一度来てみたかったんだ。」

「へえ〜。」

「あっ!スバル君!あそこのアクセサリショップ行って見ようよ!」

「え・・・あっ・・・うん!!」

ミソラに振り回されてばかりである。

「このネックレス可愛くない？」

「まあそうだね。」

「これ買っちゃお」

衝動買いつてやつである。

「次はあそこの服屋行こうよ！」

「うん！」

とまあこんな感じでぶん回されてばかりである。

そして昼になると……

「お腹すいたね……。」

ミソラが声を小さくさせて言った。

「そうだね。」

「あそこが開いてないのかな。」

「あそこって?」

「お食事どころ、ろくでなし。」

「どうだろう?行ってみる?」

「うん!」

ちなみにご存知だと思いますがさっきの、お食事どころ「ろくでなし」はスピカモールにあったアレです。

「あ!開いてる!!!」

「嘘〜!?!ずっと準備中なんじゃないの?」

「今日限りのオープンなんだってさ。」

「じゃ、いこっか!」

2人が店に入ると、中に人は誰もいなかった。

席に着くと、スバルはハヤシライス。ミソラはカルボナーラを注文した。

ちなみに、読者にとってはどうでもいい話だが上の2人が注文した

ものは私の大好物である。

「スバル君、あのどこかで見たこと無い？」

「え???あつ!?!」

向こうから来る人もスバルたちに気づいたようだ。

「やあ!」

「「勇輝先生!」」

「久しぶりだね〜ここいいかい？」

「「いいですよ〜」」

「勇輝先生、暇ですからなんか、雑談してくださいよ〜。」

ミソラが要求する。

「じゃ、次の3つから選んで!

1:ボクの昔話

2:歴史の驚く話

3:最近の学校の話

どれにする??」

「読者の皆に決めてもらおうよ。」

「それいいね！」

というわけで皆さんにどの話を聞きたいか評価・感想のところに書いて送ってください！

見た方は必ずよろしくお願いします！

一番票数が多かった奴を次回の話にさせていただきます！

締め切りは4月1日の22時までです！

待つてまゝす！！

ミソラとデート<前編>(後書き)

どうでしたか？

今回も選挙っぽいことやってみました！

書いてて、僕もこんなデートしてみたいな〜って思いました。
ある意味羨ましいぐらいです(笑)

感想・投票待ってます！

では……

See you again……。

ミシロとのデート＜後編＞

「じゃあ、ボクの昔話でもしようかな！」

「是非聞かせてください！」

注意

今から書くことは全て事実です。

「あのね、ボクが2歳のころ爺ちゃんがいてさ、そのとき爺ちゃんが煙草吸ってたんだよね」

「うん。」

「爺ちゃんの隣に座ってたらある気持ちが湧いてきたの。」

「なに？」

「これ食えんのかなって。」

「まさか・・・！？」

「そう。爺ちゃんが吸い終わったやつ食べちゃったの（笑）」

「え〜！？」

「そして、婆ちゃんがそれ見てて近くの病院へ連れてかれて、煙草

を出されたという話。」

「どうやってだしたの？」

なぜかこういふ話には興味津々なミソラ。

「ん？こう逆さまにしてクイッククイックって感じで！いわゆる宙吊り
つてやつ（笑）」

『なんで、そんなもん食ったんだよ！？』

ウォーロックが突っ込みをいれる。

「そんなもん、当時の俺に聞いてくれ（笑）」

軽く受け流す勇輝先生。

『ポロロン。ほかに何かないのかしら？』

「じゃあ……5歳の話やってあげるよ。」

「教えて教えて！」

「ボクがスキーを始めたのって5歳なんだよね。初めてスキー場行

ってやっと普通に滑れるようになったら父さんに無理矢理超上級のコースに連れてかれたの。」

『どんだけひどい父親なんだ……。』

「でもう、全然滑れなくなつて泣いちゃつたの滑つてる途中。」

「え、転んじやうじゃん！」

ミソラが突っ込みをいれる。

「いや、あの時物凄い吹雪があつて前見えないもん（笑）で、少しでも前に進んだらなんか、目付近が冷たかつたの。」

「涙じゃない？」

「そのときはどうでもいいや見たいな感じで滑っていたんだけど全然スピードが遅くつてまた泣いてたら後ろから押してくれる人がいたの。」

「誰々？」

「いや、知らない人（笑）」

『知らないのかい！』

ウォーロックがずっこける。

「そして、下について、それから目の事が心配になったの。」

『どうなってたのかしら?』

「なんと、涙が凍っていたの!」

「『『ええ〜〜!?!?』』」

「で、ずっと食事のところで涙を溶かしていたという悲しい話がありました(笑)」

しばらくすると、ハヤシライスとカルボナーラが出てきた。

「じゃ、俺帰るよ!」

「『さよなら〜!』」

そして、勇輝先生が帰ると、2人は楽しく食べた。

「帰ろっか?」

「うん!今日は楽しかった!」

「ボクも楽しかった!」

「あのさ、スバル君……。」

「何？」

「手……繋いでくれないかな……。」

「え！？まあいいけど……。」

「ホント!？」

2人は手を繋ぎあつた。

2人の顔は赤くなっていた。

『クツクツク……2人の顔が赤いぜ……』

『笑うところじゃないでしょ……』

ハーブがウォーロックに突っ込みを入れてた。
その心のなかでは……。

『やっぱり馬鹿ねえ』

と……。

そして、2人はコダマタウンに帰って、家に帰った。

明日はミソラちゃんの家泊まることを母さんに言っ
て、風呂に入
って2人は寝たのである。

「スバル君……ありがとう……。」

ミソラは心の中で思っていた。

「オイ……まだなのか……。」

「まあ落ち着け。今48%だ。」

「星河 スバル……いや、ロックマン……。絆などという腐り
きったものを壊してえ……。」

「フ……。完了したら思う存分やるがいい……。」

「ああ……。」

ソロはカルテットに変わりつつあった……。

ミシラとのデート＜後編＞（後書き）

どうでしたか？

なんか、今回は過去最長だと思う・・・。

僕の昔話どうでしたか？

これで、あまり受けなかったら正直ショックです・・・。

ともかく、そろそろ50話になりますので、何か企画を用意します。多分トークショーだと思えますが・・・。

感想待ってます！

バトルウィザード大会（前書き）

今回もスバル視点です！

バトルウィザード大会

翌日。

今日もウォーロックに起こされた。
だからなんとなく気分が悪い。

朝食と洗顔等を済ませ家を出る。

普段は電波変換させてもらうのだが今日はそんな気にもなれなかった。

「おはようございます。」

委員長の声がこだまして全員が挨拶をする。
学校では当たり前前の風景だ。

「明日は土曜日だ。学校に間違えてくるなよ。」

今時間違えないだろう。

昭和時代のオトボケ学生じゃあるまいし。

『確か今日はミソラの家に泊まりに行くんだろ?』

ウォーロックが尋ねる。

「うん。」

『お前の今日が楽しみだぜ……!』

「なんか言った?」

『いや、何も言ってるえよ。』

ウォーロックがなにかごまかしたように言う。

でも、僕はそんなことも気にならなかったのでスルーした。

「よーし1時間目の授業は社会だ。教科書・ノートを出せ。」

社会。

自分が一番嫌いな科目だ。

何故かって?

そりゃ覚えること多いから。

勇輝先生がなんであんなに社会が好きなのか今でもわからない。

いいじゃないか!好きなんだから!

勇輝

「そして1397年足利義満が金閣をつくって、北山文化が……」

『なんで、学校は勉強するんだよ。』

「そりゃあ、教育委員会が決めてるから。」

『めんどくせえな』

2時間目・3時間目も相変わらずのほほんとしてたウォーロックだった。

「よし6時間目だ〜学活だ〜！」

『6時間目なんだよ?』

「バトルウィザード大会だよ！」

『は!?!まさか俺暴れるのか!?!』

「そのままかです(笑)」

『よっしゃ!やつらをギッタギタにしてやるぜ……!』

「手加減してやってね……。」

皆が体育館に集合すると大会が開かれた。

「1回戦はウォーロックVSダースピーターです！」

『ケツ！あんなやつ1秒で終わらせてやるぜ！』

『よろしく……。』

挨拶が終わった。

ウォーロック、ちゃんと挨拶しろよ！

「Ready fight！」

戦いが始まった。

バトルウィザード大会（後書き）

どうでしたか？

短っ！って思うかも知れませんが次回は50話記念の何かをやるので、今回は許してください^^

というわけで書いておよそ1ヶ月ぐらいですかね！

結構頑張ったな〜って自負しております。

次回はスペシャルに行くので楽しみに待っててくださいね！
では……

See you again……。

50話記念スペシャル・イベント

勇輝

「どうもー！いや〜皆さん！本当に応援ありがとうございました！
やっと折り返し50話までこれたな〜って今改めてしみじみと感じ
ております！本当にありがとうございます！」

パチパチ・・・！

勇輝

「今回もトークショーやって行くのですが今回はここで、キャラク
ターの説明をしていきたいと思えます！ではどうぞ！」

星河家

母：あかね（茜）

父：だigo（大吾） 行方不明

息子：スバル（昴） 主人公

祖父：？

祖母：？

響家

母：おと（音） 他界

父：シド（志努） 他界

娘：ミソラ（美空） ヒロイン

兄：？

その他の愉快な仲間たち

委員長 仲間

ゴンタ 仲間

キザマロ 仲間

天地 父親の親友

ツカサ 仲間

？

？

？

敵

謎のボス その正体はソロしか知らない。

ソロ 今カルテットに改造(？)中

？

？

「はい！まあこんな感じですね！ちなみに？はそのうち出てくるので楽しみに待ってて下さい！」

いい感じで仕切っている。

「それでは、そろそろトークショーに移りたいと思います！」

ワーワー！

パチパチ・・・！

「え〜今回のゲストは例の4人です！どうぞ！」

スバル・ミソラ・ウォーロック・ハープ

「こんにちは〜！！！」

勇輝

「ようこそいらっしゃいました！」

スバル

「なんか、段々なれてきたなあ・・・。」

勇輝

「ではそちらにお座りください！」

4人が座りました。

勇輝

「え〜早速ですけども50話記念となりましたが、どうですか？」

スバル

「なんか、早かったような気がしたな〜」

ウォーロック

『まあ早いつちゃあ早いもんか。』

ミソラ

「時の流れが速かったです！」

ハープ

『アタシもミソラと一緒にね。』

勇輝

「なるほど。じゃあ、今日もがんばって行きましょう！」

4人

「OKです！」

勇輝

「では、50話記念という事で今の気持ちをスバル君に話してもらいましょう！」

スバル

「やっぱり、早かったし何よりも読者の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。」

勇輝

「ほお！ウォーロックはどう？」

ロック

「ガッツな俺が言つが暴れれるシーンが少なすぎて退屈だったぜ・・
」

勇輝

「文句あるなら出番減らすよ？」

ロック

「ああ悪い悪い。ともかく読んでくれる奴には感謝をしておくぜ。
」

勇輝

「ウォーロックにしてはいいコメントでしたね！」

ロック

「オイ・・・・。」

勇輝

「じゃあミソラちゃんどうだった？」

ミソラ

「早かったし、何よりもスバル君と一緒に入れたことが嬉しかった
な」

スバル

「……………(顔から火が出てる)。」

ロック

「オイ！スバル！顔が赤いぞ……………」

勇輝

「まあその気持ちもわかりますけどね。」

ミソラ

「スバル君は私といるの嫌だった？」

勇輝

(オイオイ…………そんな追い討ちかけるなよ)(笑)()

スバル

「い…………嫌じゃないよ！」

ハープ

「そろそろ進行させたほうがいいんじゃないのかしら。」

勇輝

「それもそうですね。じゃ、ハープはどんな気持ち。」

ハープ

「アタシは大変だったわよ…………馬鹿を拉致したり、暴言はいたり……………」

ロック

「オイ！馬鹿って誰のことだ！？」

スバル

「いや、言われる間もなくウォーロックでしょ。」

ロック

「……………」

ハーブ

「まあ、それなりに楽しかったわ。何よりも読者の皆様には感謝の気持ちで一杯です。」

勇輝

「ロックとハーブって雲泥の差だなあ……………」

ミソラ

「雲泥の差って？」

スバル

「全く違っつて事だよ。」

ロック

「なんか、ムシャクシャするぜ……………」

勇輝

「はい！皆さん今日もありがとうございました！またよろしくお願
いします！」

4人

「ありがとうございました！」

勇輝

「これで50話記念スペシャル・イベントは終了です！なんかつまらなかつたという方も多いかもしれませんが何よりもご清聴ありがとうございました！50話で折り返し、すなわち後半戦というわけではございません。一応最終回まで考えてはおります。ここまですれたのも何よりも読者の皆さんのおかげです！本当に感謝の気持ちでいっぱいです！！では、次回を楽しみに待って下さい！改めて本当にありがとうございました！！」

銀髪の少年（前書き）

初挑戦です！

銀髪の少年

バトルが始まった。

『うお〜！ビーストスイング〜！』

『ぐはっ〜！』

ダースビーダー（勘違いされたかた多いかも知れませんがこれは僕が勝手につけた名前です。）は倒れた。

10秒経っても起きなかつたのであっさりKO勝ちしたウォーロックだった。

『ケツ！話にならねえぜ！』

「手加減してよ〜（泣）」

『するわけねえだろ〜！』

なんで僕が怒られてるんだろうと思ったスバルだった。

その後2回戦まで行くと・・・

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

「よしバトルウィザード大会は次回に持ち越した！じゃこの場で解散だ！」

育田先生が終わりを告げると皆は一斉に教室に帰って帰宅した。

「ここからスバル視点で書いていきます」

僕は家に帰るとすぐさま宿題をやり始めた。

すぐ片付けてテレビを見る。

特に面白いものもやってない。

何故か腹が減ってきた。

キッチンに行ってもお菓子など食べるものがひとつもない。

僕はある考えにたどり着いた。

最近できたラーメン屋に行こうという考えに。

『おい、金なんか持ってどこ行くんだよ？』

ハンターから声が聞こえる。

「近くのラーメン屋に行こうかと思ってさ。」

『なんだ？ラーメンって？』

「その店、ウィザード専用のラーメンもあるから食べてみたらわかるよ。」

『ふーん、ま、美味しけりゃいいんだけどな。』

しばらくすると、ラーメン屋にたどり着いた。

「いらっしやいー」

大将の声がこだまする。

スバルとウォーロックは席に着くと、メニューをみた。

「醤油ラーメンとウィザードラーメンひとつずつで！」

「はいよー！」

注文が終わると、ウォーロックが話しかけてきた。

『そういえば、最近復讐劇ってどうなったんだ？』

「さあ……。今はお休みなんじゃない？」

『つまんねえよな……。』

「ウォーロックらしいね。」

『まあ俺は俺だからな。』

話していると、銀髪の少年が入ってきた。
僕の席の隣に座ってきた。

「Are you？」

「はい？」

唐突に話しかけられらのであせったスバル。

「Are you a Rockman?」

スバルは日本語に訳していた。

(あなたはロックマンですか?)

「Why do you know me?」

(なぜあなたは僕を知ってるのですか?)

「Because you are famous.」

(なぜならあなたは有名な人だからです。)

「Really?」

(本当ですか?)

「Yeah.」

(はい。)

「Thank you!」

(ありがとうございます!)

「You are welcome!」

(どういたしまして!)

その後2人のやり取りは続いたそうだ。

銀髪の少年（後書き）

どうでしたか？

僕初めて英語を使ってみました。

自分の中1なので英語の表現が多々間違ってる可能性があります。
間違ってたなら指摘してください。

では！

感想待ってます！

ロックマンのラスト（前書き）

あ、勘違いしないでくださいね。
これでおわりじゃないですよ。

ロックマンのラスト

銀髪の少年との話が終わると、彼は帰っていった。

『なあ、お前何話していたんだ？』

「んーと、英語っていう、アメロッパの言葉だよ。」

『あードンブラー湖のやつか？』

「そうそう。」

しばらくすると、大将がラーメンを持ってきた。

スバルは当たり前のように箸をとって、食べ始めた。だが、ウォーロックは箸すら触ったことがないので、なんか怖がっていた。

「どうしたの？」

『いや・・・なんでもない。』

ウォーロックは箸をスバルみたいに割って恐る恐るラーメンを食べた。

『!!--』

ウォーロックの顔が驚きの顔に変わった。

「美味しい?」

『ああ!めっちゃ旨いぜ!スバルたちはこんな旨いものを食べていたのか!』

「うーん・・僕たちにはその驚きがよくわからない・・。」

ウォーロックが驚きの速さで食うと、もうぐったりと倒れていた。

スバルも食べ終えて、会計を済まし、家に帰った。

くミソラ視点で書いていきます！く

「ハイ！OKです！」

監督に言われてモニターを見て自分の演技を確かめた私。
自分的には文句はなしだった。

「明日でクランクアップです！最後がんばりましょう！！」

監督の挨拶が終わり解散になると、私はスバル君の家に帰った。

（敵視点）

「そろそろ出来たんじゃないのか？」

「今は68%。そろそろ完成するな。」

「そろそろ教えてくれ。お前の名前は何だ？」

「……………私の名は……………ない。」

「何だと……………」

「電波変換の名はカイパーゴッドベルトだ。」

「カイパーベルト……………全知全能の神か……………」

『あのロックマンなど一瞬で殺せますでしょうな。』

「だが、復讐劇はまだ始まったばかりだ。本当の恐怖はここからだ……………」

ボスがトーンを低く言い放つ。

「この復讐劇のラストは……………なんだ？」

ソロが尋ねる。

「決まっておる。ラストは・・・ロックマン死亡・・・だ・・・」

「このラストは俺が決めるのか？」

「長いことの決着をつける・・・からな。」

「フン。ロックマンの死か・・・面白い。」

「天才が考えた美しすぎる復讐劇・・・。真実は最後にすべてわかる・・・。」

真実は・・・何なのか・・・。

ロックマンのラスト（後書き）

どうでしたか？

この復讐劇・・・ラストは、ロックマンの殺害なのです・・・。

ごめんなさい。暗かったですね！

ともかく、書いてて思いました。

あの銀髪の少年はなんだったんだろう・・・？

し招待(前書き)

短っ!!

って思つかも知れませんが

気にせず見ちゃってください(笑)

1) 招待

「ただいま」

スバルが言うと、早速部屋に行ってミソラちゃんの家にとまりに行く準備を始めた。
しばらくすると・・・

「ただいま」

ミソラも帰ってきた。

「スバル君いる？」

ミソラが聞くと、スバルは

「いるよ」

と、言い返した。

ミソラがスバルの部屋に来るとミソラはスバルにたずねた。

「何やってるの?」

「今日ミソラちゃんの家泊まりに行く準備だよ!」

「あっ!そっか!今日だったね!」

「そっだよ!」

忘れていたミソラ。

しばらくすると準備が終わった。

「じゃ行こうか!」

「うん。」

2人が家を出ると、ミソラと一緒にウェーブライナーの乗り場についた。

「次のやつ何分?」

「えーとね、16時19分の電車だよ。」

「わかった。」

しばらくすると、アナウンスが流れた。

『まもなく、ベイサイドシティ行きが参ります。A t r a i n
f o r b a y s i d e c i t y w i l l c o m e s o o n .
』

電車が来たのでスバルとミソラはウエーブライナーに乗った。

「スバル君ってベイサイドシティって初めて？」

「うん。なんか名前が都会っばいね。」

「まあ都会って言うほどでもないけどね。」

「コダマタウンは田舎だからなあ・・・。」

「ふふっ。そうかもね。」

話を進めると、アナウンスが流れた。

『まもなく、ベイサイドシティです。T h i s t r a i n i s
f o r b a y s i d e c i t y .
』

2人は電車を降りた。

その景色は都会に等しい町だった。

「わあ〜なんかコダマタウンと雰囲気違うな〜。」

「そっつ〜。」

しばらく歩くとミンソラの家に着いた。

1)招待(後書き)

どうでしたか？

最近、僕はシューティングスター交流会という会を作りました。

今、4人メンバーがいるんですがあと12人欲しいので、メンバーになってくれる人は僕のほうにメッセージを入れてくれると助かります！

流星3を持つてる人に限りますのでご注意ください！

たくさんのご応募お待ちしております！

感想も待ってます！

では・・・

See you again・・・。

ミソラの家<前編>

「お邪魔します・・・。」

「て言っても、私しかいないんだけどね。」

「あ、そうか。」

ミソラの家に入ったスバル。
スバルは何故か緊張していた。

「人の家に入ることってあまりなかったな。」

「ミソラの家は初めてだからかしら？」

「まあそうなのかもしれないな。」

ミソラの部屋に入ると、スバルは心臓がドキドキしていた。
部屋の内装はピンクを全般的に使っていて、所々にポスターなどが貼ってあった。

「じゃあ、スバル君おやつ取ってくるから待っててね！ダンスとか開けないでよ。」

「開けないよ!!！」

ボタン！

ドアが閉まるとウォーロックが話しかけてきた。

『なんでダンスとか見ちゃいけないんだ？』

「それは、ここで言っちゃまずいから……。」

『そうなのか……。』

「ん？」

スバルは1枚の写真に気づいた。

その写真はミソラとミソラの母との2ショット写真だった。

「昔のミソラちゃん……とても笑顔だね……。」

『ああ。曇りのない笑顔だな……。』

「例えが渋いね。」

『うるせえ……』

怒られていると、ミソラが戻ってきた。

「あれ？ミソラちゃん、服変えた？」

「うん！」

コスチュームチェンジをしたのだった。

それからいろいろ話していると、夜になっていた。

「これからどうする？」

「近くのレストランにでも行かない？」

「じゃ行こうか！」

2人は家を出ると、ファミリーストランに着いた。

席に着いて、注文が終わると、スバルが話しかけてきた。

「ねえミソラちゃん、変装とかしなくて大丈夫なの？」

「スバル君こそ変装しなくていいの？」

「うっ。。。」

それは、4時間前の出来事だった。
2人が電車に乗っていると、電車がとまったのだ。
電波ウィルスの仕業だと思ってスバルは電波変換を試みるのだが、
人前なので出来なかった。
でも、どうしようもこうしようも無かったので
スバルは・・・

「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

ロックマンに已むを得ず電波変換したのだった。
この行為はつまり、ロックマンの正体は星河スバルだということが
ばれてしまった
ということなのだ。

「まあ・・・大丈夫じゃない？」

「いや、大丈夫じゃないと思うよ・・・。」

しばらくすると、注文の品が運ばれてきて、
2人は料理を食べた。

食べ終わると、なにやら10代の男がヒソヒソと喋っていた。

「ねえ、あれ響ミソラじゃねえ？」

「あ！本当だ！」

この一言から……

「『『『『響ミソラだ！！』』』』」

スバルは逃げる方法を考えていた。

「僕が全額払う！だから、ミソラちゃんは逃げて！！」

「う……うん！」

こうして、スバルはお勘定を済ませ、ミソラは1対30ぐらいで逃げていたのだった……

ミソラの家<前編> (後書き)

どうでしたか？

皆さんのおかげで交流会は1人増えました！

たくさんのお応募お待ちしております！

何度も言いますが応募の方はメッセージを送ってください！(自分のメアドも載せて)

この調子で書いていきますのでよろしくお願いします！

では、次回お会いしましょう！

ミソラの家<中編>

あれから逃げ切ってなんとか帰って来れた僕とミソラちゃん。
ミソラちゃんはもう息が切れ切れの状態だった。

「ミソラちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だよ！普段からファンの人に追い掛け回されているから」

「ご苦労様です。」

なんか意味のわからない返事をした僕。
とにかく、お勘定が高かったのには驚いた。

「スバル。顔が沈んでるが、大丈夫か？」

「いや、精神的に大ダメージだよ……。」

「いくらだったんだ？アレ。」

「5700ゼニーだよ……。」

「高いな〜オイッ！」

「いや、そこ突っ込むところじゃないし……。」

2人のやり取りがおわってミソラちゃんの部屋に行くと、ミソラちゃんはなんか机に向かっていた。

「なにやってるの？」

「作詞だよ！」

「へ〜。」

「完成したら、一番に聞かせてあげるからね！」

「ありがとう。ミソラちゃん。」

「いいよ！スバル君、お風呂にでも入ってたら？」

「そつするよ。」

扉を閉めて風呂に入りに行った僕だった。

〜ここからミソラ視点で書いていきます。〜

『今回のテーマは何かしら?』

ハーブが私にたずねる。

「うん・・・久しぶりに恋の歌でも書こつかな?」

『珍しいわね。』

「たまにはいいかなって思って。」

『ポロロン。その歌はスバル君と関係あるのかしら?』

「か・・・関係ないよ!」

顔を赤くしてしまった私。

『将来の旦那さんはスバル君なのかしらね。』

「ち・・・違うよ!」

『じゃあの時の告白は何だったのかしら?』

「・・・。」

私は随分前にスバル君に告白した。

あの時の事はずっと忘れれない。

『本当は・・・どうなの？』

「本当は・・・スバル君と結婚したい。」

『アラ。立派な夢を持つてるじゃない。』

「私はスバル君が世界中の人から見つけた1人なの。」

『運命の人って事かしら？』

「うん・・・。」

『大丈夫よ。あの子はまだ気づいていないだけよ。それまで、頑張りなさい。応援してるわ。』

「ハープ・・・わかった!」

『じゃっ続きを書きましょう。』

「うん!」

くここからスバル視点に戻しますく

風呂から上がってミソラちゃんの部屋に戻った。

部屋に入ると、ミソラちゃんは作詞を行っていた。

「あがったよ」

「じゃ今度私が入ってくるね！」

「わかった！」

ミソラちゃんが出て行くと同時にウォーロックが勝手にウィザード・オンにしてでてきた。

『ひまくせえな〜何かないのか？スバル。』

ウォーロックがビーストスイングの練習をしながら僕に言う。

「そんな事言われても……。」

『早くこっちは戦いたいぐらいだぜ！』

「全く……じゃあ必殺技でも作ったら？」

『必殺技……。こっついのは何？』

「何？」

それは、ビーストスイングをクロスさせて攻撃するという技だ。
なんか、強そうだったので（まあウォーロックの攻撃はどれも強い
のだが。）
ウォーロックに技名のリクエストをした。

「クロススイングってというのはどう？」

『悪かねえな。』

「じゃそういことぞ。」

『おつっ！ありがとなスバル！』

「え・・・うん。」

突然の感謝の言葉に戸惑った僕だった。

しばらくすると、ミソラちゃんが帰ってきた。

「あがったよ〜」

「ミソラちゃん。もうなんか僕眠いんだけど・・・。」

「わかった！じゃ寝ようか。」

「うんー！」

寝室に案内される僕。

寝室に入るとものすごい大きいダブルベッド（2人一緒に寝れるぐらいの）があった。

「じゃ寝るね！」

「私も！ー！」

すると、ミソラちゃんは僕の隣に入ってきたのだ。

「あの子……ミソラちゃん？」

「これ、お母さんと私のベッドだよ」

「え……！？」

「これしかないから……。」

「まあしょうがないか。」

「じゃ、お休み。」

「うん……。」

こうして、2人は寝るのであった・・・。

ミソラの家<中編> (後書き)

どうでしたか？

ミソラが途中言った

「世界中の人から選んだ1人なんだ」
ってというのは

嵐のOne loveから、参考にしました！

僕はこの歌だいですきなんですよね〜。

皆さんのおかげでメンバーがまた一人ふえました！
まだまだ応募してますのでよろしく願いします！
では、次回をお楽しみに！

ミソラの家<後編>

僕とミソラちゃんがベッドに入ると、
ミソラちゃんは安心したのかすぐに寝てしまった。

僕は、寝ようにもなかなか寝れなかった。
天井をみて考え事をしている、つまらないばかりだった。

僕が寝れそうになったのは深夜2時。
子供が起きている時間では到底ない。

寝付けようとすると、隣の方から唸り声が聞こえた。

「うーん……。」

それはミソラちゃんだった。

ミソラちゃんの顔から汗が出ていた。

その唸り声はまるで、悪夢でも見ていたかのような……そんな感じだった。

「スバ……ル……君……！」

苦しそうに悲しそうに唸り声をあげるミノラちゃん。
さすがにヤバイと感知した僕は……。

「ミノラちゃん!」

「!」

ガバツッと起きたミノラちゃん。ハーハーと荒い息もあげていた。

「大丈夫?」

「……スバル君が……。」

「?」

「いなくなる夢……見ていた……。」

「うん。」

このあとミノラちゃんはとんでもない事を言っただった。

「夢にソロ……が出ていたの。」

「ソロ!」?

「でも、なんか違った……。ソロじゃない。」

「え!?!」

「彼はこういつてた。『貴様に教えてやる……。復讐劇のラストはロックマンを殺すことなんだよ!』って……。」

「……。」

「その後、スバル君……いや、ロックマンが太刀で……。殺されたの……。」

「!?!」

何ということだ。

僕が死ぬ……。これが最後だったなんて……。

ミソラちゃんは泣いていた。

僕が殺されるなんて言ったのだから。

「大丈夫。僕は死んだりなんかしない。ソロの考えた復讐劇は……僕が必ず止める!?!」

僕はミソラちゃんを澄んだ目で見た。

ミソラちゃんは、泣き止んだ。

「わかった。信じているから……。ね。」

「うん。」

「じゃ、お休み！」

「お休み！」

こうして、僕とミノラちゃんは寝たのだった。

ミソラの家<後編> (後書き)

どうでしたか？

短くてすみません・・・。

今日は部活で肉体労働したのでかなりきついです・・・。どうでもいいですね。

引き続き交流会募集します！

どんどん送ってください！

では・・・

See you again・・・。

カルテット（前書き）

なんか今回むちゃくちゃ長いです。。。。

カルテット

「そろそろできたんじゃないのか……。」

「ああ今98パーセントまで来た。」

「フン。ロックマンをこの手で殺せれるのは嬉しいものだ……。」

「ロックマンの死……フフフ。実におもしろい。」

「ガリレオじゃねえんだぞ……。」

「なんだ、お前でもガリレオ知っていたのか。」

「フン。その程度なら知っている。」

「……!!完成だ!!」

「やっとか。」

ソロが待ちくたびれたように言う。

「出て来い。ソロ……いや、カルテット!!」

「パワーが溢れてくる……!!」

「さあ行け。お前の手でロックマンを殺すのだ。そして、復讐劇は

完成するのだ！！」

「ああ。言われなくても殺してくるぞ。」

「わかってるならいい。行け！！！」

カルテットはアジトから出て行った。

「ここからスバル視点で書いていきます。」

僕はミソラちゃんの家から帰ってきて、家でゆっくりしていた。

「ああ、何もすることないね。」

『ああ。退屈で困るぜ……。』

「復讐劇か……。なんで僕を復讐しようとしているんだろう。」

『さあな。』

すると、ウォーロックの顔が急に険しくなった。

『スバル！何かくるぞ！！』

「え？」

『あそこだ！』

「あれは……。ソロ!?」

『行くぞ！スバル！電波変換だ！』

「うん！」

「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

僕は電波変換すると、ソロのところへ行った。

「ソロ！」

「フン。今の俺はソロではない。俺はカルテット。」

「カルテット？」

「そうだ。ボスに増強してもらった新しい俺だ。」

『スバル・・・普段のこいつとは気が全然違う！』

「カルテット。僕に何のようだ！」

「貴様を殺しに来た。」

「何だつて!？」

「ボスの復讐劇を終わらせるためにな。」

『スバル!こいつを倒したら計画が狂い、ボスは一気に駄目になる!何があつても倒すぞ!』

「うん!いくぞカルテット!!ウェーブバトル!ライド・オン!!」

戦いが始まった。

「バトルカード!ロングソード!」

ガキン!

「ふ・貴様の力などこの程度か。今度はこっちだ！カルテットソード！！」

ズバ！ズバ！ジャキン！！

「うわ〜！！」

僕は4回も切られてしまい、かなりの重傷を負った。

「剣が4つ！？」

「そうだ。カルテットは4重奏。4つの作業を同時に行えるのだ。」

「だったらバトルカード！ワイドウェーブ！」

発射される水がカルテットにむけて発射される。

「カルテットソード！！」

4つの剣で、水を分裂させる。

「そんな・・・!?!」

「いくぞ!カルテットキャノン!」

4つのキャノン砲が僕に向かって飛んでくる。

ドカンドンドッカーン!!

「うわ〜!」

避けられず4つの弾をもろに喰らってしまった。

「スバル!おい!スバル!」

「体が・・・動かない・・・!」

「スバル!」

僕の上にカルテットが近づいてくる。

「死ね!カルテットソード!」

「いまだ！バトルカード！カワリミ！！」

ポワン！！

「何！？」

僕はカワリミで逃げた。

「ここで、バトルカード！ソード・ワイドソード・ロングソード！
ギヤラクシーアドバンス！ジャイアントアックス！！」

ズバツ！！

「ぐはっ！！！！」

カルテットは倒れた。

「バトルカード！クロス・スイング！！」

『俺様の出番だ！！食らえ！！！！』

ズバツズバツ！！

「がはっ・・・！」

カルテットは気を失って倒れた。
そして、カルテットからソロにへと戻った。

「カルテット……。本当に死ぬかと思った……。」

『へっ！簡単に死ぬかよ！！』

「そうだね。」

『これで、復讐劇は終わりだ！あとは、ボスを叩き潰すだけだ！！』

「うん！！！」

こうして僕は散々切りつけられた腹を触りながら、部屋に戻った。

「フフ……。これで終わりじゃないさ。カルテットは死ぬことはわかってるのさ……。」

『ロックマン……。僕たちの手で殺させてもらおうよ……。』

復讐劇は……。終わりじゃなかったのだ……。

カルテット（後書き）

どうでしたか？

これで第4話が終了しました！

次はボスVSロックマンになります！

果たして、スバルは殺されてしまうのか、ボスを倒すのか……

お楽しみに！！

ちなみに、この小説はボスを倒した後、新しいお話が始まりますよ！
では

See you again……。

カイパーゴッドベルト

第5話

「黒船がやってきて、大老井伊直弼は……。」

僕は悩んでいた。

隣のミノラちゃんはもっと悩んでいた。

悩みの発端は昨日の夜のことだった。

「昨日の夜」

『こつきたら、犯人は間違いなくこつするだろう……。』

ウォーロックは大好きな刑事ドラマを見ていた。

『ウォーロック！私も見たいテレビがあるの！！』

『何言っでやがる！ここは俺たちの家だぞ！！』

俺たちって……。
居候のお方が何をおっしゃいますか。

『こつなつたら力づくで取ってやるわ……!!』

『かかってきやがれ!!』

2人は喧嘩を始め、その近くにあったテレビはノイズを受けつつあった。

「「ちよつと2人ともやめなよ……。」

ミソラちゃんと僕は2人を制止したが、耳を傾けすらくれなかった。すると……。

ブツッ。

テレビが壊れました。

「ちよつとウォーロックなにやってるの!?!」

『あ?あ?!!壊れてやがる!!!』

「ハープ!！」

『ごめんなさい……。』

「母さん明日帰ってくる……。ごうじょう。」

あかねは友達と旅行中だった。

学校がおわって帰ってきた僕とミソラちゃん。
早速、テレビについて、話し合いが行われた。

「ごうじょうか?」

「スバル君ってジョーカーPGMってまだある?」

「あるよ。」

「スバル君がロックマンになって、ノイズの原因を無くせば良いんじゃない?」

「なるほど!じゃ行くよ!!--ウォーロック、準備はいい?」

『おう!』

「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

僕は電波変換をした。

「じゃ、取り除いてくるね！」

「うん！」

僕はノイズの中に入った。

ノイズの中につくと、1人の男が立っていた。

「誰だ！？」

「初めまして。ロックマン。」

『久しぶりだ……。ウォーロックよ……。』

『お前は……。ケフェウスの父親、カイパーベルト！！』

「私の名はカイパーゴッドベルト。通称、全知全能の神だ。」

「全知全能！？」

「僕が復讐劇を考えたのさ。君を殺すためにね。」

「僕が君に何をしたらって言うんだ!！」

「……復讐。」

カイパーゴッドベルトは冷酷な目をして、言い放った。
まるで……魔王のような。

「復讐……?」

「そうだ。君の父親は、僕を虐めていた。そう。殺されそうなこと
だって何度かあった……。」

「え……??」

「そうだ。君の父親は行方不明になった。だから、この復讐を成し
遂げるには星河スバル……いや、ロツクマンを殺さなくてはなら
ないのだ。」

「嘘だ……僕の父さんはそんな事なんかしない!!僕の父さんの
名前を使っていただけだ!」

「黙れ!お前なんかには何がわかるというのだ!!僕の壊れた人生に
口出しなんかしないでくれ!!」

「君だって……愛してくれる人はいるんでしょ……?」

「……愛なんて……必要ない!!」

カイパーゴッドベルトはウエアブアウトしていった。
すると同時にノイズはなくなった。
僕もウエアブアウトをした。

『愛か……。』

ウォーロックは独り言のよじにうぶやいた。

カイパーゴッドベルト（後書き）

僕のどうでもいい話1

僕の学校は頭髪服装検査があつて

先生に髪を見てもらうときにある先生が

「綺麗だね〜」って言われました。（笑）

ウイングスカイ

『愛……か……』

「どうしたの？ウォーロック。」

ウェブアウトしてからずっとウォーロックは言っていた。

『俺の育ちFM星は、愛なんて物がなかったなって思ってたんだ。』

「私は嬉しいよ。スバル君が愛してくれて！」

ミソラちゃんが2通りの解釈ができる言葉を発した。
2通りは読者の方が考えてみてください。（ペコリ）

「あの人がボスなんだね……。」

『ああ。どうやら、復讐劇はあそこでおわりじゃなかったみたいだな。』

「復讐劇……。僕が止めてやる！」

「スバル君……。私も戦うわ。」

「ミソラちゃん……。」

「あの^{ボス}人を改心させるためにも私も頑張りたい!!」

「ありがとう・・・!」

ミソラちゃんの瞳から強い意思が感じれた。

翌日

「よし。学校行くか・・・。」

『おっしゃ!なんか今日俺早く学校行きたいんだよな。』

「そっ?」

『そうと決まれば電波変換だ!!行くぞ!スバル!!』

「え・・・???う・・・うん!」

「トランスコード!シューティングスターロックマン!!」

僕は電波変換して学校に行った。

すぐに学校へつくと、教室に入った。

委員長たちと話していると、チャイムが鳴った。
生徒たちが席に着くと、育田先生が入ってきた。

HRが終わると、先生はすぐに教室に戻ってきた。

「よし、1時間目だ！社会の用意をしろ。」

社会が始まると、僕は外を眺めていた。

(僕に・・・愛なんて・・・必要ない!!)

僕はあの時の言葉が残っていた。

愛・・・か・・・。

かわいそうな人もいるんだなと思った・・・。
そのとき、教室からある声があった。

「星河。」

「はいっ!?!」

今気づいたので、立ってしまった。

「日本とロシアが結んだ、千島列島と樺太を交換する、条約を何と
いうんだ？」

「え．．．樺太・千島交換条約？」

「正解！そして、小笠原半島を日本の．．．．．」

『クククク．．．！お前、テンぱってたな．．．』

ウォーロックが笑いながら言う。

授業をこなしていくと、放課後になった。
僕は家に帰ると、暇だったので昼寝をした。

『おい、スバル！寝るな〜！』

「ZZZ．．．」

『つたく．．．ん？メールか？』

中身

「暁だ。君は今、復讐劇と戦っているようだな。そんなスバルに、
これをやる。ウィング・スカイだ。これでピンチのとき、助かる．．
．だが、下手に力を使いすぎると、スバルの身が滅びてしまうかも
しれない．．．。なあに、大丈夫さ。お前なら使えるよ。頑張れ。」

『長ったらしいな……。後で読むか……。さて、俺も寝るか……。』

ウォーロックと僕は眠りについたのだった。

ウィングスカイ（後書き）

僕のどうでもいい話2

今日怖い数学の先生が、僕を褒めてくれました。

一応、数学検定3級受けようと思いましたからね（笑）

ミソラのライフ2 (前書き)

今回はとてつもなく短いですが
きりが良いので・・・。

読者の皆様。

誠に申し訳ありません！

ミソラのライフ2

「ただいま。」

ミソラの声がこだまする。

案の定スバルとウォーロックはソファで寝ている為反応は無い。

「スバル君。」

「ん。。。ミソラちゃん？」

「おはよう！なんで昼寝してたの？」

「ん？さあ…？？」

「そっか」

「あれ？メールが来ている…。」

「誰から？」

「暁さんからだ。ウイングブレード？？」

『ほう！武器か？』

「アビリディかな…？付けてみよう。」

「何か変わった？」

「いや、全然。」

「とりあえずスバル君の部屋に行こう！」

「うん。」

僕とミソラちゃんは部屋に戻った。

「ねえ、スバル君。」

「何？」

「今度さ、私ライブをスピカモールでやるんだけど、来ない？」

「うん！行きたい！！」

「じゃ、明日10時にイベント会場に来てね！」

「わかった！！」

「あとさ、スバル君…。」

「どうしたの？」

「今日夕食作っていい？」

『アラ、ミソラったらうまく出来るのかしら？』

「できるよ！―！作ってもいい？」

「いいよ！―」

『ミソラが作るのか！意外だな。』

『アンタが言える台詞じゃないでしょうが。』

『何だと！―！』

ウォーロックとハーブはまた喧嘩を始めた。

「じゃ、作ってくるね！―」

そういって、ミソラちゃんは下に降りていった。

「はあ〜。」

。そういって僕は2人の喧嘩を黙って大仏のように見守るのだった。

ミソラのライブ2（後書き）

どうでしたか？

今回はロックマンエグゼのあの歌を

ミソラが歌います！

結構皆さん、知ってるのではないのでしょうか？

では、次回をお楽しみに・・・。

ミソラのライフ2 <前編> (前書き)

今回は疲れました・・・。

ミソラのライブ2＜前編＞

夜。

僕は宿題をしていると、下からミソラちゃんの声が聞こえた。

「スバル君、ご飯だよー！」

「わかったー！」

確認の合図をおくって下に行くと、僕は驚いた。

「凄い！これミソラちゃんが作ったの！？」

「うんー！」

『ミソラの得意料理だったからかしら？』

「まあね。」

『ほう！なんか、食べないけど美味そうな気はするな。』

「じゃ、スバル君食べよっかー！」

「うんー！」

僕とミソラちゃんは食事を食べ終わると、部屋に戻り、お風呂に入
って、寝たのだった。

翌日。

僕は早起きした。

準備を済ませ、スピカモールに行く。

すると、ミソラちゃんがステージに立っていた。

「皆〜！！今日も来てくれてありがとう〜！！」

「「「わあ〜！！」「」」

「では、1曲目はBe some whereです〜！！」

皆が静かになる。

注意

これは、フルで歌いますが、とてつもなく長くなると思いますが、
2番のみ省略します。1番が終わったあとの英語はあってるか自信
がありませんが、間違っていたら指摘してください。

「Another day tomorrow

闇の中で眠っているだけで　こんなに無防備に傷ついたり迷う度
Answer must be somewhere
強く強く言い聞かせるように
君の名前呼び続ける」

僕はミソラちゃんの歌にしてはシリアスな歌だと思った。

「身動きできないよう　細いピアノ線が
世界の隅々まで張り巡らされてる
それは冷たく肌に食い込んだ途端に
どこかで仕掛けられたトラップを動かす」

「手を伸ばしたら　探してた明日に届きそうなの
指先には触れている」

ここからサビに入るなと思った。

「Another day tomorrow
昨日へは決して進めないから
瞳を閉じたまま走り出せば　そこは未来
Another be somewhere
私のこと誰よりも知ってる
私だから信じられる」

『ケツ！いい歌じゃねえか！！』

ウォーロックが珍しく人を褒めた。

「まだ誰も行った事の無い
道に地図は無いから
不安に負けそうになる」

「Walk my way long the winding
疲れ果てて倒れてしまっ日も
これから行く先に光など見えなくっても
Answer must be somewhere
私のこと誰よりも知ってる
私だから信じられる」

僕はミソラちゃんの歌の中でも最高傑作ではないかと思った。

「ありがとう！！じゃ、次2曲目行くよ！！」

そして、2曲目に突入するのだった。

ミソラのライブ2<前編>(後書き)

どうでしたか？

皆さんがBe some whereが好きだと

仰ってたので、今回はこれにしました！

次回は僕の好きな歌を載せたいと思います！！

ミソラのライブ2<後編>

「じゃ2曲目に行くよ〜!!2曲目は勝利の歌です!」

そう言ってミソラちゃんは、マイクを握った。

「ole!(オーレ!) ole!(オーレ!)
さあ立ち上がれ

勝利の花を胸にかざして」

「誰にも真似はさせないさ
僕らだけのこのスタイルで
この歌が胸に届くなら
勝利はもう手の中にある
あきらめる事は決してない
この場所に僕らいる限り
ただ戦うためだけに僕ら
今こぶし空へ突き上げた」

「太陽が僕らを照らし
この大地で輝けるように歌う」

「ole!(オーレ!) ole!(オーレ!)
さあ立ち上がれ

勝利の花を胸にかざして

ole! ole!

さあ舞い上がれ

この大地で輝けるように」

「この歌が聞こえてますか

勝利の波が音立て近づく」

ここからミソラちゃんのギターの伴奏が流れた。

僕は最前列から、ミソラちゃんを見ていたのだが

よく見ると、ミソラちゃんの額から汗が出ていることに気づいた。

この伴奏はチョーキング・バッキングといった、

ギターではかなり難易度の高いテクニクを使っていた。

僕は相当練習したんだろうな〜って思った。

「ole! ole!

私叫ぶんだ

勝利の風に歌をのせれば

ole! ole!

私届きだす

僕らの歌が戦士の胸に

ole! ole!

さあ立ち上がれ

勝利の花を胸にかざして

ole! ole!

さあ舞い上がれ

この大地が揺れ動くように」

こうして、ミソラちゃんのライブが終わった。
僕は終わって家に帰った。

家に帰ってご飯を食べ終わり、部屋でゆっくりしていると、
ミソラちゃんが帰ってきた。

「スバル君！」

「お帰り〜!!」

「今日のライブどうだった？」

「なんか、相当練習したんだろうなって思ったよ！」

「あ・・・ありがとう！」

「あれ？ミソラちゃん顔赤いよ？」

「え・・・？そ・・・そう？ハハハ・・・。」

ミソラちゃんは、顔を赤くしてずっと笑っていた。

『なあ、なんでミソラ顔赤いんだ？』

『アンタには一生わからないわよ。』

『なんだと!!』

また、2体の喧嘩が始まった。

「ミソラちゃん、明日バスケットボールの試合があるんだけどくる？」

「え？私も出るの？」

「そっだよ!!」

「わかった！明日仕事無いから、学校行くよ!!」

「じゃ、お風呂に入って寝ようか？」

「うん!!」

こうして、2人は風呂に入って寝たのだった……。

ミソラのライブ2<後編>(後書き)

どうでしたか？次回はバスケットボールの試合をやって行きます！

ゲストがなんと3人も出てきちゃいますよ〜！！

僕も出演しちゃいます〜！！

次回を楽しみに待っていてくださいね！

大会開始（前書き）

今回はゲストが登場です！

大会開始

「おはようー!」

僕は大きな声で委員長たちに挨拶をした。

「あら、星河君。今日の試合は勝つわよー!」

「どごとやるの?」

「鳳凰小とやるらしいぞ。」

デカイ体を取り柄のゴンタが言った。

「僕は背が小さいので応援してますー!」

「じゃ、席について待ってようか。」

僕は席に着くと、ウォーロックが話しかけてきた。

『おい、今日ミンラはどうしたんだ?』

「ん?今日ちょっと遅れてくるって。」

『そうか。わかった。ところで、俺が力貸してやるうか?』

「どつやって?」

『そりゃ電波変換してさ。』

「駄目だよ!反則になっちゃう!!!」

『ちえゝわかったよ。』

ウォーロックと話していると、体育館に移動の合図が出た。僕は体育館に行くと、見覚えのある顔があった。

「おっ!よう!スバル!!」

「勇輝先生!!何でここに!?!」

「今日審判やることになったんだ。で、この方もね。」

「この人は?」

「よっ!たかひろだ!よろしく、スバル!」

「よろしくお願いします!」

「よし!ちなみに、この人たちはね……。」

「初めまして！Maiです！よろしくね、スバル君！」

「初めまして、スバル君！僕はストリーム！よろしく！」

「初めまして！！！」

スバルは挨拶がすべて終わると、勇輝先生が話を出してきた。

「1回戦は、俺とMai先生でやるから。たかひろさんと、ストリーム先生はあっちのコートだから。」

「わかりました！」

「じゃ、また後で！」

勇輝先生たちと別れると、僕は更衣室にいつて、ユニホームに着替えた。

着替えが済むと、僕はコートに行った。

僕は、レギュラーで出場になって、最初から出るようになった。

「それでは、鳳凰小とコダマ小の試合を始めます！礼！」

「」「」よろしくお願いします！！」「」「」

「」では、配置について。」

勇輝先生は僕たちを上手く仕切る。

「試合開始！」

勇輝先生がジャンプボールの手を放した。

そして、試合が始まった……。

大会開始（後書き）

どうでしたか？

ゲストはたかひろさんと、Mai先生とストリーム先生です！

今回は3人＋僕がめっちゃ頑張りますので、よろしくお願ひします！
では、次回をお楽しみに！

1回戦<1Q>(前書き)

今回は専門用語が多かったので、補足をおきました。

今回3人のゲストを登場させたことに「ここは公共の場だ!」という苦情が来ましたので、このバスケが終わったらトークショーの時は以外は3人と僕は登場させないことにしました。

皆さんにご迷惑をおかけしたことを大変申し訳なく思っております。本当に申し訳ありませんでした。

1回戦<1Q>

試合が始まった。

ゴンタが弾いたボールをつかさ君がとると、そのままレイアップ（注1）を決めた。

コダマ小に2点が刻まれ、コダマ小の応援席から歓声がおきる。

鳳凰小がゴール下からパスをだして、ゲームが再開する。
ところが、審判が笛を鳴らす。

「バイオレーション！」（注2）

Mai先生が、違反の声を上げる。
再びコダマ小の応援席から、歓声が起きる。

コダマ小がスローインをして、僕はボールスバルを取る。
敵が目の前に来たので、委員長にパスを出す。
これでは、始まらないので僕は敵をファイトオーバー（注3）して、委員長から、パスをもらう。

ところが…。

「トラベリング！」

勇輝先生が違反の合図を出す。
渋々ボールを渡した僕。

「オイオイ地球のヒーローがそんなミスしてどうするんだよ」

ゴンタが冷やかす。

それとこれは関係ないだろ！と思ったが口にはしなかった。

鳳凰小がボールを持つと、僕たちは、ゾーンに着いた。（注4）
ところがお構いなしに入ってくる。

そして、シュートを入れられた。

「ナイシュ〜！！」

鳳凰小の応援席から、歓声上がる。

ゴンタがゴール下からボールを出す。
それを僕が取ると、一気にファストブ레이크（注5）を決める。

僕はスリーポイントライン（注6）まで進み、レイアップを決めに行った。

ところが、相手はガードしているときに腕を出してきて僕はバランスを崩し倒れてしまった。

「ファウル！ブロッキング！（注7）2スロー！（注8）」

皆がフリースローの指定の位置について、僕はフリースローの準備をしていた。

全員が位置につくと、勇輝先生は僕にボールを渡した。

静寂のなか、シュートを打つ。

綺麗なアーチを描くようにボールは流れていった。

そして、ボールはリングを抜けた。

「ナイシュ〜！！」

コダマ小の方から歓声上がる。

再び僕はボールをもらって、シュートをうった。

今度は弾道が低く入らなかった。

そして、リバウンド（注9）争いが勃発する。

やっぱり、体が大きいのがゴンタが奪い取ってシュートを打つ。

ボードに当たってボールはリングの中に入った。

「ナイシュ〜!!!」

再び歓声が起こる。

こんな感じで試合が続いていると、

オフィシャル（注10）から、1クォーター終了の合図が出た。

Mai先生が笛を鳴らして、僕たちはベンチに戻っていった。

現在コダマ小は15点、鳳凰小は8点。

現時点では僕たちが優勢だと僕は見た。

キーワード

注1「レイアップ」 ボールを持った状態で2歩走って、ゴールにシュートするというバスケでは基本中の基本。

注2「バイオレーション」 ファウルといった、違反行為以外の違反行為。

注3「ファイトオーバー」 スクリーン（進行を妨げる壁）を抜くこと。

注4「ゾーン」 守備の形態の代表的な守り方。

注5「ファストブレイク」 速攻。

注6「スリーポイントライン」 このエリアから外でシュートをうつて入れたら、3点。

注7「ブロックング」 ボールを持つてるプレイヤーの進行を妨げること。

注8「2スロー」 フリースローを2回打てる。

注9「リバウンド」 ボールを取ること。

注10「オフィシャル」 ゲームの進行を管理する人。

1回戦<1Q>(後書き)

どうでしたか？

最近、小説の書き方を勉強しております。

まだまだ未熟者ですが

これからも精進していきたいと思いますので、皆さん温かい目で見守ってください。

よろしく願います！

では、次回もお楽しみに！

1 回戦 < 2 Q >

2分間の休憩のなか、全員は集まって作戦会議を開いていた。作戦会議が終わると、僕はキザマロとしゃべっていた。

「活躍してましたよ、スバル君」

「いや、全然大したことしてないよ」

別に謙遜しているわけではないが、つい自分の癖でやってしまった。

「あの、5番・・・怪しいです」

「え？どういこと？」

「彼がポイントゲッター（注1）だと思つのです」

「ふーん」

よく見分けがついたなと思った。

僕はポカリスエットを飲んでると、試合再開の合図が出た。相手のボールから、始まる。

相手はスローインをすると、一斉に攻撃を仕掛けてきた。

24秒（注2）というわずかな時間の中僕たちは、相手のシュートを防いだ。そして…。

「オーバータイム！」

Mai先生が違反の合図を送った。

コダマ小のボールから再開し、パスをつないで前へ前へと進んでいく。

僕はボールをもらった後、昨日必死に練習したレッグスルー（注3）を使って、シュートを打つ。

「ナイシュ〜!!!」

観客席から歓声上がる。一斉に自陣に戻り、守備をする。ところが、戻ってる最中、勇輝先生が笛を吹く。

「タイムアウト！（注4）」

そして、僕らはベンチに戻った。

「ここからはミソラ視点です。」

「ミソラちゃんは、最近好きな子とかできたの？」

「気になってる人はいるんですけど…。」

私は今、ラジオの収録をしている。

トークができるだけ、私は楽しいなと思ってる。

収録が終わり、スタジオを出る。

「ハープ！」

『わかってるわ！』

「トランスコード！ハープノート！！！」

私はハープノートに電波変換して、ウェーブロードを進んでいく。
進んでいるとき、私はハープに質問をした。

「今何時？」

「9時27分よ」

「次のサイン会何時まで？」

「10時40分よ。」

「その後は？」

「それで今日の仕事はおしまいよ！」

「わかった」

ウェーブロードを進んでいくと、目的地のCDショップが見えた。

すぐさま、ウェーブアウトをして地上に下りる。

そして、サイン会で全員にサインを書く。

サイン会が終わり、また、電波変換する。

「いそがなきゃー!!」

私は、急いでコダマ小に行く。

コダマ小の近くに来ると、もう歓声が響いていた。

目的地についてウェーブアウトをすると、すぐ更衣室にいった。ユニホームに着替えた。

会場に向かうと、もう2Qが終わって、休憩していたようだ。

「ミソラちゃん！」

「スバル君！」

「今、僕たちが勝ってるよ！」

「ほんとう！？」

「早く育田先生の所に行こう！」

「うん！」

私はスバル君と一緒にチームのベンチに行った。

注1 「ポイントゲッター」 ポイントを稼ぐ人。

注2 「24秒」 バスケットでは24秒以内にシュートを打たなければならぬのだ。

注3 「レッグスルー」 ボールを又（また）に潜らせて、相手を抜く1対1の応用技。

注4 「タイムアウト」 1分間の作戦会議。

1 回戦 < 2 Q > (後書き)

どうでしたか？

最近、よく学校で

「お前、メールとミソラどっちが好き？」
ってよく聞かれます。

皆さんはどっちですか？

僕はちなみにミソラ派です(笑)

1回戦<決着>

僕とミソラちゃんスバルはベンチに戻って育田先生の話聞いた。

「今結構押しているから、この調子で行こう！」

「」「はい!!」「」

皆は大きい声で相槌を打った。

「それから、星河」

「はい？」

いきなり先生に言われたのでビックリしてしまった。

「ちょっと星河は疲れているから響と代わって少し休んでおけ」

「はい」

そんなわけでベンチに下がった僕。

試合が再開すると、1人メンバーチェンジをしていることに気がつく。

「あの人誰？」

僕はキザマロに聞いてみた。

「例のポイントゲッターですよ。」

「えー!？」

ポイントゲッターが登場したのだ。

ポイントゲッターが出てきて、一気に形勢は不利になってしまった。

4Qになってあと2分で2点差まで詰められる。

そして、またポイントゲッターがシュートをする。

綺麗に円を描きボールはリングに入った。

「ナイシュ〜!」

鳳凰小から歓声があがり、同点になってしまう。

コダマ小のボールから始まり、パスをだすと、横からいきなりポイントゲッターが現れて、すぐにボールをインターセプト(注1)し

て、レイアップを決める。

コダマ小はあと20秒を目の前に2点差で敗北の危機が迫ってきた。すると、育田先生が僕に声をかけた。

「星河」

「はい？」

「メンバーチェンジ（注2）だ」

「はい」

僕はゴンタとメンバーチェンジをした。

ミソラちゃんがツカサ君にパスを出して、ツカサ君が僕にパスを出す。

あと3秒。

僕はもう駄目だと思いつつスリーポイントシュートを打った。ボールを打ってから試合終了の合図がなった。

（この場合シュートが入れば点数は認められる。）

誰もが鳳凰小の勝ちだと思った。

その時だった。

バスッ！！

ボールがリングに入った。

「試合終了了！！！」

勇輝先生が終了の合図を出した。

そして、コダマ小の観客席からものすごい歓声があふれていたのだ
った…。

僕は…入れたのだろうか？

「やったね！スバル君！！」

入れたのだ。

僕のシュートで奇跡的に勝ったのだ。

「うおお！！やったぜスバル！！」

ゴンタも泣きそうな表情になっている。

そして、僕は歓声を浴びながら、更衣室に入っていったのだった…。

1 回戦<決着> (後書き)

どうでしたか？

僕最近数学が得意になってきました (笑)

でも、理科は相変わらず苦手です。 (特に物理)

社会は大の得意なんですけどね (笑)

感想待ってます!!

注1 インターセプト ボールを奪いとること。

注2 メンバーチェンジ 選手交代。

s w e a r

更衣室で着替えが済んだ僕。^{スバル}

更衣室を出ると、ミソラちゃんがいつもの服装（知っている人はわかっていると思うが、ピンクのフード付きのパーカーに黄緑のショートパンツ）で待っていた。

「お疲れ！スバル君！」

「うん！」

「カッコ良かったよスバル君！」

「そんな事ないよ。」

顔を赤くしながら謙遜する僕。

どうしても顔が赤くなって、困るのが僕の正直な気持ちだった。

「帰りのHRの時に育田先生がとんでもない事を言ったんだよ。」

「何を？」

僕はこれを聞いた時本当にビックリした。

「棄権するって。」

「何で!?!」

「何か…ある事情で…。」

「ふーん。」

案外驚かなかったミソラちゃん。

もっと驚いてよ!

って言いたかったが口にはしなかった。

そうこう話しているうちに

家に着いた。

僕とミソラちゃんは、部屋に行ってしゃべっていた。

しゃべっていると、1本の電話が鳴った。

呼び出しをしたが相手の顔は映らなかった。

「もしもし?」

『ロックマンか…。』

「君は……カイパーゴッドベルト!?!」

いきなりの電話に驚いた僕。

『復讐劇がもうすぐ終わる。だが、簡単に復讐劇が終わっては面白くない。』

「どつという意味だ!！」

つい声を張り上げてしまった僕。

それを見ていたミソラちゃんまでもがビックリしていた。

『もし、君を殺し復讐劇が完成したら、もっと面白い復讐劇…いや、殺人劇をやるうと思っっているのだよ。』

「殺人劇・・・?」

『キズナ腐敗劇と言ったほうが良いか。全ての人間にキズナなどと言った腐りきった物を壊すのさ。』

『オイ! テメエさつきから聞いてりゃアホくさいことばっか言いやがって! ! さつさと復讐劇を終わらせやがれ! !』

ウォーロックが怒り心頭になって怒鳴った。

前のウォーロックならこんなこと言わなかっただろうなって思った。

『そう、怒るな。だが、ひとつ言っておく。僕は君を……………この手

で殺してみせる!!!」

そう言って、電話は切れた。

「スバル君……。私も戦うわ。人を守るために！」

「ミソラちゃん……。??」

「私だって皆を不幸にさせたくない!だから……。私も戦う!」

透き通った目を僕に向ける。

「ありがとう!」

僕は守る物が1つから2つになったと思った。

1つは、地球の皆。

もうひとつは……。そう。ミソラちゃんだ。

ミソラちゃんだけは何かあっても守ってみせる!

と僕は心の中で誓ったのだった。

s w e a r (後書き)

どうでしたか？

なんか今回は会話が多かったですね・・・。

さあ、そろそろクライマックスに近づいてきましたよ！

あ、100話までは持たせたいので…。

100話まではやる予定です。

これからも頑張ります！

感想待ってます！

おさらい

どうも！

勇輝です！

今回は、ちよつとここまでの話の整理や、キャラクターの紹介などをいまさらですがお浚いしたいと思います。

1：天才が考えた美しすぎる復讐劇

壱：復讐の果て

えー皆さんは知っているとと思いますが、

この復讐劇はカイパーゴッドベルトが元タスバルの父（大吾）のために作った、物です。

ただし、ゲームをやっている方はご存知だと思いますが大吾が行方不明になってしまい、

カイパーは復讐の矛先をなくしてしまうのです。

しかし、カイパーはスバルに復讐の矛先を向けたのです。

理由は息子だから。

で、いろいろな復讐をしていきました。

皆さんはもう復讐劇は終わると思っっている方が大半いらつしゃると思います

でもまだまだ復讐劇は終わりません。

復讐は、あの人を殺し、スバルを殺す事ができて完成するのです。

しかし、読んでいる方はわかると思いますが、文章にこんなことが書いてありました。

「僕は、大吾に毎日虐められて、苛苛して、時には死んでやろうな

んて思っただんだ！」

これは、カイパーとロックマンが第5話が始まって初めて対峙したときに言った、

カイパーの台詞です。

この証言が本当か嘘かはわかりません。

でも、真実は……必ずあるはずです。

式：ソロとカイパーの関係

皆さん、不思議に思っただ方がいらっしゃる方がいたと思います。

それは

「何故、ソロはカイパーに協力しているのか」と言うことです。

理由は2つあります。

1つは、ロックマンとの決着をつけるため。

実際ソロはロックマンに敗れ去ってしまいました。

でも、本当に彼が死んだとは言いきれません。

なぜなら、戦った時はソロではなくカルテットだったからです。

もうひとつは、ムーにあります。

なんと、カイパーベルト（これは元々ケフェウスの父）を

操ってる人はムーに関係のある、つまりムーの血が繋がっているのです。

このことからソロは彼は味方だと判断したわけです。

参：復讐のラスト

もうみなさんわかっていると思いますが

この復讐劇のラストはロックマンを殺す事です。

しかし、これは「もし出来たら」という前提です。

本当の復讐劇のラストは

「ロックマンを殺す」ということです。

同じじゃないか！

って思うかもしれませんが。

「もし出来たら」のほうは人生を絶たせる。

つまり、この世から消すと言う意味です。

本当の意味は……………。

最終話付近で明らかになると思います。

2：キャラクター紹介

いまさらですがちょっと軽くやっています。

星河 スバル（星河 昴）

年齢 11歳

身長 145cm

体重 39キロ

誕生日 6月9日

趣味 夜空観察・読書

好きな音楽 ミソラの「絆 ウェーブ」

尊敬する人 父さん

名前の由来 宇宙のような限りないやさしさ、強さを持って欲しいから。

好きな教科 理科

嫌いな教科 社会

ライバル ブライ

F M星人ウオーロックと融合しロックマンに変身できる主人公。

もともと、父親を亡くして（正しくは行方不明になって）学校に行けない不登校児となる。

だが、委員長の説得により、学校にこれるようになる。

前は「アンドロメダ」「ラ・ムー」の脅威から地球を救った。

幾多の困難を乗り越え今となっては立派な子になった。

響 ミソラ

年齢 11歳

身長 143cm

体重 33キロ

誕生日 8月2日

趣味 歌を歌うこと

好きな音楽 基本みんな好き

尊敬する人 スバル

名前の由来 ???

好きな教科 国語

嫌いな教科 算数

ライバル スズカ

FM星人ハープと融合しハープノートとなる
国民的アイドル。通称「戦うアーティスト」。
スバルと同じく母親・父親を亡くし、スバルを唯一の肉親と
思っている。
今はスバルと同じく戦ったり笑いあったりする仲間であり、
恋人（？）である。

重要な登場人物はこのぐらいです。

最後に……………。

僕は書いてて時々ふと思うのです。

「皆は僕の作品を喜んでもらえているのかな？」
と、思います。

最近酷評も来ますが、でも書いてる人はそれをばねにして頑張ら
なくてはいけないし、
いい評価が来たら

「やっぱり僕の作品を嬉しく読んでくれるんだ！」
って思うことがあります。

あと、昔流星のゲームの中にこんな感じの台詞がありました。

「人はキズナの力でどこまでも強くなるんだ!!」

僕はこの台詞を思い出すたび
胸が熱くなるのを覚えます。

あと、こんな台詞もありました。

「友達を失うなら、この身が張り裂けてもいい！！死んでもみんなを守らなくちゃいけないんだ！！！！」

僕は何が言いたいのかというと、

この流星シリーズは人として大事なこと・友達の大切さなど大人になる上で大事なことを教えてくれる……。

そんな気が僕にはします。

ながながと話しましたが、あと30話ほどお付き合いよろしくお願
いします！！

では、次回をお楽しみに！

おさらい2

前回のおさらいのつづきをちょっととしていきたいと思えます。

3 地球の危機

流星シリーズをやっている人はご存知だろうか
万が一知らない人のために軽く説明をしておこう。

壱：アンドロメダ

アンドロメダとは、簡単に言えば

「地球抹殺兵器」というところだろう。

アンドロメダはウォーロックが流星1で持っていた
「アンドロメダの鍵」を使うことにより復活する。

なぜ、ウォーロックが持っていたのかというと

彼はもともとFM星人であり大吾（スバルの父親）の乗っていた宇宙ステーションを襲撃した

ボスであった。

ところがウォーロックは大吾と出会い人間のいいところに気づく。
だが、襲撃したせいで宇宙ステーションが崩壊してしまう。

そこで、大吾が

「ここにいるみんなを助けてやってくれ」

とウォーロックに頼み込む。

ウォーロックは大吾の頼みを承諾し

大吾以下乗組員を電波人間にする。

それから、ウォーロックは人間を生かした罪としてみんなから犯罪人みたいな後ろめたい目で

見られる。

ウォーロックはそれから、FM星を裏切り、「アンドロメダの鍵」をうばっていった。

そこで、地球に逃げ込む。

それがスバルとの出会いである。

スバルはウォーロックと電波変換して、FM星人と戦うことに。

最後にはFM王ケフェウスとロックマンと対峙する。

それがアンドロメダVSロックマンである。

スバルは地球の命運を背負って戦い、見事勝利したのだ。

式：ラ・ムー

アンドロメダとの戦いから、3ヶ月。

当時の携帯端末がトランサーからスターキャリアにかわって電波環境はまた飛躍的な進化を遂げた。

スバルは友達と映画を見に行くが

「ファントム・ブラック」に襲われたり、

ホテルに旅行に行くも

「イエティ・ブリザード」など

戦いの幕がまた開く。

相手は悪の科学者「ドクターオリヒメ」。

彼女はムーという古代文明を利用し、世界征服をたくらむ。だが、ロックマンの活躍により彼女の計画はしっばいする。

ロックマンは2度も世界を救った。

2 作者の言葉

僕は今までいろいろなゲームをしてきました。僕が最初にやったゲームはロクヨンのマリオでした。当時の僕は3歳。

幼い年齢でゲームという面白さに引かれていきました。それから、その数およそ100ものゲームに触れていきました。ですがある時危機が来ます。

それは「受験」です。

僕は中学受験をやり、ゲームができず苦痛なストレスの溜まる毎日を送っていました。

そして、某中学に入って、今は楽しい生活を送っています。

話を戻します。

いままで100ものゲームにあってきましたが一つの共通点がありました。

それは

「エンディングが感動しない」ということです。

そして、僕は流星のロックマンに出会いました。

1〜3までやっていきました。

1・2はちよつと感動しました。

3は本当に感動しました。

今でも覚えています。

「生まれてきて感謝すること」

これは今思い出すだけでも感動して涙が出てくるほどです。

僕にとって流星は

「人生を変えたゲーム」
です。

皆さん、流星は本当にすばらしいことを教えてくれます。

持ってる方はもう一度振り返って、見てみるのはいかがでしょうか。
・???

勇輝より

おさらい2 (後書き)

おさらいはこれで終了です。

次回から本編に入っていきます。

僕は、これからも少しずつ成長していきますので温かい目で見守ってください。

これからもよろしく願います！

第6話 FM星(前書き)

今回から本編に入っていきます！

第6話 FM星

第6話

翌日。

うるさい声が僕の横から聞こえる。

『オイスバル〜遊びに行こうぜ〜』

起きたいがなかなか起きれない。

理由は気分が悪いからだ。

言い換えればウォーロックがうるさいからだ。

「わかったよ……」

渋々承諾し起床すると、ミソラちゃんと母さんの姿は見えなかった。もう、出かけたのだらうと思った。

「また、僕が朝食を作るのか……」

僕は目玉焼きを作り始めた。

すると、ウォーロックが注文をしてきた。

『スバル、俺も腹減ってるんだから俺にも食わせてくれよ。』

ハンターV.Gになってからウィザードも食事が可能になった。

ちなみにウォーロックの好物はおでんだという。
地味！って思つかもしれないがそこら辺はスルーしてくれると幸
いだ。

『「いただきます」』

僕とウォーロックは朝食を食べ始める。

『今日どうするんだ？』

ウォーロックがたずねる。

「日曜日だから何もすることが無いんだよね」

『そういえば、もうすぐナツヤスミってのがあるんだろ？』

「夏休み？ああ、あるよ」

『俺はウィルスでも倒したくてウズウズしてるぜ！』

そういうと、ウォーロックはビーストスイングとクロススイングの
練習を始めた。

朝食食べてから練習してくれと言いたかったがそういうとウォーロ
ックが逆ギレを起こしそうな気がしたので言わなかった。

「まあどうせやることないから、ウィルス退治でもしにいこうか」

『よっしゃ！じゃさっそくカイパーをぶったおすために、練習に行
こうぜ！』

「どこに行くの？」

このあと、ウォーロックがとんでもない事を言う。

『あ？FM星にきまつてるだろ』

「いや、決まってるはないと思う……」

て言うわけで、練習がてらコスモウェーブを使って、FM星へ向かうことになった。

僕とウォーロックは朝食を食べ終わると、外に出た。

「トランスコード！シューティングスターロックマン！」

僕は電波変換して、FM星へと向かった。

FM星に到着すると、いろいろな電波体がいた。すると、いろいろな電波体が僕の方にやってくる。

『ウォーロック！』

『久しぶりだな…キルガ！』

キルガという電波体はウォーロックに敵みたいな目を向けてきた。

「え？どういうこと？」

『ちょうどいいスバル！こいつを練習相手にしようぜ』

『あ？調子乗るなよテメエ！！』

キルガは僕にむかって爪を尖らせて向かってきた。

「ウエーババトル！ライド・オン！！」

そして、キルガVSロックマンとの戦いが始まった。

第6話 FM星（後書き）

どうでしたか？

次回からバトルに入ります。

めっちゃ久しぶりですが……。

僕のどうでもいい話3

あるときバスに乗っていると、結構タイプな同学年ぐらいの女子が乗ってきました。

「おっ！」

とか思いましたがよく見ると

靴のかかとを踏んでいるのを発見して

「最悪。」

とおもいました。

なんだろう……このギャップ……。 (笑)

サウザンド・ワールド

「バトルカード！ロングソード！！」

僕は左手をロングソードに変えて、キルガを静止させる。

「バトルカード！ヘビーキャノン！！」

また、左手を変え、キルガにキャノンの一撃を当てる。

「ぐはっ！」

キルガは地面に倒れ、再び立ち上がる。

「エスパーフライ！」

キルガは超能力を使い、岩を浮かばせる。

「超能力！？」

「食らえ！！」

岩が僕に向かって飛んでくる。

「クッ！バトルカード！バリア！！」

青の薄い膜が僕を覆う。

岩がバリアに直撃する。

だが、一発でバリアは破れ岩にもろ当たってしまった。

「うわぁー!!」

岩が僕の上に乗っているため、避けようにも避けられない。

「終わりだ！エスパーキック!!」

「まだまだ！バトルカード！プラズマガン!!」

「ぐはっ!!」

キルガは10センチ射撃で食らった。

プラズマガンがヒットしたため、キルガは麻痺になっている。

『よし！スバル！今のうちに岩をどかせ!!』

「うん!!」

僕はすばやく岩をどかせた。

「バトルカード！エドギリブレード3枚!!」

『よっしゃ!!』

だが調子に乗りすぎたため、2つの剣は両手に、もうひとつは口ではさむ羽目に……。

「はっとほへはいんひゃない?」

(ちよっとこれは無いんじゃない?)

『仕方ないだろ、一気に3枚も使いやがるんだからよ。』

そうこうしている内にキルガの麻痺は解けてしまう。

「終わりだ！エスパーレーザー！！」

「行くぞ！3刀流なぎ払い！！」

僕はかなりのレーザーの痛みをこらえながらレーザーを切りにつ
た。

その結果、見事に切れた。

「何！？」

キルガは驚いていた。

そりゃそうだ。だって極太レーザーを切ったのだから。

「必殺！3刀流奥義！サウザンド・ワールド！！」

サウザンド・ワールドと言う攻撃はキルガをズバァン！！という豪
快な音で
切った。

「ぐわあ~~~~！！」

こうして戦いは終わった。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

僕は大量の出血を堪えていながら立っていた。

その痛みは今にも倒れてしまいそうな感じだった。

『大丈夫か？スバル！？』

この感じを見てわからないのかっ！！

『まあともかく、こいつも倒したことだし、帰ろっぜ』

「ハア・・・ハア・・・うん・・・」

こうして僕は地球に帰った。
めっちゃくちゃきつかったが。

サウザンド・ワールド（後書き）

どうでしたか？

ワンピースを読んでいる方は気づいているかと思いますが、サウザンド・ワールドってあの〇〇が使った、王家七武海の〇〇〇〇を倒した時につかった技です。

あってますか？

今日、父さんとクイズアンサーアンサーというクイズのゲームで勝負したら4回中3回も勝ちました（笑）

案外大人は弱いですよ！皆さんも大人に勝てるかも知れませんか？

（笑）

はんぶんこ

『オイ、スバル…相当やばいぞ…お前…』

僕はFM星から家に帰ってきて、布団で寝ていた。

僕の体の所々から小く中の中間程度の血が出ていた。

むちゃくちゃ痛い。

電波人間と言えどレーザーなんて食らったらめっちゃくちゃ痛い。

「大丈夫……きっと治るから…」

『にしてもひどいだろ……』

ここまで酷い怪我をしたのはバミューダラビリンスでのソロとの戦いだろうと僕は思う。

『まあしばらく休んでおけ』

「うん」

くミソラ視点

「ミソラちゃん、クランクアップです、お疲れ様でした〜!!」

「ありがとう〜ごいまま〜す〜!!」

私はドラマの撮影をすべて終え、クランクアップした。

撮影現場を後にした私は人影に隠れる。
そして、私は叫んだ。

「トランスコード！ハーブ・ノート！！」

電波変換した私はウェーブロードを使ってスバル君の家に帰る。

『お疲れ！ミソラ！』

「うん！」

ギターからハーブが声をかける。

『これで、当分仕事も無いわね！』

「ゆっくり休める〜」

このあと、ハーブは爆弾発言を出す。

『スバル君と長く一緒にいられるわね！』

「は……ハーブ！！」

私は顔を赤くして、ハーブに怒る。

『ごめんなさい。さあ早く帰りましょ』

ハーブとのやり取りを終えウェーブロードをひたすら進んでいくと
スバル君の家に辿り着いた。

「ただいま」

だれも返事がない。

スバル君はいないのだろうか？

ともかく私はスバル君の部屋に向かった。

部屋にも誰もいなかった。

ベッドで寝ているのかな？と思った私は、ベッドのところに行く。

「……っ！！」

私とハーブは互いに驚いた。

なんとスバル君が血をだしていたのだ。

「スバル君！！？」

「ミソラちゃん？」

「大丈夫！！？」

「う…うん、大丈夫だよ」

無理をしているようにも見えたスバル君。

なんとか、出来ないだろうか。

そうだ！

「み……ミソラちゃん？」

スバル君と同じベッドのなかに入ったのだ。

「苦しい時は分け合おうよ？」

「ありがとう……ミンラちゃん」

その時スバル君は目から涙が出ていたのだった。

はんぶんこ（後書き）

どうでしたか？

ところで、皆さん

ムー大陸って本当にあるとおもいますか？

流星2のモデルになっているムー大陸は日本の（世界の）歴史上でもあるのでは？と言われてます。

そう。太平洋の真上に浮かんでいたと言う説があるのです。

皆さんはこの話を信じますか？

次回の話のあとがきで書きます。

愛情

私は、スバル君のベッドに入った。

なんかスバル君のベッドは温かった。

これで、スバル君の痛みやつらさが少なくなるかなと思った。

私も眠くなってきた。

私は目を閉じ、静かに眠った。

私は起きた。

すると隣にスバル君のいなかった。

もう起きたのだらうと思った。

私はベッドからでると、私はギョツとした。

なんと服が血まみれになっていた。

「どっしょっしょ……」

『スバル君から、借りればいいじゃない』

ハープの意見により、私はスバル君から、服を借りることにした。
スバル君が部屋から帰ってくるのを私は待つことにした。

スバル
僕は、風呂から上がった。

なぜ、風呂にはいったのかというところあの時の戦いで体が血まみれになったからだ。

風呂から、上がると目の前にウォーロックがいた。

『大丈夫か？』

「うん、一応出血も止まったし大丈夫だよ」

『そうか、危険な目に遭わせてしまって悪かったな』

久しぶりにウォーロックが謝罪してきた。

僕はつい返答に困ってしまった。

「いいよ、気にしないで」

『ありがとよ』

昔のウォーロックと違って、今のウォーロックは愛情を持ったような気がする。

そんな他愛のない話をしているうちに僕は自分の部屋の前に来た。

僕は部屋に入ると、ミソラちゃんが血を流して座っていた。

「ミソラちゃん、大丈夫!!!?」

「うん、大丈夫だよ」

「お風呂に入ってきたなよ。服ある？」

「無い……」

困った目を浮かべていたミソラちゃん。

「じゃ、貸してあげるよ！」

「本当?!?!?」

さっきの目が嘘みただった。

「スカートとかないから、Tシャツにジーパンとかでいい？」

「いいよ！」

「じゃ、まってるね」

そついうと僕は引き出しからTシャツとジーパンを取り出した。

「これでいい？」

「ありがとう！」

エメラルドの瞳を僕のほうに向けていった。つい僕は可愛いと思ってしまった。

ミソラちゃんが風呂に入りに行くと僕は勉強机に座って宿題をやった。

『スバル』

「……………」

『ハア』……………」

ウォーロックも疲れたのか眠ってしまったのだった。

愛情（後書き）

どうでしたか？

U大陸はですね、実際あったのではないかと歴史上では言われています。

太平洋の真ん中に浮いていたと言う感じですが。

でも、これは科学的に証明するなんて無理なんですよ。

だって、大陸は3000トン以上もあるのに、科学的に持ち上げるなんて無理なんですよ。

さらに、落ちた時の残骸も残っていませんしね。

ながながと話してすみませんでした！

あと、なんかグツダグツダでしたね。申し訳ありません。

次回から、話を少しばかり進展させますね。

ヘルローブン

ミソラちゃんが風呂から上がってきた。

僕は残り僅かな宿題を急いでやっていた。

「スバル君〜！」

「どうしたの？」

「一見見た感じ貸した服はちゃんと着れていたようだ。少しホツとした気分である。」

「血取れてる？」

「うん、ちゃんととれているよ」

そう言って僕は宿題を再開させようとしたその時だった。

ピピピピピ……！！

ハンターV.Gからメールの着信の音が鳴った。

僕はメールを見た。

「……！！」

「どっつしたの？」

僕の急な表情の変化にミソラちゃんはビックリしたのだろう。

『えっと…今晚10時、TKタワーの屋上に来い。だってよ』

ウォーロックがメールの中身を読んだ。

今は9時29分。

今から行けば十分間に合うだろうと僕は考えた。

「ミソラちゃん、行く?」

「当然よ!ハープ良いわよね?」

『ええ!』

ハープも承諾の返事をした。

「ウォーロック!」

『おう!』

2人と2体は全員OKを出し、僕とミソラちゃんは叫んだ。

「トランスコード!シューティングスターロックマン!」

「トランスコード!ハープ・ノート!」

そして、僕とミソラちゃんは

ウェーブロードを使ってTKタワーへと、向かった。

しばらくすると、僕とミソラちゃんは10時ぽっきりにTKタワーの屋上に着いた。すると、聞いたことの無い男の声が聞こえた。

「フフフ…。ようこそ、ヘルオアヘブンへ」

「誰だ!？」

僕は声を荒げていった。

「私は、カロリス。ヘルオアヘブンの司会だ」

「ヘルオアヘブンって…?」

ミソラちゃんは少し恐怖を感じながら発した。

「簡単に言おう。ヘルは地獄。ヘブンは天国だ。日本語に訳せば地獄か天国かって言う事だ」

僕は息を呑んだ。

ミソラちゃんは、僕の後ろに隠れている。

「つまり、君と私でクイズをするのだ。」

「クイズ?」

「そう。今から15問の問題を出す。15問すべて解ければ君には

天国、つまりカイパーゴッドベルトの居場所を教えよう」

「本当か……？」

僕は恐怖に耐え、ミソラちゃんを守りながら言った。

「しかし、失敗すれば……」

その時ウエアブロードが無くなった。

そして、僕とミソラちゃんはまっさかさまに落ちた。

「うわ……!!」

「きゃ……!!」

が、途中変わった乗り物に乗せられ僕とミソラちゃんは助かった。

「失敗すれば、その乗り物の地面は開き、君たちは死が待っている」

僕は足が震えているのを我慢して、カロリスと目を合わせた。

「わかった。受けて立ってやる」

僕は逃げ道は無いと判断しそう答えた。

ミソラちゃんは、泣き崩れていた。

「ミソラちゃん、泣かないで。僕は君をこの命に代えてでも守ってみせる……」

「ひっく……うっうっ……うん」

そういうと、ミノラちゃんは泣くのをやめた。

さっきの言葉を言ったからなのか、僕は足の震えが止まった。

僕は絶対にミノラちゃんを守ってみせる！！

「よし、始めよう。あなたに待っているのは、居場所という名の天国かそれとも…死と言う名の地獄か…では、ヘルオアヘブンスタート！！」

絶対にミノラちゃんを守る！！

ヘルローヘブン（後書き）

どうでしたか？

最後めっちゃ言いたかった台詞です（笑）

僕も一回言ってみたいぐらいです。（笑）

これからも頑張ります！

感想待ってまゝす！

決断

「第1問。 次のうち飲める奴はどれ？」

A：赤

B：茶

C：青

D：黒

僕は「なんだ簡単じゃないか」と思った。
ここで、僕は間違いなくBを選んだ。

「正解！」

当然だろうとしか思わなかったが。

「第2問。 次のうちいい評価なのはどれ？」

A：凡

B：不

C：可

D：悪

最初はテンパってしまっただが、
すぐわれに返り、Cを選んだ。

「正解！」

ちよつと危なかったが。

「第3問。 次のうち四国地方に無い物はどれ？」

- A : 愛媛
- B : 徳島
- C : 香川
- D : 鹿児島

ここは普通に社会でも習っているので、
すぐに僕はDと答えた。

「正解！」

これも当然としか思わなかったが。

こんな感じで4問、12問とクリアしていった。

最初のほうは簡単だったが5問こしてから段々難しくなっていた。

「第13問。 次のうち、原始銀河が形勢されたばかりの時代を何と
いったか。

- A : 宇宙暗黒時代
- B : 銀河形成時代
- C : 宇宙漆黒時代
- D : 銀河極悪時代

は！？って思ったが宇宙のことだったのですぐわかった。

答えはAである。

「……………正解！！」

当然だろう。

「第14問。 次のうち、伊達政宗と真田幸村との対決に横槍を入れ

た人物はだれか。

A：片倉小十郎

B：長宗我部元親

C：猿飛佐助

D：竹中半兵衛

もはや専門知識のレベルになってしまっている…。
ここは勘で行くしかない！

「Dでいいよ」

「……………」

嗚呼、僕とミソラちゃんはここで死んじゃうんだ…。

「正解！！」

「うっそお！？」

つい僕は変な声をだしてしまった。
まさか合ってたとは…。

「さあ最終問題まで来ましたね。ここまでよく正解できましたね」

「僕は…カイパーを倒すまで負けない！！そして、ミソラちゃんを
守る…！！」

強く言い放った。

ミソラちゃんも泣き止んではいたが、地面に座っている。

「ミソラちゃん。立とうよ！ここで、僕たちは負けるわけには行かないでしょ？」

「……うん！」

ミソラちゃんは立ち上がった。

そして、僕にも負けないぐらいの強い目つきになった。

「良いでしょう。」

では最終問題！

次のうち、百も承知のあとに続く言葉は何？

A：百も理解

B：二百も合点

C：百も了解

D：二百も理解

僕は頭を悩ませていた。

ここまでできて、ヘル＝死なんて、いやだ。

絶対にヘブンにならなきゃいけないんだ！

「ミソラちゃん、どれがいい？」

「じゃ……Bにしようかな」

「ミソラちゃんが言うなら僕は信じる。だから、2人でヘブンに行こう……！」

「うんー！」

そして、僕とミノラちゃんは同時に言った。

「「Bでー！」」

僕とミノラちゃんは、目を閉じた。

死ぬ時はいつも一緒だったということを伝えるため、手をつなぎながら。

「……………おめでとうー！」

「「やった〜！……！」」

正解した。

見事15問パーフェクトを達成した。

「おめでとう。あなたたちにはへブンを差し上げましょう。」

こうして、僕はカロリスから手紙をもらった。

「この手紙に沿って行けば絶対にボスに会いに行けますよ。では…
汝に幸あれー！」

そういつてカロリスは消えた。

「スバル君！ありがとう！守ってくれて！！」

「うんうん、ミソラちゃんもあの時決断してくれて本当にありがとう！！」

「これはお礼だよ」

そして、ミソラちゃんは僕の頬に軽いキスをした。僕とミソラちゃんは顔が真っ赤だった。

『よし！帰ろうぜスバル！！』

『空気を読みなさい！この犬野郎！！』

『ま〇やまち〇みたいにいうんじゃねえ！！』

またウォーロックとハーブの喧嘩が始まった。

僕とミソラちゃんはそれを笑いながら見ていた。

「じゃ、帰ろうか！」

「うん！」

こうして、僕とミソラちゃんは家に帰ったのだった。

『オイ！俺たちを置いていくんじゃねえ！！』

『待ちなさい、ミソラ！！！！』

2人はおいていかれたようだった…。

決断（後書き）

どうでしたか？

けっこうOOオネOから参考にしました（笑）

皆さんわかりましたか？

次回から本格的にVSに入っていきます！

感想待ってまゝす！！

暗号

深夜。

僕とミソラちゃんはカロリスからもらった手紙を2人で開けた。すると、中にはこう書かれていた。

ばかにはわからない

しみついたせんけつが

にしゅのにんげんに

どろーりと

にんげんだ

かみさまからのぶれせんと

それはよろこび

それはすべてのりかい

それはきれいなぜん

にんげんはかんしゃするのだ。かみさまに

僕とミソラちゃんは何をいつてるのかさっぱりわからなかった。

クイズ：この暗号からカイパーの場所がわかります。

では、どこにいるのでしょうか？

理由もあわせてお答えください！

ヒントの会話

「なんか、全くわからないね」

僕は真つ先に言葉を発した。

『案外何か規則があったりとかするんじゃないか？』

ウォーロックが疑問に思ったことを言った。

「でも、縦に読むと、ばしにーにかそそに…違うね」

ミソラちゃんは縦に読んだのだろう。

だが、縦に読むとわけのわかんない文になる。

『じゃあ、別の風に読んだりとか？』

ハープが意見を出す。

「別の風って？」

ミソラちゃんが突っ込む。

『そこまではわからないけど』

「……」

僕はすべてわかった。

この暗号の意味が。

「そうか……」

「え？」

ミソラちゃんは僕に疑問を発した。
僕の推理に間違いは無い。

「ミソラちゃん、ほらこうすれば…」

僕はミソラちゃんとウォーロックたちに答えを教えた。

「『なるほど〜!〜!』」

皆納得したようだ。

僕は決意をした。

明日、カイパーを倒すと。

「じゃ、明日の朝行こう!」

「うん!」

こうして、明日に備えて僕たちは風呂に入って寝たのだった。

暗号（後書き）

どうでしたか？

この暗号僕がかんがえました（笑）

携帯で読む方はわかりにくいと思いますので、PCで見ればわかる
と思います。

わかった方は評価の所に書いて送ってください！
では・・・

See you again...

要塞

第7話

翌日。

僕は、ミソラちゃんと共に起床した。

朝食を食べ準備を済ますと、僕とミソラちゃんは同時に家を出た。そして、僕たちは叫んだ。

「トランスコード！ シューティングスターロックマン！！」

「トランスコード！ ハーブノート！！」

僕とミソラちゃんは手紙の暗号に従ってスカイウェーブに乗って目的地を目指す。

「ミソラちゃん」

「何？」

「怖くは無い？」

昨日からずっと聞いたかった質問だ。

「大丈夫だよ！ 何かあったらスバル君に守ってもらおうから」

オイオイ、なんて根拠の無い安心感なんだよ。
まあミソラちゃんだけは絶対守る。
昨日の夜誓ったことだ。

と、あーたらこうたら話している内に目的地に着いた。

しかし、ここはいつきても電波の環境が悪い。

さすが、「バミューダラビリンス」といったところだろうか。

あ、ちなみに が答えである。

「バミューダラビリンスのどこにいるんだろうっ?」

「とりあえず、最深部まで行こう!」

「了解!」

僕とミソラちゃんは最深部に向かった。

だが行き方がわからないので、ハーブノートの力を使って先に少しづつ進んでいく。

『全く、ここは迷路でややこしいぜ……』

と、ウォーロックが呟くほどだ。

確かにここは迷路みたいな物だ。

「スバル君!ここだよ!!」

進んでいるうちに最深部にたどり着いた。

「ゲッ!?!」

「何これ!？」

最深部につくと、目の当たりにしたのはデカイ要塞だった。

『ムー大陸にそっくりだな…』

『それを参考にして作ったのかしらね』

ハーブとウォーロックがなにかわからないが考察を始めている。
確かにムー大陸に似ているとは思うが。

「じゃ、中に入るうか……」

「うん…」

僕とミソラちゃんは扉を開け、要塞の中に入ったのだった。

『来ました…』

「よし、最強の番人の出番だな……」

「お呼びでしょうか？」

怪しげな男の声が響き渡る。

「ロックマンを殺して来い」

「はっ。仰せのままに……」

そういつて男は消えた。

『フフフ…ロックマン…早くきてください…あなたの死の宴の準備は出来てますよ…』

カイパーはどす黒い声で言ったのだった……。

要塞（後書き）

どうでしたか？

正解は「バミューダラビリンズ」です。

理由は自分で考えてください。（笑）

次回から、本格的にバトルに入っていきます！

では、感想待ってます！！

最強の番人

僕たちは要塞の中に入った。

中はヒンヤリ寒かった。

ちよつと肌寒いと言ったところだろうか。

そのとき、何か弾がミソラちゃんの所に飛んでくることを察知した。

「ミソラちゃん、危ない!!」

僕はミソラちゃんに飛びつき弾を間一髪のところまで避けた。

「大丈夫？」

「うん…ありがとう…」

会話を終え、先に進もうとした瞬間ウォーロックが話しかけてきた。

『スバル！物かげに隠れる!!！』

そういわれた僕とミソラちゃんは物陰に隠れ弾を避けた。

「どうしたの!？」

『ジャミンガーが対電波人間砲を撃ってるんだ!!』

「何それ？」

ミソラちゃんがウォーロックに聞き返す。

『電波人間に強烈なダメージを与える弾よ。あれを喰らったら重傷よ!』

ハーブが解説をする。

『クツクツク…だったらこっちも対電波人間砲を使うまでだ!…スバル・ミソラ。これを装着しろ』

クツクツクだけはやめて欲しかったのが正直な感想だった。だが突っ込んでいてもしょうがないので装備をした。

「ミソラちゃん!行こう!」

「うん!」

そして、僕とミソラちゃんは対電波人間砲を使って先に進んでいった。

ある程度進んでいくと、見知らぬ男が立っていた。

「フフフフ…よく来たなロックマン…」

「誰だ!?!?」

声を荒げて言う僕。

「私の名は最強の番人、ペンダゴン。貴様を殺すために送られた最後の刺客だ!」

『へっ！お前なんかさっさと倒してカイパーに会わせていただくぜ
！！』

「私たちは負けない！カイパーを倒す日まで！！」

ミソラちゃんも、負けずに声を出す。

その声は恐怖なんて感じなかった。

感じたのは正義・守るといふ正の感情だった。

「やれる物ならやってみるがいい！！」

「ミソラちゃん！」

「うん！」

僕は叫んだ。

「ウェーブバトル、ライド・オン！！」

と……。

最強の番人（後書き）

どうでしたか？

今回は比較的というかなかなり短かったですね…。

あとこの小説も、22話・・・。

まだまだ先は長いですが、最後まで頑張っていくますので皆さん応援のほうよろしくお願いします！

他界

「バトルカード！ソードファイター！！」

僕はバトルカードのソードファイターをプレデーション（簡単に言えば送ること）して、左腕にソードファイターを出す。

いつも思うのだが何で左腕にソードとかを出すのだろう…利き手の右腕に出して欲しいぐらいだ。

ガキンという鈍い音が僕の剣とペンダゴンの鎧を合わす。

「バトルカード！ハリケーンダンス！！」

ペンダゴンが僕に暴風並みの風を引き起こす。飛ばされそうにもなるが、必死にこらえていた。

「スバル君！ショックノート！！」

音の攻撃をペンダゴンに食らわす。だが、全く効いていないようだ。

「だったら…パルスソング！！」

ショックノートよりも強い攻撃を食らわす。前よりは効いていた。

そのおかげもあって風は止まった。

「くそっ…ハーブノートか…まあいい。そいつから殺すとしよう！
！ショートナイフ！！」

ショートナイフは直訳すればわかると思うが短いナイフだ。
これをくらったら、怪我どころでは済まされない。
重傷……いや、死ぬ可能性だってある。

ペンダゴンはミソラちゃんに向かって、ナイフを向けてくる。

「危な〜い!!」

僕はあわてて、ミソラちゃんを助けに行った。
だが…

グサツ!!

「……っ!!」

僕の腹部から濃い鮮血が流れていた。
そしてだんだん意識が保てなくなってきた。
ついに僕は倒れ、静かに目を閉じた。

「スバル君!! しっかりして!!」

ミソラちゃんが揺らしてくれたおかげで
僕の意識が一時的に回復した。

「ミソラちゃん…僕の…代わりに…カイパーを…とめてくれ…そ
して………」

「僕は…君の…事が…好き…だった…よ………」

そういって、ミソラちゃんは黙って涙を流した。
ごめんね…ミソラちゃん……こんな形で……告白してしまって。

僕は静かに目を閉じた。

そして、僕の意識が完全に無くなり僕はこの世を去った……。

他界（後書き）

どうでしたか？

あゝとうとうこのシーンまで来ちゃいました。

あんまりこういう事させたくなかったのですが…。

ここから展開が変わっていきます。

スバル君のファンの方。

本当に申し訳ありませんでした。

感想待ってまゝす！

シヨックノートセレナード

私はひざまづいた。

だって、愛していたスバル君が死んじゃったのだから。

「そんな……スバル君……」

『嘘……でしょ……？』

私とハーブは現実が受け止められなかった。

それは、あまりにも突然の出来事だったのだから。

「スバル君！ねえスバル君！！返事してよ！！」

『ウォーロック！返事しなさい！！』

やっぱり応答は無かった。

ロックくんも同時にいなくなってしまった。

『駄目だわ……周波数も感じなくなってしまったわ……』

「そんなあ……」

私は泣いた。

大声をあげて。

散々無くと私は敵意をペンダゴンに向けた。

「ペンダゴン……！！許せない！！」

「!?!」

ペンダゴンも驚いたのか、顔が引きつっている。

「スバル君の気持ち……無駄にはしない!?!」

決意した。

私は戦う。

スバル君の気持ち、ロック君の気持ち。

全て背負って戦う!?!

「喰らいなさい! ショックノートセレナード!?!?!?!?!」

豪快に響き渡る爆音と痛み。

「ぐああああ!?!?!ち……畜生……カイパー様……申し訳ありませんでした……!?!?!」

こうして、ペンダゴンはデリートされた。

「ハーブ。スバル君どうする?」

『そうね。おんぶして、運んであげなさい』

「うん」

私はスバル君、いやロックマンの体を背負った。
スバル君の体は温かった。

やっぱり男の子なんだなあ……

って思った。

『ミソラ。今なにか考えていたでしょ？』

「か…考えてないよ!!」

私はつい顔を赤くしてしまった。

だが、次進めば最終決戦。

私はロックマンの体を背負って次の部屋へと進んだのだった。

（ソロ視点）

俺はゆっくり目を開けた。

すると、外にはコダマタウンが見えた。

「俺は…一体？」

なにがあつたのか記憶が無い。

まあいいのだが。

「ロックマン…？」

何故か、ロックマンがいないことに気づいた。

ムー人は周波数を感じることが出来る。

バミューダラビリンズから無くなった気がした。

「俺の獲物を……！畜生！ぶっ飛ばしてやる……！」

俺は古代のスターキャリアーを掲げて、叫んだ。

「電波変換！ソロ！オン・エア……！」

こうして、俺はブライへと姿をかえ、バミューダラビリンズへ向かった。

シヨックノートセレナード（後書き）

どうでしたか？

久しぶりにソロを出してしまいました（笑）

でも、ソロは個人的にあまり好きじゃないんですけどね。
感想待ってます！

最終決戦始まる…！！

闇の道を進んでいる私。

スバル君の体を背負っているので、結構疲れる。

『ミソラ』

「何？」

急に真顔で言われたのでビックリした私。

『もし、何かあったら…きっとスバル君が助けってくれるわよ』

「え…？だってスバル君死んじゃったんじゃないか…」

『天国から助けしてくれるわよ。キズナの手でね！』

私は暗い世界が一気に明るくなった気がした。

——スバル君がきつと助けてくれる。

私は心が軽くなった。

死んでいったスバル君や、世界中の人のために私は戦う！

絶対に負けない！！

要塞の深奥に辿り着いた私。

すると、目の前にはとんでもない世界が見えていた。

「何コレ！？」

『これは、エネルギー装置かしら?』

ふとみると下に説明書がおかれていた。

この、装置はキズナ腐敗エネルギーが入っていてこれを発射すると、世界中のキズナが無くなってしまつらしい。

「フフフフフ…よく来たなハーブノート…」

「カイパーゴツドベルト!!」

謎のワイプホールから出てきたカイパー。

私は一瞬怖気ついた。

初めて見るその人物は負のエネルギーを出しまくっている気がした。

「ロックマンは死んでしまったか…まあよい。ハーブノートを殺せば私の復讐劇は完成する!!」

「ハーブ!!」

『ええ!!』

私は覚悟した。

もう逃げられない。

全力で、死を覚悟して戦う。

「ウェーブバトル!ライド・オン!!」

「死ね〜!!!!!!!!」

ついに…最終決戦がはじまった…!!

（ソロ視点）

「どこだ!？」

俺はバミューダラビリスに辿り着いた。
だが、ロックマンはどこにもいない。
最深部……いるかもしれない。
俺はダッシュで最深部へと向かった。

「これは…!？」

なんとそこには要塞があった。
ムー大陸にそっくりな要塞が。

「ムーを馬鹿にしゃがって…!!許せない!!」

俺は要塞の中へと入った。

最終決戦始まる…！！（後書き）

どうでしたか？

なんか、最近小説が短くて困っています…。

（僕のどうでもいい話5）

昨日夜、寝たら不思議な夢をみました。

なんか、スバルとミソラが結婚して、ミソラが恐妻になっている夢です（笑）

ジャガー横田みたいな感じで（笑）

最終決戦<前編>

「ショックノート!!」

アンプから出てくる音符がカイパーめがけて飛んでいく。

「フン。弱い!」

「うそ…!?!」

なんと、カイパーは一振りでショックノートを防いでしまったのだ。

「だったら、ショックノートフォルテ!!」

さっきよりも強いショックノートの音符が
カイパーに飛んでいく。

「Gソード!!」

ズバッ!という音がショックノートの音符を斬った。

「今度はこっちから行かせていただく。ブラスタースマッシュ!!」

カイパーの腕から大きい弾が飛んでくる。

「バトルカード!スーパーバリア!!」

普通のバリアとちがって

スーパーバリアは強度が高い。

そのおかげもあって攻撃は防げた。

「バトルカード！プラズマガン！！」

「無意味っ！！」

また一振りで消されてしまった攻撃。

「どうしよう。。。」

『ミソラ！危ない！！』

「え？」

「ママラガン！！（万雷）」

かなり大きい雷がミソラめがけて降ってくる。
だが、避け切れなかった。

「きゃああ！！！！」

『ミソラ！！！！』

私はつい、倒れそうになった。
だが立つのが精一杯の状態だ。

「パルスソング！！」

私は手に持っているギターを掻き均し、カイパーに不快なダメージを与える。

「ぐっ！」

カイパーも少しひるんだようだ。
今しかチャンスは無い。

「シヨックノートセレナード!!」

アンプから物凄い大音量の痛み・音を出して出して大ダメージを与える。

「ぐああああ!!」

カイパーは倒れた…が、すぐ起き上がって攻撃態勢に入った。

「貴様…俺をこけにしゃがって…!!」

「ひっ！」

私はつい、相手の威嚇の目に怯んでしまった。
物凄い剣幕だ。

「これで終わりだ！Uビーム!!」

極太のレーザーを撃ってきた。

私は避けれずもろ喰らってしまった。

「きゃあああ!!!!」

かなり吹っ飛ばされた。

『ミソラ！！起きなさい！死んじゃうわよ！！』

「体が…動かない…！！」

『ミソラ！！』

体が動かない…。

もう、私も死んじゃうのかな。

「止めだ！Gソード！！」

ごめん、スバル君。

私スバル君との約束果たせなかった…。

本当にごめん…。

その時だった。

ガキンツ！！

「何！？」

「貴様が……ロックマンを殺したのは」

その時、彼が助けに来てくれた。

最終決戦<前編>(後書き)

どうでしたか？

なんか、今日は面白い小説が書けなかった…。

スランプでしょうかね。(笑)

感想待ってます！

最終決戦<後編>

「ソロ君!?!」

いきなりソロが出てきたことにビックリしてしまった私。でも、彼が出しているオーラは孤高だけではなく、怒りも感じさせるようなオーラだった。

「ムーの力思い知らせてやる…!! ダンシングブレード!?!」

ラプラスのついた剣を投げるソロ。

その剣は斜めに飛んでいった。

「ぐはっ!?!」

カイパーはいままでと違うぐらい弱くなっていた。

「とどめだ! ブライブレイク!?!」

剣を地上に叩きつけエネルギーが下から出ていた。

「がああ!?!」

「す……凄い」

『ソロ。なんて強い!?』

感心しているとソロが私に話しかけてきた。

「ハーブノート！止めを刺せ！！」

「え…！？うん！！」

私は静かに目を瞑り一気に目を開けて叫んだ。

「エンジェル・ザ・ソング！！」

天使のような歌声が響き渡った。

だが、解釈に読者の皆さんは気をつけて欲しい。

この攻撃は、あくまでも攻撃技。

これは、簡単に言えば滅びの歌と言う感じだ。

「わ…私の体が…消えていく…！！くそっ…復讐劇は失敗だ…。さらばだハーブノート。お前とまた戦えるのを楽しみにしているぞ…」
こうして、カイパーは消えた。

「ソロ君。　なんで？助けにきたの？」

「違う。　ロックマンの周波数がなくなったから殺した奴を探しに来ただけだ。」

『ホンッと素直じゃないわね…』

「うるさい。　俺は帰る。　星河スバル…さらばだ」

そういって、ソロはいなくなった。

私はすぐ、スバル君のもとに戻った。

「スバル君!!」

相変わらず変化は無い。

やっぱり死んでしまったのだろう。

「ハープ、帰ろうか」

「ええ……」

こうして、スバル君の体をおんぶしながらウェーブアウトをしたのだった。

最終決戦＜後編＞（後書き）

どうでしたか？

皆さん、評価・感想ありがとうございました！

少し自信がつかまりました。

これからも頑張っていくのでよろしくお願いします！

第7話 希望or絶望(前書き)

読者の皆様へ。

これから評価・感想を書く時は初めて書く人のみ評価を書いてください。

2回目以降は絶対感想にして送ってください。

守れない場合、削除する可能性があります。

ご注意ください。

堅い話すみませんでした。

では、本編をどうぞ。

第7話 希望or絶望

第7話

「スバル君…」

もう、いなくなってしまったのだ。

私の最愛の人物・肉親のような存在であるスバル君が。
私はどうしろと言うのだ。

「ミソラちゃん…!」

いまでも聞こえる幻聴。

私に追い討ちでもかけるかのように聞こえてくる。

「ぼ…僕と…ブラザーを結んでください…!」

私と出会ったきっかけの言葉。

私を一步前へ踏み出させてくれた言葉。

この言葉は今でも鮮明に蘇ってくる。

「スバル君…私はどうすればいいの？」

デートでとった2ショットの写真をとって問いかける私。
答えは返っては来ないが。

「なんで…なんであの時かばってくれたのよ!!」

眼から流れ落ちる涙を必死に止めようとする。

でも、とまりなどしなかった。

スバル君のことを思えば思うほどかえって涙が出てしまう。

「私を…一人にさせないって…言ったじゃん……」

改めて感じる、孤独感・絶望感・恐怖感。

あれまで楽しかった日常が嘘のようだった。

「うわああ〜ん!!」

今までより流れてくる涙。

速さは時間ごとに増していつてる。

もう、とまりなどしなかった。

目の前にある、真実・絶望から逃げなど出来ないのだ…。

すこし、涙が収まった私。

俯いているとハープが話しかけてきた。

『ミソラ……』

「何よ!!」

つい声を荒げてしまった私。
ハーブは少しビツクリしたようだ。

「ごめん…なんだった？」

『スバル君は…生きているかも知れないわ』

「え!!!?」

いきなりの情報にビツクリした私。
私は表情が変わった。

「どうして!?!」

『スバル君は電波変換して死んだわ。当然、元は人間だからどこかに電波が残っているかも知れないわ。もし、見つけて天地さんに見せれば……』

「見せれば?」

『電波人間のロックマン。すなわちスバル君を復活させれるかも知れないわ!』

「本当なのね!?!」

『ええ!』

希望が見えた。

目の前にあるのが真実・絶望から希望・勝利に変わった。

「ハープ！探しに行くわよ！！」

『ええ！！』

私は叫んだ。

「トランスコード！ハープ・ノート！！」

スバル君を探す旅が今、始まった。

第7話 希望or絶望（後書き）

どうでしたか？

今回一番得意なシリアスな雰囲気にしてみました！

僕のどうでもいい話7

今日練習が（市営の）体育館でありまして、休憩になったので、外でジュースを買いに行こうとしたら3歳の子供に「バレーボール？」って聞かれました。

「違うよ、バスケットボールっていう競技だよ」って言いました。バレーボールとバスケットボールって……。ラグビーとアメフトならまだしも……。

天国

私は家を出て、まずは今まで行ったことのあるところに行ってみた。だが、どこにも見つからなかった。

「暑い……」

今の季節は夏。

照りつける太陽の光が私の体力を奪っていく。

さらに8月。容赦ない光に私は倒れそうだった。

『大丈夫？』

「水分不足で倒れそう……」

『一回ウェーブアウトして、何か飲んでいきなさい』

「そうする」

私はいつかいウェーブアウトして、自販機でジュースを買ってきた。例の〇〇ちゃんの〇〇ンジ味だ。

「よし、元気いっぱい!!」

どこかで聞いたことがあるかもしれないがスルーして欲しい。

『行くわよ!』

私はもう一回電波変換して探し続けた。

でも、やっぱりいなかった。

「そつだー!!」

『どつしたの?』

「天地さんに相談してみよう!」

私は天地さんに連絡して、居場所を探してもらった。
電話を切ると、もう一度探した。

スバル君

私が絶対復活させるから……………。

(ミソラちゃん…待ってるよ…………)

「え!?!」

『どつしたの?』

「さっきスバル君の声が確かに……………」

『やっぱり、スバル君が生きているかも知れないわね』

ハーブの言葉から生きていることを確信した。

いや、正確には残留電波が残っていると言うのが正しいのかも知れない。

しばらく探して行くアテを無くすと、天地さんから連絡が来た。

「ミソラ君！」

「わかつたんですか!?!」

昔から天地さんに言いたいことがある。

君付けはやめて欲しい。

何故か凄い違和感を感じるのだ。

「スバル君の電波は天国にある！」

「『天国うう!?!』」

突拍子の無いことを言ったため、私とハーブは冗談でしようと思った。

「スカイウエーブの天国の階段を使って天辺まで行けばスバル君の電波があるかもしれない！」

これを聞いて私たちはなるほどと思った。

天国。なんかメルヘンな感じがするのは気のせいだろうか。

「天地さんありがとうございます！」

電話を切った私はアンテナの前まで来た。

私は叫んだ。

「電波転送! スカイウエーブ! オン・エア!」

スカイウエーブに乗って私はスバル君を探しに行ったのだった。
上っている間物凄く涼しかった。

天国（後書き）

どうでしたか？

「早く書いてください」というコメントが来たので必死で今急ピッチで書いてます（笑）

頑張って書かなくては・・・！！

サハラ砂漠（前書き）

どんなタイトルだよ！
って思わないで下さいね（笑）

サハラ砂漠

「あゝ涼しい」

私は物凄い心地よさに感動してしまった。
空はやっぱり気持ちがいいものである。

『ミソラ、早く探しに行きましょう!』

私はドンブラー湖のスカイウェーブ・ナンスカのスカイウェーブを
通って

バミューダラビリスへ向かった。

バミューダラビリスから、天国への階段へと向かった。
スバル君がムー大陸を撃破したため、ムー大陸は無くただただ階段
が続いていた。

「げえ〜、これ登るの……」

『仕方ないでしょ。スバル君の為なんだから』

「じゃ、行こうか!」

私は登り始めた。

最初のほうは楽だったが30分もすると、段々疲れてくる。
1時間たつともう私は倒れそうになっていた。

「まだなの〜?」

『あと、1000段って書いてあるわ』

「もう、無理」

「どんだけあるんだよっ!!」

「って私は思った。」

「1時間であと1000段って…。」

『1000段なんだから頑張らなう!』

「そうだね!」

「と言っわけで私はまた登り始めた。」

「だんだん疲労どころか膝や肩など痛みまで発してきた。かなり痛かったが頑張って登り続けた。」

「やっとついた……」

「階段を登り終えて見えたのは」

「まるで砂漠を連想させるような雲の大地だった。」

「あたり一面、雲しか見えなかった。」

『サハラ砂漠って感じね』

「なんでハーブがサハラ砂漠を知ってるのよ」

私はつい突っ込んでしまった。

ちなみにサハラ砂漠というのは、アラビア語で「荒れた土地」っていう意味がある。

簡単に言えばアフリカ大陸の3分の1を占めている世界一大きい砂漠だ。

ほかのところは00デザートというのにサハラ砂漠だけは単にサハラというぞうだ。

英語が苦手な方のため補足だがデザートは食事の奴ではなく砂漠という意味だ。

「ていうか、なんで随筆文見たいな感じになってるのよ」

『作者の自慢でしょ?』

「なるほどね」

別に自慢ではないのだが。

サハラ砂漠（後書き）

どうでしたか？

あれは別に自慢じゃないですよ！

誤解を招いてしまったら申し訳ありません。

僕のどうでもいい話？

朝、父さんと喧嘩してしまいました。

この冷戦は結構続きそうです（笑）

まあふだんは喧嘩や殴り合いなんて友達や親にはしなくてすけどね。

（笑）

本当の最終決戦

「寒っ！」

ピューと吹いてくる冷たい風に寒がる私。

どこまで行っても景色が変わらない。

世界の車窓からの状態だ。

『本当ね。 砂漠の反対バージョンてきな感じかしら』

「そうだね」

ガチガチ震えていると、小さな休憩所があった。
オアシスといやつだろう。

「休憩しようか」

『そうしましよ』

私は椅子に腰掛けると持っていたギターを演奏した。

あまりチューニングしていなかったため音が少しばかり鈍かった。
ちなみにチューニングと言うのはギターの弦の音色を直すことだ。
作者もギターをやっていたらしい。

『どうでもいいでしょ、最後の説明』

いや、どうでもいいって……。と作者は思っている
私は思う。

「ふう。じゃハーブ！ 行こうか！！」

『ええ！』

私はまた歩き始めた。

でもやっぱり歩いてても歩いてても景色が変わらない。

スバル君はどこにいるのだろうか？

ただただそれしか思っていなかった。

その時だった。

「きゃっ！！」

雲が割れて下に落ちたのだ。

「マシンガンストリングー！！」

すばやくマシンガンストリングでギターの弦を伸ばし落下を防いだ。
改めて下を見ると、もう何も見えなかった。

私は恐怖に襲われた。

『落ちたら流石の電波人間でも死んでしまっわね……』

「あ…危なかった…」

風が強くなって、私の体重を支えている弦が切れそうになっていた。

『ミソラ！早く登らないと弦が切れちゃっわよー！…』

「うん！」

私はすばやく登って戻ってきた。

弦をギターへ戻すと全部の弦が切れそうになっていた。

私は弦を取り替えて、また歩き出した。

歩いていると、なにやら光っている物が見えた。急いで駆け寄ると、ロックマンの電波があった。

「スバル君!!」

目を閉じて横になっていたスバル君。

「ふふふ…また会えましたね…ハーブノート」

「誰!？」

後ろを振り返ると、カイパーの姿があった。

「カイパー!!」

「ここで待っていていれば又、会えると思っていましたよ。ロックマンを復活させるわけには行かない!!」

「私だってアンタに邪魔なんかさせない!!」

「だったら、カづくだ!!」

「ハーブ!!」

『ええ!!』

「ラストバトル！ライド・オン！！」

本当の最終決戦が今始まった。

本当の最終決戦（後書き）

どうでしたか？

カイパーも生きていたことにしちやいました！

100話まであと13話！

100話は泣かせて見ますよ〜！（笑）

感想待ってます！

本当の最終決戦<1>

「ショックノート!!」

「同じ技は効かん!Gソード!」

「それは、私も同じよ!」

私はカイパーの技を悠々とかわし楽な戦いをしていた。

「ママラガン!!」

いくつもの雷を落とす技だ。

前、もろに喰らってしまったので今でも鮮明に覚えている。

「バトルカード!インビジブル!!」

インビジブルはほとんどの攻撃を透明になって無効化に出来る。
原作でも沢山入れると戦略が立てやすい。

インビジブルを使ったため、攻撃を喰らわず済んだ。

「バトルカード!スカルアロー!!」

スカルアローはHITすると相手を一定時間動けなくするカードだ。

「くそっ!」

カイパーは喰らってしまったため動こうともがいている。

「バトルカード！エレキスラッシュュ！！」

「ぐはっ！！」

エレキスラッシュュは麻痺効果のある威力の高いソード攻撃だ。
非常に人気の高いカード（だと思っ）である。

攻撃をくらったためカイパーは麻痺している。

「まだまだよ！バトルカード！フラッシュュスピア！！」

フラッシュュスピアは盲目効果のある、連続攻撃のカードだ。

「がはっ！」

また、喰らったためカイパーは盲目状態に陥る。

「とどめよ！ショックノートセレナード！！」

「がぁぁ！！！！」

一気にかなりの大ダメージを受けたため、カイパーはひるんでいる。

「貴様には死んでもらおう。エンド・オブ・ザ・ワールド！！！！」

世界が揺れるように見える。

あなたの方からとてつもない波長が飛んでくる。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

私はかなりの大ダメージを受けた。
喰らって遠くまで飛ばされたぐらいだ。

立ち上がる時、かなりきつかった。
体のいたる部分から血が出ている。

「まだまだだ！！エグゼブラスター！！」

「きゃああー！！」

やられまくっている私。

下手したらこのまま死んでしまいかも知れない。

- - - - - ミソラちゃん!!

僕の目の前にはミソラちゃんがやられている無残なシーンが残されていた。

そして、死んでいる僕の体が少し温かくなった。

そんな気がした。

本当の最終決戦<1>(後書き)

どうでしたか？

なんか今日は更新しまくっている・・・。

背骨が悪化しそう・・・。

感想待ってます！

本当の最終決戦<2>

「ミソラちゃん!」

僕は真^{スバル}つ白な世界の中で叫んでいた。

「ウォーロック!何とかならないの?」

『残念ながら、もう俺とお前は死んでしまったからな…』

「そんなあ…ミソラちゃんも僕みたいな末路をたどって欲しくない
!」

僕は心の中の葛藤と戦っていた。

必死に思いを届けようにも届くはずは無かった。

もう、人が死ぬのは嫌だ。

僕はいつも思っていた。

死んでしまった時、僕は

「死んじゃったのか」

と思った。

わかりきっている事だが。

『スバル!』

「え!？」

なんと、外でミソラちゃんが血を流しながら戦っているシーンが出ていた。

でも、その血の量は尋常じゃなかった。

大量と中量の間ぐらいだと思います。

「ウォーロック!ミソラちゃんを助けに行こう!！」

『どっやって?』

「僕とウォーロックがミソラちゃんを助ける気持ちを強く願えばきっとなんとかなるよ!！」

『よっしや!』

僕とウォーロックは必死に願った。

「ミソラちゃんを守りたい!!!!!!!!!」

（ミソラ視点）

「きゃああー!!」

あれから連続攻撃を喰らってしまい、もう立てるほどの体力は残っていないかった。

「とどめだ!! Gソード!!!!!!」

もう駄目だ……………。

その時だった。

「何!!!？」

「何だと!？」

スバル君の体が光っていく。
時間がたつとどんどん大きくなって、
しまいには私たちまで光に飲み込まれてしまった。

「……………!!」

「どづいづことだ!!!？」

光の中から人がくる。
そして、光は青い光へと変わり、人が出てきた。

「ロッキーマン!!!」

出てきたのは最愛の人だった。

「ただいま！ミソラちゃん!!!」

スバル君が生き返ったのだ。

本当の最終決戦<2>(後書き)

どうでしたか？

やった・・・！！初の1日で5話も更新した・・・！！

めっちゃ疲れた・・・！！

最後はグダグダだったかもしれせん。

感想待ってます！！

本当の最終決戦く3

「ただいま！ミソラちゃん！！」

私は状況を把握できていなかった。

スバル君…いや、ロックマンがなぜここにいるのかという疑問しかなかった。

私はロックマンに訊ねた。

「スバル君…？」

「うん！正真正銘の星河スバル！！シューティングスターロックマンだよ！！」

私は立ち尽くしていた。

そして、立ち尽くしていると不意に涙が出てくる。

「スバル君…！！うわあ～～！！」

「泣かないでよ、ミソラちゃん」

「だって私、悲しかったんだもん…1人で…さびしかったんだよ…」

スバル君、もといロックマンの胸に私の顔をつけて

喜び・寂しさを交えた涙を流す。

そして、胸元で泣いてる私の顔をスバル君の温かい腕で包んでくれた。

「ミソラちゃん、本当にごめんね。あの時約束したのに…僕は本当

に悪い事しちゃったなと思ってるよ。僕はもう2度と君を1人にさせない！だから、泣かないで…」

スバル君の温かい言葉で私は泣き止んだ。

「オイオイ！恋愛ごっこもそこまでだぜ！！」

空気読めねえな…って私は思った。

カイパーは知性があるが、KYと言うことがわかった。

「ミソラちゃん！僕に手を貸して！！」

「うん！！」

私はスバル君と手をつなぎ互いに目を閉じた。

私とスバル君の魂が同調する。

私の魂が熱くなっていく。

そして、同時に地面も揺れだす。

その時、私の背中から翼が生えてきた感じがした。

そして、私たちは目を開けた。

後ろには巨大な翼が生えていた。

スバル君は私と融合した。

「な…なんだこれは！！？」

「僕は、シューティング・ハープ・ウィング・ノート！！」

スバル君と私が合体し、シューティング・ハープ・ウィング・ノートに変身した。

「翼ごと、へし折ってやる!!!」

「いくぞ!カイパー!!!」

スバル君とカイパーの最終対決が始まった!!

本当の最終決戦<3>(後書き)

どうでしたか？

今回は日本語の表現が非常に難しかったです(笑)

僕のどうでもいい話⁸

今日バドミントンのリーグ戦があって、ペアの子と頑張って戦いましたが1回戦は5点差で負けてしまいました…。でも、2回戦は互いに信じあって、4点差から逆転勝利しました！信じあうって大切ですね！(笑)

本当の最終決戦<4>

「行くぞ！カイパー！！」

「何をしようと、結果は同じだ！エグゼブラスター！！」

カイパーの繰り出す脅威の連射を、僕は空高く飛んで軽がると避けた。

「ウイングエアロ！！」

僕は風を巻き起こし、上昇気流を巻き起こした。

次第にたくさん風は竜巻へと変わった。

そして、竜巻はカイパーに突撃してくる。

「うわあああ！！」

カイパーは竜巻に飲み込まれ洗濯機のようにグルグル回っている。ようやく竜巻がよくなり、竜巻はかんに無くなった。その時間およそ20分。カイパーが回っていた時間という一次方程式が完成するのだ。

「くそっ……！万雷マンライガン！！」

いくつもの光の雷が僕に降ってくる。

「ウイングスピーン！！」

僕はグルグルまわり風のバリアを発生させた。

当然雷の効果は一切効かなかった。

「Uビーム!!」

今度は極太のレーザーを発射してきた。

「ウイングシューター!!」

僕は風に乗ってレーザーに真正面からぶつかっていった。当たった時レーザーがめちゃくちゃ痛かったが堪えていった。そして、レーザーを抜けるとカイパーに体当たりした。

「がはっ！」

僕は再びカイパーと距離をとると、カイパーは血だらけになっていた。僕もさっきのレーザーで血だらけになっていた。

「どつやら、次の攻撃で最後のようだな……」

「うん、僕は君に勝つ！いくぞ、カイパー!!」

「うおおお！エンド・オブ・ザ・ワールド!!……!!」

「シャイニング・ウイング・マグナム!!」

2人の攻撃が互いにぶつかり合う。ほぼ互角の強さだった。

そして、結果は…

「がああああ！！！」

僕の勝利だった。

「くそっ…2回も負けるなんて…ロックマン…覚えてろおお！！！！」

そして、カイパーは完全にデリートされた。

僕はミソラちゃんと分離して変身を解除した。
その後、僕らはウエーブアウトをした。

「スバル君！凄かったね！！」

「……………」

僕はその場で倒れてしまった。

「スバル君！！誰か、救急車！！」

僕は救急車で運ばれるのだった。

本当の最終決戦<4>(後書き)

どうでしたか？

なんか、また急展開になりました・・・。

僕のどうでもいい話9

今日アイポッドで昔「エースを狙え！」の主題歌だった「愛のために。」をPVつきで歌ってみました。

上戸彩を見ていた僕は

「なんか00君に似ているな」と思い友人に聞いたら

「それでもないよ」

っていわれました・・・。

僕はあるまり似ている似ていないの区別が出来ないんだなと実感されました・・・。

衝撃の報告

救急車の中で私は泣きながら叫んでいた。

「スバル君！！ スバル君！！」

さっき私の顔を胸に当てて言うてくれたよね。

僕はもう2度と君を一人にはしないよ。

悲しくて仕方が無いよ。

悲しんでいると、救急車が病院に着いた。

スバル君は診察室に運ばれて、私は一人でスバル君を待っていた。

『ミソラ……』

「大丈夫。スバル君なら絶対帰ってくる。だって…シューティングスターロックマンだから……」

『……そうね』

私たちが話をしていると、スバル君の診察が終わった。すると、私はお医者さんに部屋へ呼ばれた。

私は診察室に入ると、お医者さんは話を切り出した。

「サインいただけます？」

そこから始まるのかっ!!

と、私は思ったが口にはせず

「はい、良いですよ」

と喋ってサインを書いた。

「ありがとうございます」

このタイミングでお礼って……。

「では、本題に入ります」

そういうと、お医者さんはレントゲン写真みたいなものを取り出し壁に貼った。

「響さん。こちらを見てください」

そういわれた私はお医者さんにいわれた場所を見た。

すると、スバル君の骨にかなりの罅ひびが入っていることに気がついた。

「これって……」

「骨折です。そうとうな罅が入っているのがわかりますね？」

「ここは、一体？」

「このレントゲンは星河さんの腕です」

「腕ですか？」

私は腕にこんなに酷い罅が入っているのははじめて見た。

私も骨折したことがあるのだがここまで酷くは無かった。

「このままだと、手術になってしまうかもしれない」

「手……術……」

「成功率はおよそ30パーセントですね」

その言葉をきいて、私は視界が真っ白になった。

衝撃の報告（後書き）

どうでしたか？

今回はなんか、大変でした・・・。

あと、この小説もあと8話。

もう、終わっちゃいますね・・・。

最後までお付き合いよろしく願いしますね！

自己嫌悪

「成功率は30パーセント……下手したら10パーセント未満かも知れませんか……」

「そんなあ……」

「響さん、私たちも全力を尽くして星河さんを助けます。だから安心してください」

「はい……」

お医者さんとの会話を終えて私は外の待合室で座っていた。座っているのは私1人。

「30パーセント……」

それは、10回手術して3回の確率で成功する確率だ。

「10パーセント未満……」

それは、100回手術して、1回〜9回の確率で成功する可能性だ。私にとってこの現実はかなりキツイ。

私自身も手術したことあるが、ここまで酷い怪我はしたことがなかった。

『大丈夫よ。スバル君はあなたを置いて行ったりしないわ』

「……スバル君に相談しよう」

そう言っつて私は席を立ち、歩き始めた。

エレベーターを乗り継いでスバル君の病室を目指した。

エレベーターに乗っているときいろいろな人の視線を浴びるが

そんなことは慣れてしまっているためあまり気にはならなかった。

そうこうしている内にスバル君の病室へついた。

8 G 星河 ^{スバル} 昴様

と、かかれた表札にはかなりの寒気がした。

私はノックをして、部屋に入った。

中に入ると、スバル君が一人、寝ていた。

病室の中は1人部屋なのかスバル君しかいなかった。

病室は独特のにおいがした。

私は椅子に座るとベッドの布団から出ているスバル君の手をゆっくり握り締めた。

「スバル君……！」

手を握り締めていると、不意に涙が出てきた。

『ミソラ、泣かないで……』

ハーブの声も届かず、私はスバル君の手を握り締めながら泣いていたのだった。

私はなんでこんなに悲しい思いをしなくてはならないのだろうか。傷ついて、悲しんで、怒って…。

どこかから負のスパイラルにでも巻き込まれたのだろうか。

それとも私が

悲劇のヒロイン

だからなのだろうか。

だからといって、このままは嫌だ。

自己嫌悪に陥っているとスバル君が目を覚ました。

自己嫌悪（後書き）

どうでしたか？

今回はなんか意味がわからなかったですね・・・。

只今、旅行に出かけていてホテルから
更新しています！

いろんな人の視線を浴びるので

ちょっと怖いです・・・。

確信

「み……ミソラちゃん？」

「スバル君！」

とうとう目が覚めたようだ。

私は流れ落ちてくる滴を拭いて、会話を続けた。

「具合はどう？」

「大丈夫だよ。ッ！！」

スバル君は腕を抱えて痛がっていた。

「大丈夫！？」

「うん、本当に大丈夫だよ。ごめんね、また心配かけちゃって……」

「いいよ、生きていてくれるだけ私は嬉しいよ！」

「ありがとう」

また、落ちる沈黙。

なんか沈黙になると不安を感じる。

（今のままでは成功率は30パーセント……いや10パーセント未満
かも知れません……）

脳裏にお医者さんで言われた言葉がよみがえってくる。

私は悩んだ。

ここで、本当のことを打ち上げるべきなんだろうか？

でも、本当の事を言ったらスバル君が傷付くかもしれないし……。

私は心の中でおきる葛藤と戦っていた。

私はどうすればいいのだろうか……。

「ミソラちゃん、どうしたの？」

スバル君の一言で我に返る私。

「うんうん！ なんでもないよー！」

明るく振り舞う私。

でも心の中では暗い気持ちと戦っていた。

「僕は、いろんなことを学んだと思う」

「え？」

スバル君の突然の一言でびっくりしてしまった私。

「最初は、誰とも関わりたくない…。そんな気持ちだった。でも、ミソラちゃんとブラザーになって一歩前へ踏み出せた。」

「うん……」

「そのおかげでいろんなことを学んだ。絆の大切さ・人を護ること……。学んで、人間として強くなったと思う」

「うん……」

さっきから同じ反応しかしていない……。

「だから、困難にぶち当たっても絆の力で僕は乗り越えていけると思っただ」

この言葉を聞いて私は確信した。

スバル君に本当の事打ち明けよう。

「スバル君!!」

「な…何?」

スバル君は私の大声にびっくりしてしまったようだ。

「スバル君が手術で成功する確率は…30パーセント、いや10パーセント未満かも知れないって…」

「本当なの……?」

「うん」

スバル君は泣きそうになっていた。
でも涙は堪えていた。

そのとき、スバル君は私の泣きそうになっていた顔を
スバル君の胸に持っていかれた。

スバル君の胸は温かった。

男の子なんだなあ……と不意にも感じてしまった。

「大丈夫。1パーセントでも可能性があるなら、僕はきつと帰って
くる。絶対に」

「わかった」

その後私の顔は翌朝になるまでスバル君の胸の中にいた。

確信（後書き）

どうでしたか？

また、ホテルで更新しちゃいました（笑）
なんか今回は長くしちゃいました。

ぼくのどうでもいい話10

「お前、将来どうするんだ？」

「うーん・・・愛教大にいつて教師になるよ」

いきなり、父さんに将来の夢を聞かれてびっくりしました。
まあ元々教師になるのが夢だからいいんですけどね。

手術開始

翌日。

ある意味運命の日がやってきた。

私はベッドから目を覚ますと、ハーブに声をかけた。

「ハーブ？」

『ポロロン。どうしたの？』

「今日が手術の日なんだよね……」

『ええ。でもきつと大丈夫よ。』

私はベッドからでて、目を擦りながらテレビをつける。

め00し00ビは、私がグルメの取材をやっていた。

テレビを放置して、私は台所へ行く。

しばらく来ていなかったなので、周りはほぼ蛻もめけのの殻から的な状態だった。

私は大急ぎで朝食を作り、朝食を摂る。

朝食・洗顔など準備を済ませ、電波変換し、病院へと急ぐ。

手術は10時から。

今は9時47分。

急げば全然間に合う時間だ。

ウェーブロードを進んでいくと病院が見えた。

「いそぐよ、ハープ!!」

『ええ!』

手術室へつくと、スバル君が中に入っていた。
今から手術が始まるのだろう。

中から声が聞こえる。

「今から手術を始める。メス。」

「はい」

私は固唾をのんでスバル君を見守っていた。

頑張つて!スバル君!!

「ヒカル」

『ああ？』

「僕：そろそろいいかな？」

僕はナンスカの遺跡で誰もいない中喋っていた。
ツカサ

『大丈夫だ。俺もやり過ぎた』

「じゃあ、大丈夫だね」

『ああ』

僕はナンスカの遺跡を後にして、ナンスカの中央へいった。
そこにはゴンターガの像がいまでも置いてあった。

「なんじゃ？帰るのか？」

村長が僕に話しかける。

「ええ。お世話になりました」

「そうか。気をつけてな」

僕はナスカの柱の近くで電波変換して、叫んだ。

「電波転送！スカイウェーブ！オン・エア！！」

僕は空へ来て、小さく呟いた。

「スバル君」

手術開始（後書き）

どうでしたか？

久々にツカサを出してみました！

コイツが鍵なんだよな……。はい、何でもありません（笑）

僕のどうでもいい話11

皆さん、ギターフリークスというゲームをご存知ですか？

僕はこのゲームを3歳からやっています！

なんで、このゲームだけは負ける気が一切しません（笑）

勝負したい人。かかってきなさい！（笑）

手術終了

スバル君の手術が始まっておよそ4時間。
未だに手術中の表示は消えないままだ。

手術室の中はスバル君の腕が解剖されていた。
もう、骨が見えるぐらいに。
相当グロテスクだった。

『スバル君、頑張っているわ』

「え？」

『心の声が聞こえてくるわ』

一瞬ハープは「妖精か？」って思った。

「なんて聞こえるの？」

『それは……』

（スバル視点）

「まだ、手術終わらないのかな？」

『さあな。手術なんて面倒くさいぜ……』

「そう言われても…」

返事に困る僕。

僕はまだ麻酔にやられていて、意識は真っ白のままだ。

『ともかく、手術が終われば一安心なんだろう？』

「まあそういうことかな」

麻酔の意識の中で、僕とウォーロックの会話が続いていた。

〈ミソラ視点〉

私はスバル君の体を見つめている。

だが、見れば見るほど胸が苦しくなってくる。

だったら見なければいい。

でも、そんなわけには行かなかった。

だって愛人を最後まで見届けたいから。

『ミソラ!』

「え?」

ハーブが見た場所を見ると

「手術中」の表示が消えていた。

手術が終わったのだろう。

中からお医者さんが出てきた。

「手術は……」

私は一瞬固唾をのんだ。

「無事、成功しました」

私は表情が不安から喜びに変わった。

〈ツカサ視点〉

「ヒカル」

『どうした？』

「スバル君…元気になっているかな？」

『さあな。ウォーロックも心配だがな』

僕たちは今ドンブラー湖のスカイウェーブを渡っている。
スバル君にヒカルのコントロールに成功したと言う報告をするため
に。

「待っててね、スバル君」

僕は道をひたすら進んでいった。

手術終了（後書き）

どうでしたか？

あと、4話・・・。

もう、フィナーレに近づいている・・・。

あ、続編はまだ秘密ですよ（笑）

今日は仕事があつたので更新が出来ませんでした。
読書の皆様。申し訳ありませんでした。

退院

「手術は成功しました」

そう言ってお医者さんは去っていった。

私は立ち尽くしていると、スバル君が台の上に乗せられて出てきた。

スバル君が私の目の前を横切っていくとお医者さんが私に話しかけてきた。

「手術は完了しました。一応腕の骨と骨をつまぐ接合しました。完全に接合が終わるのは1週間後ぐらいだと思われます」

「と言うことは1週間後には退院できるんですね？」

「そういうことになります。では、ここで」

お医者さんが去っていくと、私はスバル君の部屋を目指しダッシュした。

スバル君の部屋を開けてみるがまだ誰もいなかった。

恐らく、スバル君は来ていないのだろう。

10分後。

待っていると、スバル君が松葉杖を使いながら帰ってきた。

「スバル君！」

「ミソラちゃん！ ありがとう！！」

「え？何が？？」

なぜ、ありがとつと言われたのか分からず聞き返した。

「ミソラちゃんが僕を信じてくれたから、僕は帰って来れたんだよ！」

「スバル君…」

私は信じていた。

絶対に帰ってくるよ。

信じていたからスバル君はきっとここにいるのだろう。

「とりあえず、中に入るうか」

「うん」

私たちは中に入って、他愛の無い話をした。
時間がたつのを忘れてしまっぐらい。

それほど私とスバル君は仲がよくなっただらうな。

それほど私とスバル君は一緒にいるんだらうな。

好きな人といれば時間がたつのを忘れてしまう。

喉もと過ぎれば暑さを忘れるとはこの事だらうか。

一週間後……………。

「退院おめでとうございます!!」

看護婦さんの第一声で周りの人も歓声を出した。

「ありがとうございます!!」

1週間後。

スバル君は無事に退院が出来た。

退院（後書き）

どうでしたか？

なんか、ことわざあってるかな・・・???

あと、3話・・・。

読者の人を感動させれるか心配です・・・。

あと、もししばらくお付き合いよろしくお願いします!!

感想待ってます！

家路

僕は無事に退院することが出来た。

成功率が低かった手術も無事に成功して、本当によかったなっと思っ
ている。

多分ミソラちゃんが僕のことを信じてくれなかったら手術は最悪の
展開になっていたかもしれない。
でも信じてくれたから僕は今この地面を歩くことが出来るのだ。

「ミソラちゃん、最近仕事は大丈夫なの？」

「明日から本格的に始まるよ！だから当分会えなくなるかもしれない
い……」

「どれぐらいなの？」

「多分3ヶ月以上かな……？」

3ヶ月。

当分どころかかなりあえなくなる。

今日がミソラちゃんと遊べる最後の日なのかもしれない。

「そっかあ……ミソラちゃん、小学生なのに大変だね」

「私のレゾン……知ってるでしょ？」

レゾンと言うのは簡単に言えば目標という意味だ。

「え？」

「皆を笑顔にする素敵なアイドルになる！だよ！忘れてたの？」

「いやいや、忘れてないよ！」

ミソラちゃんは前こういつてた。

私の歌で皆を幸せにしてあげたいな！

この言葉からレゾンが生まれたのだろう。

「「ただいま」」

「お帰り！スバル・ミソラ！」

母さんがもう帰っていた。

今日はパートが早く終わったのだろう。

「今日のご飯は200カレーよ！」

「なんで、200なの？」

僕が疑問を發した。

「200年前の味のカレーよ！昔のロックマンも食べていたのよ」

「ロックマン！！？」

「どっしたの？」

「いや…なんでもないよ」

ここで、僕もロックマンなのに!!とはいえない。でも、早く食べたい気持ちが溢れていた。

僕とミソラちゃんはリビングでテレビを見ているとご飯が出来上がったようだ。

僕とミソラちゃんと母さんが席に着くといただきますと言いついた。カレーを口に入れた。

「うまい!」

僕はつい大声で言ってしまった。ミソラちゃんと母さんは爆笑する。

ご飯が食べ終わると僕はミソラちゃんを呼び止めた。

「展望台行かない?」

「いっよー」

こうして、僕と、ミソラちゃんは展望台へと向かった。

くツカサ視点く

「スバル君」

僕は展望台を上から見ていた。

家路（後書き）

どうでしたか？

今回は久しぶりに長くしました。

僕のどうでもいい話 1 1

GW今日で終わりですね。

なんか明日から本格的に部活が始まるので足がかなり痛くなります。

でも、昨日の仕事で足が今でも痛いんですね・・・。

誰か、足を治す方法しりませんか？（笑）

ハレー彗星

私はスバル君に呼び止められて展望台へと一緒に向かった。

スバル君の体が妙に震えていた。
寒いのだろうか。

「スバル君、寒い？」

「え？まあちよつとだけ」

「パーカー貸そっか？」

「え！？だ…駄目だよ！！」

スバル君は顔を赤くしながら拒否した。

「なんで？」

「だって、女の子は…か…体を…ひ…冷やしちゃだ…駄目でしょ！？」

スバル君のちぐはぐな言葉に笑ってしまった私。

「大丈夫だよ！ ほら着なよ！」

私はパーカーを脱いでスバル君に着せてあげた。

「あ…ありがとう」

スバル君がさつきまで男の子だったのに
パーカーを着せたらボーイッシュな女の子に変身した。

私も寒かった。

だって、パーカーを脱いだらシャツとハーフパンツの格好になった
から。

夏なのに結構寒かった。

ちよつと違つが「寒の戻り」って言うやつなんだろうなと思った。

そういうしている内に展望台についた。
誰もいない展望台を星が照らしている。

「ミソラちゃん」

「何？」

女の子になったスバル君が私に話しかけてきた。
なんか不覚にもかわいいと思つてしまった。

「今日はハレー彗星が見えるんだよ」

「ハレー彗星？」

「ハレー彗星というのは約76年周期で見られるレアな彗星だよ。
周期彗星のなかでは一番有名なんじゃないのかな？」

「そうなんだ」

もしかして、スバル君はこれを見せたかったのかな？
そう思う私だった。

「あと20分ぐらいで見えるよ」

「一回聞いてみよう。」

「スバル君」

「何？」

「なんで急にハレー彗星を見せようと思ったの？」

「それは……」

スバル君が途中で言葉を詰まらす。
いえない訳でもあるのだろうか？

「何？」

「それは……ミソラちゃんに最高のプレゼントをあげようと思
ったからだよ」

最高のプレゼント。

それはハレー彗星。

またの名を、最高の夜空。

「最高のプレゼント……？」

「うん…駄目だったかな？」

「ありがとうスバル君……！！」

私は感謝の涙を流した。

嬉しくて嬉しくてしょうがなかった。

「もう8分で見えるよ」

私とスバル君が夜空を見てると誰かが声をかけてきた。

「スバル君、ミソラちゃん」

「君は……！！？」

その時、あの少年が現れたのだった。

ハレー彗星（後書き）

どうでしたか？

さあ！次回で最終回です！！

最終回の後で皆さんにお伝えしなくてはならないことがあります。

それは、お楽しみに（笑）

では、最終回を楽しみにしててください！！

Each other

「ツ…ツカサ君!？」

「久しぶり!スバル君、ミソラちゃん!」

「ど…どうして!?!ナンスカにいたんじゃないあ…」

僕は目の前にツカサ君がいることが信じられず
パニックになっていた。

ミソラちゃんも啞然とした表情になっている。

「ヒカルのコントロールなら大丈夫だよ」

「そうなんだ…」

ツカサ君は以前両親に幼くしてゴミ捨て場で捨てられた。

両親への怒り・復讐がツカサ君のもうひとつの人格を作ったのだ。

ツカサ君はもうひとつの人格の名をこう名づけた。

ヒカル…と……

復讐の人格からFM星人ジェミニに取り付かれ
僕と戦った。

僕がツカサ君を制止させると、ツカサ君は罪滅ぼしでナンスカへと
旅立った。

目的はただひとつ。

ヒカルのコントロールである。

ツカサ君は今コントロールに成功し、この大地に立っているのだ。

「あっ！もうすぐだよ！！」

僕がミソラちゃんとツカサ君に言うと僕たちはベンチに座って夜空を眺めていた。

すると、夜空が突然光だした。

「……うわあ……！！！！」「……」

夜空から光を出し大きな彗星が流れていく。

ハレー彗星だ。

76年に1回見られる、ハレー彗星だ。

僕たちは神秘的に光りながら流れているハレー彗星に見とれていた。

ウオーロックとハーブとジェミニも同じく見とれていた。

「スバル君」

「何？」

「僕、分かったんだ。このたびに出て」

「どんなことなの？」

ツカサの顔が明るくなった。

そして、口を開いた。

「それは、復讐からは何も生まれない。ただ、自分が苦しむだけなんだってことなんだ。」

復讐したら相手は沢山傷つき、自分自身だって傷つく。

世界の様子だってそうなんだよ。

復讐したいから戦争する。

戦争したら、相手と自分が傷つくし、戦争に関係ない人だって傷ついたり死んでいたり……悲しいことしかない。

きっとカイパーというスバル君たちが戦った人もそうなんだよ。

自分だって本当は人を傷つけたくは無いです。

そんな気持ちだったんだなって思う。

復讐するっていう気持ちを持つよりもっといい選択肢は無いのかな？人を傷つけるようなことをして、何がいいの？

そういう気持ちが起こらなかった自分が情けない……。

だったら悪いところを直して、次に生かしていかなければならないんだ。

それが今の僕に出来る、最大限のことだと僕は思う」

ツカサ君は大人になったんだな。

僕と会っていない間にこんなに遅しくなったんだと実感した。

「じゃあ、僕また行くよ」

「「え？ どこに？」

「もつと世界を見て行きたいんだ。この世界の美しさを……発見したいんだ」

「そっかあ、頑張ってね！！」

「うん…！」

こうして、ツカサくんは行ってしまった。
僕とミソラちゃんはハレー彗星を見つめていた。

「最高の…プレゼントになったかな？」

「うん…！　ありがとう…！」

「僕は…！」

僕は口ごもって、間を空けてまた話した。

「僕は君といつまでも、夜空のようにキズナで繋がっていたいんだ」

僕はミソラちゃんにそっと、言ったのだった。

その時、ミソラちゃんは涙を流しながら頷くのだった

。

E a c h o t h e r (後書き)

どうでしたか？

感動なんてしなかったと思いますが、無事に

物語が完結いたしました！！

みなさん応援ありがとうございました！

で、重大発表はすぐに投稿しますので

少々お待ちくださいね！

では！！

作者の言葉

どうも！

勇輝です！

え〜この小説も無事完結致しまして、僕も本当に嬉しい気持ちでいっぱいです！

皆さんには感謝・感謝です！

本当に応援ありがとうございました！

そして、僕は自分自身の修行と、背骨の治療などで執筆活動をしばらく休止したいと思えます。

誠に申し訳ございません。

というわけで皆様には迷惑をおかけします。

本当にすみません。

でも、これだけは約束します！

絶対次回作を出します！

いちおう予告をしておきますね！

予告

「曉さん！なんて無茶なこといつてるんですか！！？」

「だから、世界一周をミソラとしてこいって」

では、読者の皆さん。

そろそろお別れの時がきました。

皆様には感謝をしております！

褒めてくださった方・鞭をいれて鍛えて下さった方・僕の友人。

僕は幸せの気持ちでいっぱいです！

では、みなさん。

また会える日まで！！

See you again……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3355g/>

流星のロックマン【スペシャル・ストーリー】

2010年10月9日19時52分発行